



IBM i

IBM i 接続
オペレーション・コンソール

7.1





IBM i

IBM i 接続

オペレーション・コンソール

7.1

ご注意

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、83 ページの『ソフトウェア・トピックの特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM i 7.1 (製品番号 5770-SS1) に適用されます。また、改訂版で断りが無い限り、それ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。このバージョンは、すべての RISC モデルで稼働するとは限りません。また CISC モデルでは稼働しません。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM i
Connecting to IBM i
Operations Console
7.1

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2010.4

© Copyright International Business Machines Corporation 2000, 2010.

目次

オペレーション・コンソール	1
IBM i 7.1 の新機能	1
オペレーション・コンソールの PDF ファイル	2
オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画	2
構成に関する考慮事項の計画	2
コンソールの計画の考慮事項	2
バックアップ・コンソールの計画	5
オペレーション・コンソール要件の検証	7
オペレーション・コンソールのハードウェア要件	7
オペレーション・コンソールのソフトウェア要件	9
オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードの計画	10
ネットワーク環境の準備	11
オペレーション・コンソール構成の保護	13
オペレーション・コンソールおよび System i Navigator構成の準備	18
シナリオ: 構成の理解	19
シナリオ: 複数システムまたは複数区画のためのコンソール	19
コントロール・パネルに関する考慮事項の計画	20
リモート・コントロール・パネル	21
オペレーション・コンソールのための PC の準備	21
セットアップ前提条件チェックリストの完了	22
ネットワーク上のローカル・コンソールのセットアップ	22
Windows XP 用の前提条件チェックリストの完了: ネットワーク上のローカル・コンソール	22
Windows Vista 用の前提条件チェックリストの完了: ネットワーク上のローカル・コンソール	22
必要な前提条件タスクの完了	23
IBM i Access for Windows のインストール	23
IBM i Access for Windows Service Pack の適用	24
PC でのオペレーション・コンソールの構成	25
ネットワーク (LAN) でのローカル・コンソールの構成	26
オペレーション・コンソールの管理	28
オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー	29
テークオーバーの詳細	30
リカバリーの詳細	30
コンソールのテークオーバーを使用可能にする	32
シナリオ: テークオーバーおよびリカバリー	33
シナリオ: テークオーバーが使用可能な状態でのみ LAN に接続された装置	33
コンソール構成の管理	33
ローカル・コンソールのシステムへの接続	34

別のシステムへの接続	34
コンソール構成の変更	34
ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールの変更	34
コンソール構成の削除	35
「プロパティ」ページの使用	35
オペレーション・コンソールのウィンドウのカスタマイズ	36
複数コンソールの管理	37
ネットワーク上の複数のローカル PC コンソール	37
コンソール・タイプの変更	38
現行コンソールが操作できないときのコンソール・タイプの切り替え	39
平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更	39
区画されていないシステムでの、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更	40
論理区画内での、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更	41
平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールへ変更後に新しいコンソール・タイプを使用するための PC の構成	42
ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更	42
区画されていないシステムでの、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更	43
論理区画での、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更	44
ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更する際の、PC でのオプション・ステップの実行	45
ネットワーク上のローカル・コンソールの管理	46
キーボード定義の変更	46
3179 と 3477 との間のエミュレーターのモード変更	46
手動 IPL を使用したシステムの始動	47
コンソールのサービス機能 (65+21) の使用	49
OPSCONSOLE マクロの使用	51

SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック	52
オペレーション・コンソールの単純化	53
保守ツール装置 ID のパスワードの変更に 関する考慮事項	55
PC およびシステム上で、保守ツール装置 ID のパスワードを変更	56
アクセス・パスワードの変更	56
PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同 期	57
システム上の保守ツール装置 ID のパスワ ードのリセット	58
PC 上の保守ツール装置 ID パスワードのリ セット	61
システム上での保守ツール・デバイス ID の作 成	61
装置 ID の自動作成オプションの値の変更	62
自動作成デバイス ID の RCP 特権の変更	63
保守ホスト名 (インターフェース名) の構成	63
オペレーション・コンソールでの LAN アダプ ター・カード使用の割り振り解除または移動	65
オペレーション・コンソール (LAN) のネット ワーク値の変更	66
PC の変更の完了	68
オペレーション・コンソール接続のトラブルシュー ティング	69
状況メッセージのトラブルシューティング	69
構成が正常に実行されている場合の状況メッセ ージ	70
接続に関する問題がある場合の状況メッセージ	70
接続の問題のトラブルシューティング	71
ローカル・コンソールの接続に関する問題	71
ネットワーク接続のエラー	71
エラー・メッセージ: システムへの接続がセ キュアな接続ではない (The connection to the system is not a secure connection).	72
ローカル・コンソールの状況が接続中のま まである	72

予期しない切断	72
認証の問題のトラブルシューティング	72
認証エラー	72
エミュレーターの問題のトラブルシューティング	73
システム参照コード・データのトラブルシューテ ィング	73
システム参照コード A6nn500x	73
システム参照コード A6005001、A6005004、お よび A6005007	74
システム参照コード A6005008	74
システム参照コード A6005082	76
システム参照コード A9002000	77
IPL ステップ C6004031 が予想以上に時間がか かる	77
リモート・コントロール・パネルに関する問題の トラブルシューティング	77
リモート・コントロール・パネルが開始に失敗 する	77
モード機能を使用できない	77
認証問題	78
構成ウィザードの問題のトラブルシューティング	78
古いネットワーク・データがネットワーク接続 の再構成を妨げる	79
その他のオペレーション・コンソールの問題のト ラブルシューティング	79
オペレーション・コンソールが QCTL に残る	79
システム要求が作動しない	79
パスワードの逸失または失効、または使用不可 のユーザー ID のため、サインオンできない	79
ユーザーは選択したオプションを実行できませ ん	80
オペレーション・コンソール関連情報	80

付録. ソフトウェア・トピックの特記事項 83	
プログラミング・インターフェース情報	84
商標	85
使用条件	85

オペレーション・コンソール

オペレーション・コンソールは、ご使用のシステムにアクセスし管理するためのシステム・コンソールとして機能します。

IBM® は、ターミナルまたは PC によってアクセス可能な管理コンソールを提供することにより、システムとの対話を容易にしています。オペレーション・コンソールは、IBM i Access for Windows® ライセンス・プログラムのインストール可能なコンポーネントです。オペレーション・コンソールを使用すると、多くの管理機能を容易にして、1 台または多数の PC からローカルまたはリモートのいずれかで、コンソールおよびコントロール・パネル機能にアクセスして制御できます。

オペレーション・コンソールは、IBM i Access for Windows または IBM パーソナル・コミュニケーションズのいずれかで提供される 5250 エミュレーションを使用して、コンソールをエミュレートします。システムのコントロール・パネルをエミュレートするために、オペレーション・コンソールではグラフィカルなコントロール・パネルが用意されています。システムと PC 間の通信を可能にするため、オペレーション・コンソールではローカル・エリア・ネットワーク (LAN) および TCP/IP 接続を使用できます。これらのリモート PC は、簡単なシステム管理およびアクセスが可能なコンソールとして機能します。

認証およびデータ暗号化が強化され、コンソール・プロシージャのネットワーク・セキュリティーが提供されています。オペレーション・コンソールのネットワーク接続では、証明書を使用せずに装置認証とユーザー認証をサポートする Secure Sockets Layer (SSL) の一種を使用します。

System i® ハードウェアの管理にオペレーション・コンソールを使用することを計画している場合は、IBM Systems Hardware Information Center の『オペレーション・コンソールの管理』トピック・コレクションを参照してください。

関連情報

 [オペレーション・コンソールの管理](#)



IBM i 7.1 の新機能

オペレーション・コンソールのトピック・コレクションの新しい情報または大幅に改訂された情報は、次のとおりです。

- | • 直接接続のローカル・コンソールは、サポートされなくなりました。
- | • Windows 2000 は、サポートされなくなりました。

新規情報または変更情報の見分け方

技術上の変更が加えられた場所を見分けるのに役立つように、Information Center では以下のイメージを使用しています。

-  イメージにより、新規または変更された情報の開始点を示します。
-  イメージにより、新規または変更された情報の終了点を示します。

PDF ファイルでは、左マージンに新規および変更情報のリビジョン・バー (l) があります。

今回のリリースの新規情報または変更情報に関するその他の情報は、プログラム資料説明書を参照してください。

オペレーション・コンソールの PDF ファイル

この情報の PDF ファイルを表示または印刷できます。

この資料の PDF 版を表示またはダウンロードするには、オペレーション・コンソールを選択します。

PDF ファイルの保存

表示または印刷のために PDF をワークステーションに保存するには、以下のようになります。

1. ご使用のブラウザで PDF リンクを右クリックする。
2. PDF をローカルに保存するオプションをクリックする。
3. PDF を保存したいディレクトリーに進む。
4. 「保存」をクリックする。

Adobe® Reader のダウンロード

これらの PDF を表示または印刷するには、Adobe Reader がご使用のシステムにインストールされている必要があります。このアプリケーションは、Adobe Web サイト

(www.adobe.com/products/acrobat/readstep.html)  から無償でダウンロードできます。

オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画

オペレーション・コンソールのセットアップを開始する前に、オペレーション・コンソールを最も適切に構成する方法を判別します。

計画要件を完全に満たした後で、ご使用のシステム用のオペレーション・コンソールの前提条件をリストする、セットアップ・チェックリストを作成します。

関連概念

21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

構成に関する考慮事項の計画

オペレーション・コンソールの構成を計画するには、さまざまなオペレーション・コンソールの構成において許可されている、特定の接続タイプを調べる必要があります。

ここに記載されたシナリオでは特定の構成例が示され、ユーザーのニーズに最も合致するコンソール構成を選択する場合に役立ちます。事前に計画を立てる場合、構成に追加機能を組み込むことができます。

重要: 新しいシステムのセットアップをサービス担当者に依頼する場合は、コンソールとして使用する PC をシステムに接続する準備を整えておく必要があります。また、すべてのケーブルを準備し、すべてのソフトウェアをインストールしておくことも必要です。例えば、Windows オペレーティング・システムおよび IBM i Access for Windows を PC にインストールしておく必要があります。

コンソールの計画の考慮事項

1 つ以上のシステムに対するオペレーション・コンソールを計画する場合には、次の点を考慮してください。

以下の情報は、すべてのシステムに該当します。

- 以前のバージョンの IBM i と異なり、このリリースおよび以降のリリースでは、現在構成されているコンソール・タイプのみをサポートします。新規の論理区画を作成中の場合など、コンソール・タイプが指定されていない場合には、作成プロセスで指定された支援ハードウェアの IOP が優先されます。使用可能なハードウェアに、選択したコンソール・タイプ用のアダプターが複数含まれている場合は、接続する最初のコンソール・ワークステーションがコンソールとなるように構成されます。
- 「コンソールのリカバリーを許可する (Allow console recovery)」および「コンソールを別のコンソールでテークオーバーすることができる (console can be taken over by another console)」という、特別な一連のコンソール・オプションもあります。この一連の機能により、オペレーション・コンソールが他のコンソール装置から制御を引き継ぐことが可能になります。このコンソール・オプションのデフォルト値は使用不可です。
 - このオプションが使用可能になると、次のようになります。

最初に接続されたオペレーション・コンソール装置がコンソールになります。追加の LAN 接続オペレーション・コンソール装置は、特殊 DST サインオンを持ちます。

他のすべての 5250 ベースの接続は、新規の「コンソール情報状況 (Console Information Status)」ウィンドウを持ちます。

ジョブの損失のないコンソール・リカバリーが可能です。

- このオプションが使用不可になると、次のようになります。

すべての 5250 ベースの接続は、新規の「コンソール情報状況 (Console Information Status)」ウィンドウで表示されます。

ジョブの損失のないコンソール・リカバリーが可能ではありません。

- 以下のルールに留意すれば、オペレーション・コンソール (ネットワーク (LAN)) と平衡型ワークステーションを、コンソール装置として共存させることができます。
 - 活動状態にできるコンソール装置は、一時点で 1 つだけです。
 - 平衡型コンソールが選択されているコンソール・タイプである場合は、平衡型ワークステーション・コントローラー・アダプターのポート 0 (アドレス 0 または 1) またはポート 1 (アドレス 0 または 1) に接続された平衡型ワークステーションをコンソール装置にすることができます。コンソール・タイプとして平衡型コンソールが選択されている場合、オペレーション・コンソール装置が開始されない可能性があります。
- オペレーション・コンソールでは、単一のシステムまたは論理区画に対して複数の LAN 接続が可能ですが、同時にシステムの制御権を持つことができる 5250 セッションは 1 つのみです。活動状態のコンソールは、現在システムと対話中の 5250 エミュレーションまたは IBM パーソナル・コミュニケーションズによる、システムへのコマンド・インターフェースです。複数のオペレーション・コンソール装置が画面上でデータを持っている場合でも、実際にアクティブなのは 1 つのみです。
- IBM i モデルは、論理区画を 0 ではなく 1 から数え始めます (区画が 1 つしかない場合も同様)。コンソールを正しく接続するには、クライアントの構成が論理区画に一致している必要があります。ネットワーク・データを使用したシステムの構成を BOOTP プロセスに依存している場合、この構成は、特に重要です。
- また、クライアント PC では、単一 PC のシステム構成に複数のローカル・コンソール接続を持たせることが可能です。
- オペレーション・コンソール PC クライアント当たり、最大 26 のオペレーション・コンソール・アクティブ・エミュレーター・セッションが使用可能です。

- オペレーション・コンソールを、ストレージ・デバイスと同じ IOP に配置しないようにしてください。
 - この構成が避けられない場合もあります。
 - ストレージ・デバイスが集中的に使用されていると、コンソールが一時的に処理を停止しているように見えることがあります。処理はすぐに再開されます。コンソールが、ストレージ・デバイスと同じ IOP 上に配置されている場合は、コンソール・オプションの「**コンソールのリカバリーを許可する (Allow console recovery)**」と「**コンソールを別のコンソールでテークオーバーすることができる (console can be taken over by another console)**」を有効にします。

以下の情報は、コンソールのテークオーバーおよびリカバリーに関連するものです。

IBM i では、コンソールのテークオーバーとリカバリーと呼ばれる特殊な一連の機能があり、LAN 接続のオペレーション・コンソールが他のコンソール装置から制御を引き継ぐことができます。以下の情報は、どのコンソール装置がご使用の作業環境に最適であるか、またこれらの機能を活用するためにこれらの装置をどのように配置すればよいのかを決定するのに役立ちます。

- **テークオーバー**は、LAN 接続のコンソール装置が現行のコンソール装置から制御を引き継ぐために使用されるプロセスです。制御を引き継ぐ PC にサインオンしたユーザーは、特殊権限を必要とし、また新規のメニューからテークオーバーを開始します。
- 「**リカバリー**」は、コンソールに関する問題が発生した後、コンソール上で稼働するジョブの制御を取り戻すプロセスです。リカバリー処理は、同じコンソール装置に対して行なう場合も、異なるコンソール装置に対して行なう場合もあります。また、追加の処理を行い、別の接続を使用する装置を使用可能にすることによって、リカバリー処理を容易に行える場合があります。平衡型コンソールは例外であり、同じタイプの 5250 エミュレーションを使用しないため、コンソールをリカバリーする場合にはデータを損失します。

テークオーバー・オプションが使用可能で、5250 エミュレーションを実行中のコンソール機能を持つ各装置が適切に接続されている場合、それがアクティブ・コンソールであるかどうかに関係なく、データの画面が表示されます。V5R4 以降のリリースでは、複数の装置が、コンソールが確立された後で画面上にデータを持ちます。この結果、初めに装置を接続するとき、「切断」を示す空白のコンソール画面がなくなります。この新機能によって、コンソールにあるジョブを、データを損失せずに他の装置へ転送することが可能になります。

この機能は、接続を失った、またはテークオーバーされているコンソールへのデータ・ストリームを中断し、以降のデータを保管した上で、そのコンソールになる次の装置 (それが前のコンソールと同じであっても) へそのデータを送信することによって実行されます。回復可能性とは、実質的には、前のコンソールが実行していた内容にかかわらず、同じ装置または別の装置から、そのコンソールへテークオーバーすることです。

以下の情報は、区画に分割されていない区画に関連するものです。

- コンソール支援ハードウェアは、モデルに基づいて、特定の位置のスロットに配置することが必要な場合があります。

以下の情報は、複数区画の環境に関連するものです。

- オペレーション・コンソールを、主コンソールまたはバックアップ・コンソールとして使用する計画の場合、主コンソールをサポートするように、IOP をタグ付けする必要があります。
- 単一の IOP に対して複数のコンソール・アダプターが使用可能な場合、一番低いバス・アドレスを持つアダプターがオペレーション・コンソールで使用するために選択されます。例えば、2 つの LAN アダプターがインストールされている IOP をタグ付けするとします。システムは、バス上で検出された最初のアダプターを使用します。ただし、IPL 時に最初のアダプターが作動可能になっていない場合には、

システムは 2 番目のアダプターを選択する場合があります。これにより、コンソールの即時の開始が妨げられたり、意図した目的でそのリソースを使用できない可能性があります。単一 IOP 用の構成に一致するコンソール機能のあるアダプターのインストールは 1 つのみにするか、あるいは代わりに IOA をタグ付けすることを推奨します。

- 代替コンソールという用語は、代替コンソールとしてタグ付けされた別の IOP に配置されている平衡型コンソール・タイプを指します。オペレーション・コンソールおよび HMC タイプのコンソールは、代替コンソールとしてタグ付けされた資源を使用しません。

注: 同じ IOP を主コンソールと代替コンソールの両方としてタグ付けすると、コンソールの選択ができなくなることがあります。主コンソールのアダプターと同じ IOP 内に平衡型アダプターがある場合、平衡型アダプターは、代替コンソールではなくバックアップ・コンソールにしてください。ただ、コンソール・タイプを、コンソールで平衡型アダプターを利用するように変更する必要があるだけです。

関連資料

29 ページの『オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー』
他のコンソール装置から制御を引き継ぐにはこれらの機能を使用することができます。

『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

バックアップ・コンソールの計画:

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

バックアップ・コンソールに対する考慮事項

- 独立システム用のアダプターの位置は、固定であるか、少なくとも制限されています。ご使用のシステムのハードウェア要件に基づき、コンソール・タイプの選択肢が限られる場合があります。可能であれば、追加として使用できるコンソール・タイプを少なくとも 1 つは確認しておいてください。
- バックアップ・コンソール計画の一部として、テークオーバーおよびリカバリー・オプションを使用することを考慮してください。ただし、新規のコンソール・タイプ用に使用されるハードウェアが存在し、リカバリー時に使用可能でなければなりません。
- 区画に分割された環境で使用する場合は、以下について考慮してください。
 - 論理区画環境では、「代替コンソール」という用語は、代替コンソールとしてタグ付けされている別の入出力プロセッサ (IOP) または別の入出力アダプター (IOA) に配置されている平衡型コンソール・タイプを指します。主コンソール (平衡型のみ) の障害が検出されると、システムが自動的に代替コンソールの IOP または IOA を試行します。この機能により、別のレベルの保護が与えられます。単一 IOP を主コンソールと代替コンソールの両方としてタグ付けすると、コンソールを選択する際にエラーが生じる可能性があります。代替コンソールの IOP を別のバスに配置することで、さらなる独立性を持たせることができます。これを行うことで、主コンソールのバスで障害が発生しても、コンソールは使用可能なままとなります。
 - IOP にレポートを行う 2 つの類似したコンソール・アダプターを持つ IOP にタグ付けします。例えば、同じ IOP に対する 2 つの 2849 アダプターでは、コンソール用のアダプターを事前に判断する

ことが困難になる場合があります。IOP にタグ付けする際には、必ずその IOP に 1 接続当たり 1 つのコンソール対応アダプターしか装備しないようにしてください (例: 2849 1 つのみ)。各アダプターは、異なるコンソール・タイプをサポートできますが、1 つのアダプター・タイプのみが存在します。バス上で最下位にアドレス指定されたアダプターが、最初の候補になります。しかし、そのアダプターのシステムへの報告が遅い場合に、同じ接続を持つ 2 つのアダプターが存在する場合は、別のアダプターが代わりに選択されることがあります。もう 1 つの例として、IOP に、その IOP にレポートする 2838 と 2849 の両方のイーサネット・アダプターが装備されている場合があります。それらは異なるアダプターですが、コンソールに対して同じ接続を持ちます。

- IOP をサポートするコンソールを一時的に区画に割り振ったり、その区画から割り振り解除したりすることが可能な、共有資源環境について検討します。コンソール装置を常時必要としている作業環境はほとんどありません。共有リソースの概念をインプリメントすることで、専用ハードウェアを用意するための初期コストを削減することができます。
- ソース・ストレージ・デバイスのロードに失敗し、システム・リカバリーにおいてお客様のバックアップの代わりに IBM 提供のライセンス内部コード・メディアを使用し、かつシステムがオペレーション・コンソール (LAN) を使用している場合は、システム・リカバリーの最初の部分で別のコンソール・タイプを使用しなければならないことがあります。

バックアップ・コンソールの構成タイプ

バックアップ・コンソール (単数または複数) の構成を計画する場合、コンソールの障害からのリカバリーは、さまざまな要素によって異なることに注意してください。これらの要素には、モデルおよびシリーズ、使用可能なハードウェア・リソース、以前のコンソール・タイプ、および対象とするコンソール・タイプなどがあります。リカバリーは、現在障害のあるコンソールの修復や、別のコンソール・タイプへの一時的な置き換えなどの作業となります。コンソール・タイプの変更は、ほとんどの場合 IPL を行わなくても実行できますが、事情によっては IPL が必要となる場合もあります。コンソール・サービス機能 (65+21) を使用する場合は、コンソールがサポートするハードウェアをインストールし使用可能にした後で、機能を実行する必要があります。すべてのリソースの区画タグ付けも、前もって完了させる必要があります。

- | **重要:** LAN 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを別のコンソール・タイプのバックアップとして使用する計画の場合は、ネットワーク・アダプターを、コンソールの指定スロットか、適切にタグ付けされた IOP または IOA に配置する必要があります。事前に構成されていない場合、BOOTP プロセスを使用してシステムの構成が行われます。

バックアップ・コンソールの構成の考慮事項

- ご使用のシステムにリモートからアクセスする場合は、オフサイト・コンソール機能または別のタイプのコンソール接続を検討してください。ネットワーク上のローカル・コンソールは、ネットワーク PC 上の追加のローカル・コンソールでバックアップを取ることができます。
- 論理区画または複数システム環境では、単一 PC 上のネットワーク (LAN) 構成にある複数のローカル・コンソールを、主コンソールとして使用することが多いはずですが、これと同じタイプの構成を使用する追加 PC を検討してください。可能であれば、同じ PC でサポートするコンソールの数を多くしすぎないでください。複数コンソールおよびリモート・コンソール・パネルをサポートしている場合は、PC のリソースはすぐに不足してしまいます。
- 大規模な環境ではネットワーク構成上に複数のローカル・コンソールを用意することを検討してください。各 PC に主要なコンソール機能を持たせ、バックアップ構成を相互にオーバーラップしてカバーするようにしてください。例えば、ネットワーク構成上で 10 台のローカル・コンソールをサポートする PC があり、かつ、別の 10 区画用の同数の主コンソールを持つ別の PC がある場合、それぞれの PC にもう一方の PC の構成を持たせてバックアップする代わりに、3 台目の PC を追加して 20 台のコン

ソールの機能を分散し、2 台の PC が各 PC の主コンソール構成の一部をバックアップするようにします。別の方法としては、1 台の PC を特定数のコンソールのバックアップ専用とし、必要になるまでその PC は接続しないという方法が考えられます。

注: ネットワーク上に複数のローカル・コンソールを持たせることを計画している場合は、オペレーション・コンソール PC の構成を開始する前に、必ずシステム上に追加の保守ツール装置 ID を作成するようにしてください。同じターゲット・システムまたは論理区画に接続されている各 PC には、固有の保守ツール装置 ID を持たせる必要があります。

要約すると、コンソールの構成にはできる限り冗長性を持たせることを検討してください。コンソールを提供する別の方法を用意するか、さまざまなレベルの障害に対処するために必要なさまざまなハードウェア要件を譲歩し調整することにより、破壊的なコンソール障害が起こりうる危険性を少なくすることができます。

コンソール装置の切り替えについて詳しくは、『複数コンソールの管理』トピックを参照してください。

関連資料

2 ページの『コンソールの計画の考慮事項』

1 つ以上のシステムに対するオペレーション・コンソールを計画する場合には、次の点を考慮してください。

29 ページの『オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー』

他のコンソール装置から制御を引き継ぐにはこれらの機能を使用することができます。

11 ページの『ネットワーク環境の準備』

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

37 ページの『複数コンソールの管理』

同一のシステムや区画に対するコンソールとして使用できるワークステーションが複数ある場合、それらの装置をコンソールとして使用する方法が複数存在する場合があります (構成や状況によって異なります)。

19 ページの『シナリオ：複数システムまたは複数区画のためのコンソール』

このシナリオでは、複数のシステムまたは区画を管理する状態について説明します。

29 ページの『オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー』

他のコンソール装置から制御を引き継ぐにはこれらの機能を使用することができます。

11 ページの『ネットワーク環境の準備』

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

オペレーション・コンソール要件の検証

オペレーション・コンソールを使用する前に、オペレーション・コンソールがすべてのハードウェア、ソフトウェア、ケーブル接続要件を満たしているか確認してください。

オペレーション・コンソールのハードウェア要件:

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

注: モデル 5xx の場合は、IBM Systems Hardware Information Center の『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』のトピックを参照し、『オペレーション・コンソールの管理』を検索してください。

表1. PC の要件 - プロセッサおよびメモリー

オペレーティング・システム (1, 2)	オペレーション・コンソール PC
Windows XP Professional	<ul style="list-style-type: none"> • Pentium®500 MHz (P6 または同等の互換マイクロプロセッサ) • 最小 256 MB のメモリー
Windows Vista	<ul style="list-style-type: none"> • Pentium 800 MHz • 最小 512 MB メモリー

注:

1. すべての最新 PC 要件については、IBM i Access Web サイトを参照してください。

- 重要: IBM i モデルは、論理区画を 0 ではなく 1 から数え始めます (区画が 1 つしかない場合も同様)。
 コンソールを正しく接続するには、クライアントの構成が論理区画に一致する必要があります。
 ネットワーク・データを使用したシステムの構成を BOOTP プロセスに依存している場合、この構成は、特に重要です。

ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールを使用する場合は、ご使用のモデルに応じたオペレーション・コンソール用の LAN アダプターをインストールする必要があります。システムの特性を調べるために、ハードウェア・リソースの表示 (DSPHDWRSC) コマンドを使用できます。表 2 は、LAN 接続用にサポートされるカードを示しています。

注: サポートされるカードおよび位置は、区画されていないシステムのみを対象としています。LPAR 環境内の論理区画の場合は、どのオペレーション・コンソール・サポート・アダプターも使用できます。

表2. LAN 接続用としてサポートされているカード

カード名またはカード番号	説明
2744	PCI 100 Mbps トークンリング・アダプター
2838	PCI 100/10 Mbps イーサネット IOA
2849	PCI 100/10 Mbps イーサネット IOA
内蔵イーサネット・ポートまたはホスト・イーサネット・アダプター (HEA)	PCI 100/10 Mbps
5706/5707 または 5767/5768	PCI 100/10 Mbps イーサネット IOA

関連タスク

40 ページの『区画されていないシステムでの、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更』

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するには、既存のコンソールを使用してシステム上で次のステップを実行する必要があります。

41 ページの『論理区画内での、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更』

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールに変更するには、既存のコンソールを使用してシステム上で次のステップを実行してから、システムの電源を切るか初期プログラム・ロード (IPL) を実行してください。

関連資料

19 ページの『シナリオ：複数システムまたは複数区画のためのコンソール』

このシナリオでは、複数のシステムまたは区画を管理する状態について説明します。

11 ページの『ネットワーク環境の準備』

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

『オペレーション・コンソールのソフトウェア要件』

オペレーション・コンソールを使用するには、これらのソフトウェア要件を満たす必要があります。

39 ページの『平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更』

平衡型コンソールから オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールに変更するには、PC とシステムの両方で一連のステップを実行する必要があります。

42 ページの『ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更』


ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更するには、システムで、またオプションで PC において、一連のステップを完了する必要があります。

5 ページの『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

関連情報

 [IBM i Access ホーム・ページ \(英語\)](#)

 [IBM システム・サポート Web サイト \(英語\)](#)

ハードウェア資源の表示 (DSPHDWRSC) コマンド

オペレーション・コンソールのソフトウェア要件:

オペレーション・コンソールを使用するには、これらのソフトウェア要件を満たす必要があります。

先に進む前に、構成に必要なオペレーション・コンソールのハードウェア要件を満たしていることを確認してください。オペレーション・コンソールは、Windows XP Professional および Windows Vista でサポートされます。

PC5250 または IBM パーソナル・コミュニケーションズ V5.9 (最小でも CICS® システム定義データ・セット (CSD) 1 が装備された V5.7) が、コンソール専用インストールされている必要があります。リモート・コントロール・パネルでのみ使用される構成の場合は、必要ありません。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードの計画

オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードを計画するには、以下の情報を把握する必要があります。

i 7.1 ヘアアップグレードまたは V5R4 をインストールするオペレーション・コンソール・ユーザーのための前提条件情報

ソフトウェア (IBM i、ライセンス内部コードなど) を i 7.1 にアップグレードしたり、これのインストールを行う前に、以下の事項に従う必要があります。

1. IBM i のリリース・アップグレードを受け取ると、11111111 (8 つの 1) 以外の、オペレーティング・システムに付属していたすべてのユーザー ID は失効します。アップグレードやインストールを行う際は常に、11111111 という保守ツールのユーザー ID を使用して、System i プラットフォームとオペレーション・コンソールとの間の接続を確立する必要があります。これにより、期限切れのユーザー ID が原因で、システムへのクライアント接続の再認証が失敗するのをすべて防止できます。これは、自動インストールおよびアップグレードを行う際には特に重要です。
2. IBM i オペレーティング・システムをアップグレードする前に、IBM i Access for Windows を 7.1 に更新することをお勧めします。

注: 上記のアクションに従っていない場合、アップグレード中またはインストール中にコンソールが正しく作動しない可能性があります。

重要: システムの手動 IPL 中、これまでに指定されたコンソールがない場合には、コンソール・タイプの設定を確認する画面が 2 つ追加で表示されます。1 つ目の画面では、現在のコンソール・タイプを受け入れる必要があります。2 つ目の画面では、これまでに値が存在しなかったことが示されて (古い値の代わりにゼロが表示されます)、新しい値が表示されます。Enter キーを押して終了すると、自動的にコンソール・タイプが設定されます。その後、IPL は「IPL またはシステムのインストール (IPL or Install the System)」画面に進みます。この条件は、ほとんどの場合、新しい区画のインストール中に発生しますが、最初の手動 IPL で発生することもあります。例えば、ライセンス内部コードの復元後の A モード IPL 中や、アップグレードまたはインストール中にゼロのコンソール値が見つかったときなどです。

システムのアップグレード前にオペレーション・コンソールをマイグレーションする

異なるコンソール・タイプから新しいシステム上のオペレーション・コンソールにマイグレーションする場合は、新しいオペレーション・コンソール PC を構成してから、アップグレードを開始することが重要となります。使用計画のある接続と一致するオペレーション・コンソール機構を、使用する新しいシステムの注文に含めてください。このように、新規システムでコンソール機能が必要となるアップグレード指示に従っている際も、新しいオペレーション・コンソール装置でそれらの機能を実行できます。

また、ネットワーク構成上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールで使用されていた前のロード・ソース装置をマイグレーションして、そのロード・ソース装置を新規の区画内のロード・ソース装置にする場合、LAN アダプターを割り振り解除した後に、古い区画からその装置を削除し、新しい区画にインストールする必要があります。

ご使用のシステムをアップグレードする際は、システムのシリアル番号を変更すると、新規システムで保守ホスト名を構成するのにこの方法を使用している場合は、クライアントが BOOTP 要求に応答するのを防ぐことができます。

システムをアップグレードした結果、ハードウェア管理コンソール (HMC) が含まれる場合は、必ずアップグレードが完了するまでシステム・コンソールとしてこれを使用してください。いくつかのアップグレードが段階的に行われるため、対象のコンソールで、ある期間必要なリソースがなくなる可能性があります。HMC では仮想リソースが使用されるため、別のコンソール・タイプ用のリソースが欠如するという問題が発生しません。

関連タスク

23 ページの『IBM i Access for Windows のインストール』

オペレーション・コンソールを使用するには、IBM i Access for Windows をインストールしておく必要があります。

65 ページの『オペレーション・コンソールでの LAN アダプター・カード使用の割り振り解除または移動』

マイグレーション時には、オペレーション・コンソールによる LAN カード使用の割り振り解除が必要な場合があります。ネットワーク構成または保守ツール・サーバー上でオペレーション・コンソールのローカル・コンソールを使用する予定がない場合は、LAN カードを割り振り解除する必要があります。

関連情報

IBM i および関連ソフトウェアのインストール、アップグレード、または削除

ネットワーク環境の準備

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

重要: ご使用のモデルに応じて、オペレーション・コンソール用の LAN アダプターをインストールする必要があります。

ご使用のシステムが新しく、ネットワーク構成でのローカル・コンソールを選択した場合は、アダプターはシステムで使用されるために既に割り振られています。LAN アダプターは、保守ツール専用とする必要があります。LAN 接続されたローカル・コンソールの LAN トポロジを、単一の、物理リング、ハブ、スイッチ、またはルーター環境に制限することをお勧めします。ネットワーク上のローカル・コンソールが、大規模なネットワーク・トポロジで使用される場合は、ブロードキャスト (DHCP) パケット・フィルタリングを使用することをお勧めします。これは、安価なハブまたはルーターを使用して PC とシステムを接続することと同じくらい簡単に行えます。一時的に、イーサネット・クロスケーブル (2849 アダプターを使用の場合) をしようすることもできます。単一の PC またはハブを使用してシステムに接続された少数の装置のみがあり、これらの装置が別のネットワークまたはインターネットに接続していない場合は、1.1.1.x または 10.220.215.x など任意の数字をアドレスに使用できます (ここで、x は 2 から 254 です。ただし、x.x.x.1 は一部のハブで問題を起す可能性があるため、避けてください)。しかし、多くのユーザーが共有している、あるいは装置がインターネットに接続されているネットワークがある場合は、アドレスに関してネットワーク管理者に相談してください。

クロスケーブルは標準的なネットワーク・ケーブルですが、送信と受信のシグナル・ワイヤーが逆になっています。これにより事実上、それぞれの末端はハブ、スイッチ、またはルーターがその末端の間に存在するかのように機能します。クロスケーブルを使用するには、非標準的なネットワーク構成がシステムと PC で必要となる場合もあります。

ネットワーク・セキュリティー

LAN 接続を介したコンソールは、平衡型コンソールと同じ物理的セキュリティーの考慮事項および制御を適用して扱うことをお勧めします。例えば、メインのネットワーク（または会社のイントラネット）から分離したネットワーク上にローカル・コンソールを構成し、コンソールとして作動する PC へのアクセスを厳重に管理することを検討してください。

ブートストラップ・プロトコル

ネットワーク上のローカルのオペレーション・コンソールは、ブートストラップ・プロトコル (BOOTP) を使用して、システムの保守 IP 通信スタックを構成します。オペレーション・コンソール構成ウィザードでは、IP スタック構成、およびシステムのシリアル番号と区画 ID が要求されます。システムは、BOOTP 要求をブロードキャストします。オペレーション・コンソール PC は、構成ウィザード中にサブミットされた情報を使用して応答します。次に、システムはその構成情報を保管し、保守 IP 通信スタックのために使用します。

コンソール・タイプがオペレーション・コンソール (LAN) に設定され、保守ホスト名 (保守インターフェース) に対して有効な IP アドレスをシステムが含んでいない場合に、システムは BOOTP を実行します。

オペレーション・コンソール PC は、システムからアクセス可能なネットワーク上に配置する必要があります。これは、同じ物理ネットワークまたはブロードキャスト・パケットを流すことを許可するネットワークです。これは、初期セットアップ要件です。通常のオペレーション・コンソール操作では、これは必要ありません。このセットアップは、同じ物理ネットワークで行うことを推奨します。

- | IBM i 6.1 以降は、オペレーション・コンソールが、ユーザーとの対話が少なくとも構成可能なシステムを
- | 検出できます。この条件が検出されると、PC とシステムは新規構成の情報を交換しようと試みます。情報
- | 交換が正常に行われると、システムは、PC で接続のセットアップが行われるときにこの情報を使用しま
- | す。この検出により、誤った IP アドレスまたは区画 ID を入力することによって生じるエラーが減少しま
- | す。この検出は、PC とシステムの両方が 6.1 以降を実行している場合に限り、行われます。それ以外の場
- | 合は、従来の BOOTP が発生し、システム的全データをユーザーが提供する必要があります。

BOOTP 要求には、システムのシリアル番号および区画 ID が含まれています。システムのシリアル番号と区画 ID は、IP 構成情報を割り当てるのに使用されます。サービス IP 通信スタックの構成で問題が発生した場合は、オペレーション・コンソール PC が同じ物理ネットワーク上にあるかどうか、および構成内のシステムのシリアル番号および区画 ID が正しいかどうか確認をしてください。

- | ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールは、ポート 2300、2323、3001、および 3002 を使用しま
- | す。別の物理ネットワークのオペレーション・コンソールを使用するには、ルーターおよびファイアウォール
- | がこれらのポートでの IP トラフィックを許可していなければなりません。

BOOTP が成功するかどうかは、システムと PC の接続に使用されるネットワーク・ハードウェアに依存します。場合によっては、システム保守ツール (SST) を使用してコンソール接続を構成するために、異なる装置が必要となる場合があります。オペレーション・コンソールの接続に 2838 イーサネット・アダプターを使用している場合、BOOTP を使用するためには、ご使用のネットワーク・ハードウェアが速度と全二重の自動ネゴシエーションに対応している必要があります。

ここに説明されているように、システムおよび PC で標準の BOOTP 操作を実行することは現在も可能ですが、6.1 からシステムと PC 間の接続の自動的なディスカバリーを可能にする機能が追加されました。この機能は、VSDISCOVER と呼ばれ、オペレーション・コンソールのみで使用される専有メカニズムです。システムおよび PC はどちらもネットワークから特別なブロードキャスト・フレームを listen します。そして、受信した場合には、ポート 67 と 68 を用いるネゴシエーションが行われ、システムと PC は必要に応じて、交換されたデータを用いて自身を構成することができます。さらに、PC は、コンソール・セッションを開始することができる構成済み接続を作成します。この VSDISCOVER 機能は接続を構成するためのデフォルトのメカニズムです。BOOTP プロセスは、VSDISCOVER が不要になっても使用されます。ユーザーが既に構成済みの接続を持っていて、何らかの理由でネットワーク・データをリセットする必要がある場合などです。

関連資料

5 ページの『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

オペレーション・コンソール構成の保護

オペレーション・コンソールのセキュリティは、保守装置認証、ユーザー認証、データ・プライバシー、およびデータ保全性から成ります。

コンソール・ディスプレイにサインオンするには、ユーザー認証セキュリティが必要です。

ネットワーク構成でローカル・コンソールに接続している場合は、オペレーション・コンソール・クライアント・コードが必要とするユーザーとの対話は、前のリリースより少なくなります。デフォルトでは、手動で保守する環境を維持する必要がない限り、アクセス・パスワードを保守する必要はありません。保守ツール装置 ID もシステムで保守できます。詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。システムは、正常に接続するために同じプロセスを必要としますが、その一部をオペレーション・コンソールが実行できるようになりました。

次のリストは、14 ページの図 1 に示されているオペレーション・コンソールの LAN セキュリティの概要を示しています。

1. ユーザーが正しいパスワードを入力します。
2. オペレーション・コンソールが、保守ツール装置 ID (QCONSOLE) および暗号化されたパスワードをシステムに送信します。
3. システムが、この 2 つの値をチェックします。一致している場合は、装置と DST の両方を、暗号化された新しいパスワードで更新します。
4. 次に、接続プロセスは、保守ツールのユーザー ID およびパスワードを検証してから、システム・コンソール画面を PC に送信します。

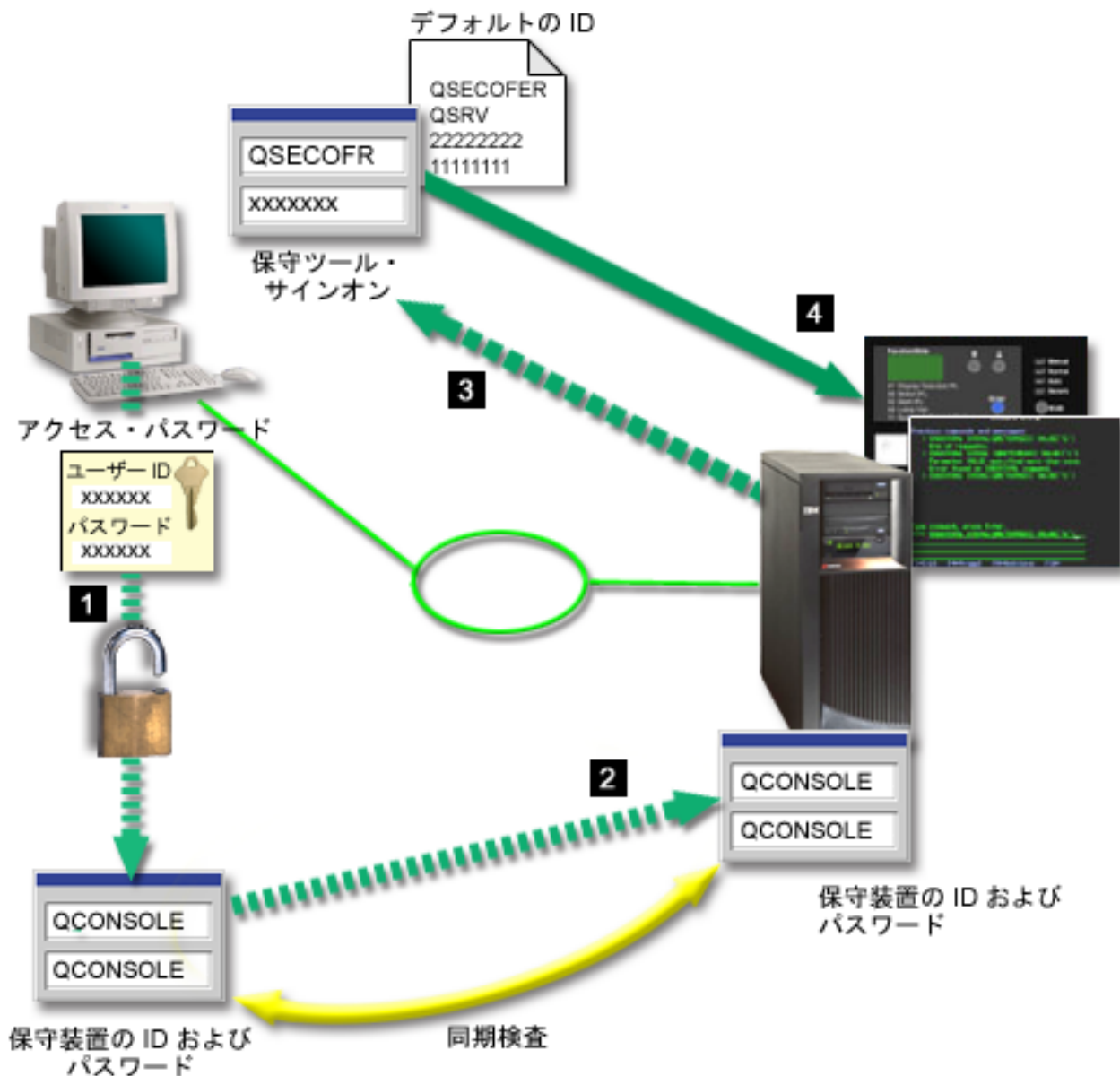


図1. オペレーション・コンソール LAN セキュリティー

IBM i コンソール・セキュリティーの構成要素は、次のとおりです。

保守装置認証

このセキュリティーでは、1 台の物理装置がコンソールであることを保証します。ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールは、証明書は使用せずに装置およびユーザーの認証をサポートするバージョンの Secured Sockets Layer (SSL) を使用します。

装置認証

装置認証は、保守ツール装置 ID に基づいています。デフォルトでは、保守ツール装置 ID はシステムが管理します。自動的に作成された保守ツール・デバイス ID の番号の初期値は、10 に設定されます。デフォルトの保守ツール装置 ID QCONSOLE を使用すると、11 台の PC が同時にシステムに接続可能になり、それぞれが固有の保守ツール・デバイス ID を持つことになります。この値を 0 に設定した場合、ユーザーは、保守ツール・デバイス ID を手動で管理しなければなりません。保守ツール装置 ID は、専用保守ツール (DST) およびシステム保守ツール (SST) で手動

により管理されます。これは、保守ツール装置 ID と保守ツール装置 ID パスワードから成ります。デフォルトの保守ツール装置 ID は QCONSOLE であり、デフォルトのパスワードは QCONSOLE です。ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールは、接続に成功するたびにパスワードを暗号化し、変更します。ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールを使用している場合、最初にシステムをセットアップするときには、デフォルトのパスワードを使用しなければなりません。

注: 自動作成された装置 ID に、リモート・コントロール・パネル (RCP) 特権が自動で付与されるわけではありません。この特権は、DST 保守ツールのセキュリティー・データ・メニューにある DST 環境内のオプションを使用して変更できます。デフォルトの保守ツール装置 ID の QCONSOLE には、デフォルトで RCP 特権が付与されています。

デバイス認証では、ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールと一緒に構成される PC ごとに、固有の保守ツール・デバイス ID が必要です。

ネットワーク (LAN) 接続のローカル・コンソールを使用する場合は、システムによる保守ツール・デバイス ID の自動作成が可能かどうかを、構成ウィザードが判別します。これが可能である場合、システムはユーザーが保守ツール装置 ID を作成するプロセスをスキップします。自動作成機能をオフにしないで、ユーザー作成の保守ツール・デバイス ID を手動で新しい構成に割り当てる必要がある場合は、オペレーション・コンソールが機能を妥当性検査できないように、構成を作成する間 PC をネットワークから切断してください。このあと、ユーザーに対して、ユーザー作成の保守ツール・デバイス ID がプロンプトされます。デフォルトでは、最初の保守ツール・デバイス ID パスワードには、大文字の保守ツール・デバイス ID 名が設定されます。

注: アクセス・パスワードは、PC 上の保守ツール・デバイス ID 情報 (保守ツール・デバイス ID およびパスワード) を保護します。このあと、オペレーション・コンソールは、デフォルトによりユーザーのためのアクセス・パスワード管理を行います。構成プロセス中は、アクセス・パスワードを割り当てるためのウィンドウは表示されません。しかし、このパスワードを手動で管理することを選択する場合、「プロパティーおよびアクセス・パスワード」タブを使用してこれを変更できます。

ネットワーク接続を確立すると、以後、オペレーション・コンソールは、暗号化された保守ツール・デバイス ID とパスワードをアクセスするためにアクセス・パスワードを要求するプロンプトを出しません (構成が作成されたあとで、ユーザーが手動で設定した場合は例外です)。ただし、有効な保守ツール・ユーザー ID およびパスワードに対するプロンプトは出されます。

ユーザー認証

このセキュリティーでは、誰がこの保守装置を使用するかということを保証します。ユーザー認証に関連するすべての問題は、コンソール・タイプに関係なく同じです。詳しくは、『保守ツール (Service tools)』トピックを参照してください。

データ・プライバシー

このセキュリティーでは、意図された受信者のみがコンソール・データを読み取ることができることを保証します。物理接続が、保守装置認証の箇所の説明されているようにセキュアである場合、コンソール・データは保護されたままになります。データを保護するには、確実に、許可された人だけがコンピューター・ルームに入れるようにします。

ネットワーク上にあるオペレーション・コンソールのローカル・コンソールはセキュア・ネットワーク接続を使用します。

データ保全性

このセキュリティーでは、受信者に発送する際に、コンソール・データは変更されないことを保証

します。物理接続がセキュアな場合、コンソール・データは保護されたままになります。ネットワーク上にあるオペレーション・コンソールのローカル・コンソールはセキュア・ネットワーク接続を使用します。

データ暗号化

認証およびデータ暗号化が強化され、コンソール・プロシージャのネットワーク・セキュリティーが提供されています。ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールは、証明書は使用せずに装置およびユーザーの認証をサポートするバージョンの SSL を使用します。

管理

オペレーション・コンソール管理によって、システム管理者は、リモート・コントロール・パネルのコンソール機能へのアクセスを制御することができます。ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを使用する場合、装置およびユーザーの認証は、保守ツール装置 ID を使用して制御されます。

重要: ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを管理する場合は、以下の状態を考慮してください。

- リモート・コントロール・パネルでは、モードを選択するには、接続を認証するユーザーに、QSECOFR で提供されるようなセキュリティー権限が必要です。モード選択には、手動 (Manual)、通常 (Normal)、自動 (Auto)、セキュア (Secure) があります。自動およびセキュアは、キースティックを持つシステムでのみ使用可能です。また、ネットワークを使用してリモート・コントロール・パネルに接続している場合、保守ツール装置 ID は、システムのコントロール・パネル・データ、またはリモート・コントロール・パネルが接続している区画に対する権限を有している必要があります。
- システムとオペレーション・コンソール PC 間で保守ツール装置 ID のパスワードの不一致が発生した場合、システムでパスワードの再同期が必要となる場合があります。次のいずれかの条件が発生した場合に、不一致が生じます。
 - ご使用の PC に障害が発生した場合。
 - PC を異なる PC と交換することを決定した場合。
 - システムをアップグレードし、システムの「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」がゼロに設定されている場合、または IBM i 7.1 より前の LIC を使用している場合。

詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。

- QCONSOLE はデフォルトの保守ツール装置 ID であるため、この装置 ID を使用しないことを選択した場合でも、正常に接続するために、一時的にこの ID を使用して接続を構成することをお勧めします。その後その構成を削除しますが、システムのデバイス ID はリセットしないでください。これを行うことにより、既知であるデフォルトの保守ツール装置 ID を使用した、第三者による無許可アクセスを防止できます。このデバイス ID を後で使用する必要がある場合は、コントロール・パネルまたはメニューを使用して ID をリセットすることができます。
- 侵入からの保護のために、ポートを監視するネットワーク・セキュリティー・ツールを実装する場合は、オペレーション・コンソールが通常の操作用にポート 449、2300、2323、3001、および 3002 を使用する点に注意してください。ご使用のツールがこれらのポートのいずれかを監視すると、コンソールの損失を引き起こし、リカバリーのために IPL が必要となる場合があります。これらのポートは、侵入防御テストから除外してください。

保護のヒント

ネットワーク上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを使用する場合は、次のタスクを実行することが推奨されます。

1. システム上で「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値を 0 に変更した場合は、次を実行してください。

コンソールとして使用する各 PC 用に、コンソールおよびコントロール・パネル属性を持つ追加の保守ツール装置 ID を作成してください。

詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。

2. 緊急時の使用のため、追加のバックアップ装置 ID を 1 つか 2 つ追加します。オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」を使用しており、その値がゼロでない場合は、これを行う必要はありません。
3. アクセス・パスワードは、長いものを選んでください。オペレーション・コンソールにこのパスワードを管理させる場合は、これは必要ありません。
4. 次の DST ユーザー ID、QSECOFR、22222222、および QSRV に対するパスワードを変更します。

注: ユーザー 11111111 のパスワードは変更しないでください。これは、パスワードの期限切れなしでシステムに組み込まれる唯一のユーザーです。他のユーザー ID を用いて認証の問題があった場合には、11111111/11111111 で認証を試みることができます。

5. ユーザーおよび保守ツール装置 ID を使用可能にしたり、使用不可にしたりするために、十分な権限を持ったバックアップ保守ツールのユーザー ID を追加してください。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連タスク

63 ページの『自動作成デバイス ID の RCP 特権の変更』

このトピックでは、自動作成デバイス ID の RCP 特権を変更するプロセスを順を追って説明します。

関連資料

57 ページの『PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期』

デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

21 ページの『リモート・コントロール・パネル』

リモート・コントロール・パネルは、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) を介してシステムに接続します。リモート・コントロール・パネルを使用すると、ローカル・ロケーションまたはリモート・ロケーションから、コントロール・パネルのほとんどの機能を実行することができます。

関連情報

保守ツール・ユーザー ID とパスワード

オペレーション・コンソールおよび System i Navigator構成の準備

System i Navigatorとオペレーション・コンソールの両方を 1 台の PC 上で実行することができます。ご使用のシステムへのオペレーション・コンソールの接続方法に応じて、次のネットワーク構成を使用できます。

System i Navigatorは、Windows デスクトップからご使用のシステムを管理するためのグラフィカル・インターフェースです。System i Navigatorを使用するとシステムの操作および管理を、より容易かつ効率的に行うことができます。

オペレーション・コンソールを使用すると、IBM i コンソールまたはコントロール・パネル (または両方) をアクセスおよび制御するために、ローカル PC またはリモート PC を使用することができます。オペレーション・コンソールは、直接ケーブル接続を使用可能にするのと併せて、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) を経由した接続またはコンソール・アクティビティを使用可能にします。単一の PC が、複数のシステムと複数の接続を持つことができるため、複数のシステム用のコンソールにすることができます。例として、論理区画に分割されたシステムで、同一の PC を全区画のコンソールとして使用する場合があげられます。それぞれの区画は個別のシステムとみなされるので、コンソールを使用する区画ごとに個別の接続が必要です。オペレーション・コンソールは、単一のシステムとの複数の接続を許しますが、一時点では 1 つの PC だけがシステムを管理することができます。オペレーション・コンソールの接続性に基づいて、次の構成方法のうちのいずれかを用いることができます。

- ネットワーク上のローカル・コンソールとして使用される PC では、追加のネットワーク接続が必要となる場合があります。System i Navigatorには、ネットワーク・アダプターおよび構成済みの IBM i 回線記述とのネットワーク接続が必要です。オペレーション・コンソールは、サービス・ホスト名 (インターフェース名) によって定義されているサービス・ネットワーク・アダプターを使用します。ネットワーク・アダプターおよび構成済みの IBM i 回線記述、および、保守ホスト名 (インターフェース名) によって定義された保守ネットワーク・アダプターが同一のネットワーク上にある場合は、追加の PC LAN アダプターは必要ありません。これを次の図で示します。

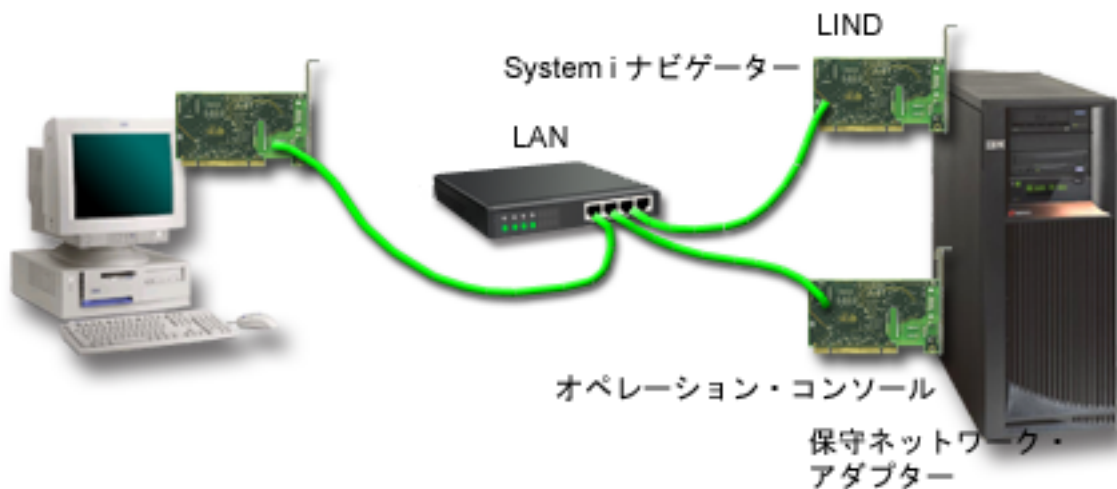


図2. 同じネットワーク上の System i Navigatorおよびオペレーション・コンソール構成

関連情報

System i ナビゲーター

シナリオ: 構成の理解

このシナリオを使用すると、お使いの環境での構成を理解する場合に役立ちます。

以下のシナリオを使用すると、オペレーション・コンソールの構成を理解する場合に役立ちます。以下のシナリオは、区画化されていないシステムに対してのみ適用されることに注意してください。

シナリオ：複数システムまたは複数区画のためのコンソール:

このシナリオでは、複数のシステムまたは区画を管理する状態について説明します。

会社が IBM i 製品を所有しており、PC を使用してそのシステムを管理したいと考えているとします。複数のシステムまたは区画を、1 台のコンソールから管理する必要があります。セキュアなネットワークがあり、そこにコンソールを構成することができます。



このシナリオでは、ネットワーク上のローカル・コンソールを構成します。

利点

- いくつかの異なるシステムまたは区画について、それらが保守接続ネットワークに接続されている限り、1 台の PC をそれらのコンソールとして構成することができます。同時に活動状態にできるコンソールは最大 26 ですが、仮想的に無限の数の構成が可能となる場合もあります。
- 管理者が、コンソールを管理するために、物理的にシステムの近くにいる必要はありません。
- コンソール接続を保護するためのセキュリティ機能が使用可能です。
- ネットワーク上のローカル・コンソールは、LPAR 環境での区画用に選択できる接続です。
- 1 つのシステムまたは 1 つの区画に対して、複数の PC をコンソールとして構成できます。ただし、1 度に 1 つの PC しか活動状態のコンソールとして機能できません。

欠点

- バックアップ・コンソールを用意しておかないと、ネットワーク障害が発生した場合にコンソールが使用できなくなります。バックアップ用に平衡型コンソールを構成してください。
- ご使用のシステムには、コンソールまたは他の保守ツールで使用するための、別の LAN カードが必要になります。

関連概念

21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

5 ページの『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

関連情報

論理区画

コントロール・パネルに関する考慮事項の計画

コントロール・パネルに接続するには、リモート・コントロール・パネルを構成する必要があります。アクセスを要求するすべての ID に適切な権限が必要です。

リモート・コントロール・パネルはコントロール・パネルへのグラフィカル・インターフェースです。リモート・コントロール・パネルによって、ローカル・ロケーションまたはリモート・ロケーションから、コントロール・パネルのほとんどの機能を実行することができます。デフォルトでは、ユーザー作成のユーザー ID にはこれらの権限が付与されます。

ユーザーは、区画のリモート・コントロール・パネルへのアクセス、および、リモート・コントロール・パネルを使用する機能へのアクセスを認可されている必要があります。ネットワーク上のローカル・コンソールを使用する場合は、この機能を使用するために、保守ツール装置 ID も、その区画のリモート・コントロール・パネルへのアクセスを認可されている必要があります。

デフォルトで、ユーザーが自動的に区画のリモート・コントロール・パネルへのアクセスを認可されることはなくなりました。ただし、そのユーザー ID の管理者がアクセスを認可することは可能です。接続を認証するユーザーは、モードを変更するために、それぞれの区画のキーロックに対する権限も有している必要があります。

コントロール・パネルのオプションの検討、コントロール・パネルの比較の確認、およびセットアップ手順の検索を行うには、以下のリンクを使用してください。

- コントロール・パネルのオプションを検討するには、『コントロール・パネル』トピックで比較を参照し、セットアップ手順を見つけてください。
- リモート・コントロール・パネルの問題を解決するには、『リモート・コントロール・パネルに関する問題のトラブルシューティング』を参照してください。

関連資料

77 ページの『リモート・コントロール・パネルに関する問題のトラブルシューティング』

初期接続をセットアップするときに、コントロール・パネルへのアクセスに関する問題が発生する場合があります。

リモート・コントロール・パネル

リモート・コントロール・パネルは、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) を介してシステムに接続します。リモート・コントロール・パネルを使用すると、ローカル・ロケーションまたはリモート・ロケーションから、コントロール・パネルのほとんどの機能を実行することができます。

- 現在、ネットワーク上のローカル・コンソールは、デフォルトでリモート・コントロール・パネルを自動的に選択しません。リモート・コントロール・パネルを使用する場合は、「プロパティ」を使用してこの機能を選択します。また、初回接続が正常に確立され、権限が検査されるまで、リモート・コントロール・パネルのオプションを選択肢として選択できない場合があります。

- | 論理区画のリモート・コントロール・パネルでは、電源オフ機能など、実際のパネルで提供される機能と同じ機能が使用可能です。
- | 装置 ID でコントロール・パネル機能を表示することを許可されていない構成では、リモート・コントロール・パネルは使用不可になるか、表示されません。
 - 選択されたが、許可されなかった場合、リモート・コントロール・パネルは初回接続後に選択不可になります。
 - 選択されなかった場合は、リモート・コントロール・パネルは初回接続後に表示されません。
- | 装置 ID がリモート・コントロール・パネル機能の使用を許可されると、次の接続時に「プロパティ」にリモート・コントロール・パネル・オプションが表示されるようになります。

オペレーション・コンソールのための PC の準備

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

関連概念

2 ページの『オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画』
オペレーション・コンソールのセットアップを開始する前に、オペレーション・コンソールを最も適切に構成する方法を判別します。

関連資料

42 ページの『平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールへ変更後に新しいコンソール・タイプを使用するための PC の構成』
平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、新しいコンソール・タイプを使用できるように PC を構成する必要があります。

19 ページの『シナリオ：複数システムまたは複数区画のためのコンソール』
このシナリオでは、複数のシステムまたは区画を管理する状態について説明します。

セットアップ前提条件チェックリストの完了

ご使用の PC にインストールする構成に合わせて、オペレーション・コンソール前提条件チェックリスト内の項目を完全に実施する必要があります。

必要な構成がどれであるか分からない場合は、『オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画』トピックを参照してください。

注: 対話式インタビューを使うのではなく、印刷された PDF で作業を行う場合は、チェックリスト全体およびすべてのセットアップ・タスクがその PDF に組み込まれています。

PC にインストールする構成を選択してください。

関連概念

2 ページの『オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画』
オペレーション・コンソールのセットアップを開始する前に、オペレーション・コンソールを最も適切に構成する方法を判別します。

ネットワーク上のローカル・コンソールのセットアップ

使用している構成およびオペレーティング・システムに応じた、固有のセットアップ前提条件チェックリスト内の項目を完全に実施する必要があります。

オペレーション・コンソールをインストールするオペレーティング・システムを、以下から選択してください。

Windows XP 用の前提条件チェックリストの完了: ネットワーク上のローカル・コンソール:

Windows XP 上で、ネットワーク上のローカル・コンソールをセットアップするには、以下のチェックリスト内の項目を完全に実施する必要があります。

- 1. オペレーション・コンソールのハードウェア要件を満たす。
- 2. オペレーション・コンソールのソフトウェア要件を満たす。
- 3. IBM i Access for Windowsをインストールする。
- 4. IBM i Access for Windows Service Pack を適用します。
- 5. 保守ホスト名 (インターフェース名) を構成する。
- 6. システム上での保守ツール装置の ID を作成する。
- 7. PC 上でオペレーション・コンソールを構成する。

Windows Vista 用の前提条件チェックリストの完了: ネットワーク上のローカル・コンソール:

Windows Vista 上で、ネットワーク上のローカル・コンソールをセットアップするには、以下のチェックリスト内の項目を完全に実施する必要があります。

- 1. オペレーション・コンソールのハードウェア要件を満たす。
- 2. オペレーション・コンソールのソフトウェア要件を満たす。
- 3. IBM i Access for Windowsをインストールする。
- 4. IBM i Access for Windows Service Pack を適用します。
- 5. 保守ホスト名 (インターフェース名) を構成する。
- 6. システム上での保守ツール装置の ID を作成する。
- 7. PC 上でオペレーション・コンソールを構成する。

必要な前提条件タスクの完了

オペレーション・コンソールを構成する前に、ご使用の構成およびオペレーティング・システムの各前提条件タスクを完了する必要があります。

完了する必要がある特定のタスクをリストして作成した、チェックリストを使用してください。チェックリストには、ご使用のオペレーティング・システムおよび構成タイプに基づいて、必要となるタスクのみがリストされています。まだチェックリストを作成していない場合は、21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』を参照してください。

以下の全体的な前提条件のチェックリストを確認します。

IBM i Access for Windows のインストール

オペレーション・コンソールを使用するには、IBM i Access for Windows をインストールしておく必要があります。

IBM i Access for Windows のインストール中に、5250 エミュレーターまたは IBM パーソナル・コミュニケーションズ V5.9 (最小でも V5.7 CSD 1) およびオペレーション・コンソール・サポートをインストールします。最新の PC 要件については、System i Access の Web サイトを参照してください。

IBM i Access for Windows が既にインストール済みかどうかを確認するには、次のステップに従います。

1. 「スタート」をクリックして「設定」を選択します。
2. 「コントロール パネル」をクリックします。
3. 「アプリケーションの追加と削除」をダブルクリックします。Windows Vista をご使用の場合は、「プログラムと機能」をダブルクリックします。
4. IBM i Access for Windows を見つけます。
5. 「アプリケーションの追加と削除」を閉じるには、「キャンセル」をクリックします。
6. 「コントロール パネル」を閉じます。

IBM i Access for Windows がインストールされていない場合は、*IBM i Access for Windows* DVD、SK3T-4098 を使用してインストールします。

1. *IBM i Access for Windows* DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. 「IBM i Access for Windows」オプションを選択して、インストールを開始します。「IBM i Access for Windows」ウィンドウが表示されるまで待ちます。
3. セットアップ・プログラムを続けて実行するためには、「次へ」をクリックして、プロンプトに従います。

4. IBM i Access for Windows を初めてインストールする場合は、少なくとも、オペレーション・コンソールを実行するための最小構成があるか確認してください。オペレーション・コンソール・コンポーネントを追加するだけの場合は、この最小構成を満たすために必要なコンポーネントのみを追加してください。
5. 最小構成を確実に満たすには、「カスタム」インストール、または「全部」インストールを選択し、少なくとも以下のコンポーネントを選択してください。

- a. 「必要なプログラム (Required Programs)」

- b. **5250 ディスプレイおよびプリンター・エミュレーター (5250 Display and Printer Emulator)** (IBM パーソナル・コミュニケーションズ (V5.9 または最小でも V5.7 CICS システム定義データ・セット (CSD) 1) がインストールされていない場合)。

オペレーション・コンソールのためだけに使用するのであれば、たとえウィンドウでそのような指示が出ても、5250 ディスプレイ・エミュレーションを使用するためのライセンスは必要ありません。

オペレーション・コンソールの構成で、リモート・コントロール・パネルのみをサポートする予定の場合は、エミュレーターをインストールする必要はありません。

- c. 「オペレーション・コンソール」

6. 「次へ」をクリックして、プロンプトに従います。
7. IBM i Access for Windows Service Pack を適用します。

関連資料

10 ページの『オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードの計画』
オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードを計画するには、以下の情報を把握する必要があります。

『IBM i Access for Windows Service Pack の適用』

ご使用の PC には、IBM i Access for Windows の最新 Service Pack プログラム一時修正 (PTF) および最新レベルの IBM i Access for Windows が必要です。

関連情報

 [IBM i Access Web サイト](#)

IBM i Access for Windows

IBM i Access for Windows Service Pack の適用:

ご使用の PC には、IBM i Access for Windows の最新 Service Pack プログラム一時修正 (PTF) および最新レベルの IBM i Access for Windows が必要です。

Service Pack は、以下の Web サイトから PC 実行可能形式で利用できます。

- IBM i Access for Windows Service Pack の Web サイト。
- IBM FTP サイト: <ftp://ftp.software.ibm.com>  インストールしたバージョンと一致するディレクトリ・パスに進んでください。
 - l - バージョン V5R4M0: [as400/products/clientaccess/win32/v5r4m0/servicepack](ftp://ftp.software.ibm.com/as400/products/clientaccess/win32/v5r4m0/servicepack)
 - l - バージョン 6.1: [as400/products/clientaccess/win32/v6r1m0/servicepack](ftp://ftp.software.ibm.com/as400/products/clientaccess/win32/v6r1m0/servicepack)
 - l - バージョン 7.1: [as400/products/clientaccess/win32/v7r1m0/servicepack](ftp://ftp.software.ibm.com/as400/products/clientaccess/win32/v7r1m0/servicepack)

.

関連資料

69 ページの『状況メッセージのトラブルシューティング』
コンソールの接続中に接続に関する問題が発生した場合、オペレーション・コンソールは状況メッセージを表示して、接続のトラブルシューティングを支援します。

関連情報

 [IBM i Access Service Pack Web サイト](#)

PC でのオペレーション・コンソールの構成

オペレーション・コンソールの計画およびオペレーション・コンソール・チェックリストのセットアップを完了すれば、オペレーション・コンソール構成ウィザードを開始する準備が整ったことになります。

注:

- 構成を作成または変更するには、管理者権限が必要です。
- 新規システム用にオペレーション・コンソールをインストールする場合は、この時点でシステムの電源をオンにしてください。

PC 上でオペレーション・コンソールを開始するには、次のステップに従います。

1. 「**スタート**」をクリックします。
2. Windows XP を使用している場合は、「**プログラム**」を選択します。Windows Vista を使用している場合は、「**すべてのプログラム**」を選択します。
3. 「**IBM i Access for Windows**」を選択します。システムの電源がオンになっており、IPL が実行中か完了していることを前提としています。

使用可能な状態になるまで IPL プロセスに少なくとも 10 分間かけてから、処理を続行してください。これにより、構成ウィザードの間に PC が実行する照会に、システムが応答することができます。システムに、アテンション・ライトと、SRC A6005008 または A9002000 のいずれかが表示される場合は、構成ウィザードを続行してください。別の SRC が出ている場合は、このプロセスが正常に完了するのを妨げる可能性のある、ハードウェア障害が起こっている場合があります。この場合には、構成ウィザードの間に追加のデータを提供するように求められる場合があります。

4. 「**オペレーション・コンソール**」を選択します。

オペレーション・コンソールが表示されていない場合は、IBM i Access for Windows の選択セットアップを実行する必要があります。「**スタート**」 → 「**プログラム**」 → **IBM i Access for Windows** → 「**選択セットアップ (Selective Setup)**」の順にクリックします。

5. 目的の構成済み接続用の適切な手順を使用して、セットアップ・ウィザードを完了します。

重要: IBM i モデルは、論理区画を 0 ではなく 1 から数え始めます (区画が 1 つしかない場合も同様)。コンソールを正しく接続するには、クライアントの構成が論理区画に一致している必要があります。ネットワーク・データを使用したシステムの構成を BOOTP プロセスに依存している場合、この構成は、特に重要です。

接続の「**プロパティ**」 → 「**構成**」タブを使用して、この接続で使用する機能を選択解除することができます。

接続を開始するには、接続名を強調表示し、それから次の方法のいずれかを使用します。

1. 接続名を右マウス・ボタン・クリックし、「**接続**」を選択します。
2. ツールバーにある接続のアイコンをクリックします。

3. 接続のドロップダウン・リストをクリックして、「**接続**」を選択します。

オペレーション・コンソールの使用に関するオンライン・ヘルプを参照するには、「オペレーション・コンソール」ウィンドウの「ヘルプ」メニューから「ヘルプ」を選択してください。

関連概念

2 ページの『オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画』

オペレーション・コンソールのセットアップを開始する前に、オペレーション・コンソールを最も適切に構成する方法を判別します。

21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

ネットワーク (LAN) でのローカル・コンソールの構成:

ネットワーク (LAN) 上にローカル・コンソールを作成するには、次のステップに従ってください。

1. 「**スタート**」 → 「**プログラム**」 → 「**IBM i Access for Windows**」 → 「**オペレーション・コンソール**」の順をクリックして、オペレーション・コンソールを開始します。

注: 構成が存在しない場合は、セットアップ・ウィザードが自動的に開始します。前の構成がオペレーション・コンソールにある場合は、既存の構成と一緒にオペレーション・コンソールが開き、セットアップ・ウィザードは開始されません。この場合に、セットアップ・ウィザードを手動で開始するには、「**接続**」をクリックして、「**新規接続**」を選択します。

2. 「ようこそ」ウィンドウで、「**次へ**」をクリックします。

3. 「オペレーション・コンソールの接続を構成 (Configure Operations Console Connection)」ダイアログが表示されたら、「**次へ**」をクリックします。このダイアログを再度表示しないようにしたい場合は、「**次回から表示しない**」オプションをクリックしてから、「**次へ**」をクリックします。

4. 「**構成の選択 (Select Configuration)**」ウィンドウで、「**ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソール**」を選択したままにします。「**次へ**」をクリックします。

5. 「**保守ホスト名の指定 (Specify Service Host Name)**」ウィンドウで、接続するシステムまたは区画の保守ホスト名 (保守インターフェース名) を入力します。

保守ホスト名 (保守インターフェース) を作成するには、次の方法のいずれかを使用します。

- 現行コンソールまたは別のワークステーションを使用して、ネットワーク構成と一緒に手動で名前を割り当てます。
- PC が名前および IP 情報を割り当てるようにします。

「**次へ**」をクリックすると、システムがネットワーク上のシステムを検索することができます。PC がネットワークまたはターゲット保守インターフェースからの情報を受信した場合は、「**サービス TCP/IP アドレス**」に戻された IP アドレスが表示されます。

6. 表示された IP アドレスが正しいか確認し、「**次へ**」をクリックします。

7. すべての必須フィールドで、データを確認するか指定します。「**次へ**」をクリックします。

区画番号付けは、1 から始まります。

8. これがシステムへの最初のコンソール接続である場合は、フィールドに提供済みの、デフォルトの QCONSOLE 保守ツール装置 ID を受け入れます。これが構成済みの接続で、特定の保守ツール装置 ID を既に作成している場合は、この時点でそれを入力します。「次へ」をクリックします。これにより、「完了」ウィンドウが開きます。
9. 「完了」をクリックして構成を保管し、セットアップ・ウィザードを終了します。

この構成済みの接続を使用して、リモート・コントロール・パネル機能を使用することを計画している場合は、「プロパティ」でそのオプションを選択する前に、正常な接続を確立しておく必要があります。これにより、オペレーション・コンソールは、この接続で使用される保守ツール装置 ID が、システム上のリモート・コントロール・パネル機能への許可を持っているか判別できます。

注: アクセス・パスワードを割り当てる必要はなくなりました。オペレーション・コンソールは、この割り当てを既に行っており、自動的にそれを管理します。ただし、このパスワードを「プロパティ」で変更することにした場合は、オペレーション・コンソールからユーザーに制御が移り、ユーザーは、接続時にプロンプトが出た際にパスワードを手動で入力する必要があります。詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連タスク

63 ページの『保守ホスト名 (インターフェース名) の構成』

保守ホスト名 (インターフェース名) は、保守ツールで使用される、ネットワーク上の System i 保守接続を識別する名前です。これには、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソール構成も含まれます。

関連情報

ブートストラップ・プロトコル

ネットワーク上のローカル・コンソールをシステムに接続:

ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールをサーバーに接続することによって、活動状態のコンソールと操作可能なリモート・コントロール・パネルを使用することができます (構成済みの場合)。

活動状態のコンソールは、現在システムと対話中の System i プラットフォーム (5250 エミュレーション) へのコマンド・インターフェースです。機能リモート・コントロール・パネルを使用すると、ほとんどのコントロール・パネルの機能 (接続している区画によって異なる) を、あたかもシステムで操作しているかのように実行できます。

次のステップの一部を実行している際に問題が発生した場合は、『ネットワーク接続のエラー』トピックを参照して、考えられる解決策を検討してください。

ネットワーク上のローカル・コンソールをシステムに接続するには、次のステップに従います。

1. オペレーション・コンソールをオープンして接続を開始します。
 - a. 「スタート」をクリックして、「プログラム」を選択します。
 - b. 「IBM i Access for Windows」を選択します。
 - c. 「オペレーション・コンソール (Operations Console)」をクリックします。

デフォルトでは、オペレーション・コンソールは、ネットワーク上のローカル・コンソールを自動的にシステムに接続しません。「プロパティ」ページで「**オペレーション・コンソールが開始するときに接続を開始 (Start connection when Operations Console starts)**」を選択した場合に、ローカル・コンソールは自動的にシステムへ接続されます。

2. 「プロパティ」で「**オペレーション・コンソールが開始するときに接続を開始 (Start connection when Operations Console starts)**」を選択しなかった場合、次のようにしてシステムに接続する必要があります。
 - a. 構成名を選択します。
 - b. 「**接続**」メニューから「**接続**」をクリックします。
3. 「保守ツール・サインオン」ウィンドウで、割り当てられた保守ツールのユーザー ID とパスワードを使用してサインオンします。「LAN 保守ツール・サインオン」ウィンドウが表示されたら、ローカル・コンソールとシステムとの間の接続を許可するために、アクセス・パスワード、保守ツールのユーザー ID、および保守ツールのパスワードを入力します。

注: ユーザーがアクセス・パスワードを手動で変更した場合は、アクセス・パスワードはシステムから自動的に提供されないため、ユーザーがここでそれを入力する必要があります。

サインオンが正常に完了すると、接続状況に「**接続 (Connected)**」が表示されます。

4. 構成済みの場合、コンソールおよびリモート・コントロール・パネルが表示されることを確認します。

PC を使用して別のシステムにアクセスするには、別のシステムに接続する必要があります。

関連タスク

34 ページの『別のシステムへの接続』

別の接続を作成した後に、次のステップを実行して、オペレーション・コンソールを別のシステムに接続できます。

関連資料

71 ページの『ネットワーク接続のエラー』

これらは、ローカル・コンソールがネットワークを介してシステムとの接続に失敗した場合に発生する問題の解決策です。

13 ページの『オペレーション・コンソール構成の保護』

オペレーション・コンソールのセキュリティは、保守装置認証、ユーザー認証、データ・プライバシー、およびデータ保全性から成ります。

69 ページの『状況メッセージのトラブルシューティング』

コンソールの接続中に接続に関する問題が発生した場合、オペレーション・コンソールは状況メッセージを表示して、接続のトラブルシューティングを支援します。

関連情報

保守ツール・ユーザー ID とパスワード

オペレーション・コンソールの管理

コンソール構成の変更、異なるコンソール・タイプ間での切り替え、およびパスワードの変更などのタスクを実行することにより、オペレーション・コンソールを管理できます。

オペレーション・コンソールの計画および接続のセットアップが完了した後に、ローカルのコンソール接続を管理するのに役立ついくつかのオプションを使用できます。

関連概念

2 ページの『オペレーション・コンソールに関する考慮事項の計画』

オペレーション・コンソールのセットアップを開始する前に、オペレーション・コンソールを最も適切に構成する方法を判別します。

21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー

他のコンソール装置から制御を引き継ぐにはこれらの機能を使用することができます。

IBM i に組み込まれた特殊な一連の機能により、オペレーション・コンソールが他のコンソール装置から制御を引き継ぐことが可能になります。次の 2 つのメイン・アクションを実行可能です。

- 「**テークオーバー**」は、LAN 接続された、コンソールとして機能できる装置が、現行の LAN 接続コンソール装置から制御を継承するために使用するプロセスです。
- 「**リカバリー**」は、コンソールに関する問題が発生した後、コンソール上で稼働するジョブの制御を取り戻すプロセスです。リカバリー処理は、同じコンソール装置に対して行なう場合も、異なるコンソール装置に対して行なう場合もあります。また、追加の処理を行い、別の接続を使用する装置を使用可能にすることによって、リカバリー処理を容易に行える場合があります。平衡型コンソールは例外であり、同じタイプの 5250 エミュレーションを使用しないため、コンソールをリカバリーできません。

5250 エミュレーションを実行するコンソールとして機能するすべての装置には、接続性にかかわらず、接続が正常に行われると、それがコンソールであるか、データのウィンドウが表示されます。これは、コンソールが確立された後は、複数の装置のウィンドウ上にデータがあることを意味します。コンソール装置には、「切断」を示す空白ウィンドウがありません。このアクションにより、コンソールのジョブを、データを損失することなく別の装置へ「転送」することが可能になります。テークオーバーのコンソール・オプションが使用可能になっている場合、システムのコンソールの損失からのリカバリー能力も拡張されます。

リカバリー・アクションは、接続を失ったコンソールに対するデータ・ストリームを中断するか、テークオーバーを行なうことによって行なわれます。テークオーバーとは、追加データを保管し、そのデータをコンソールになる次の装置 (装置が前と同じコンソールである場合でも) に送信することです。リカバリー可能性とは、実質的には、前のコンソールが実行していた内容にかかわらず、同じ装置または別の装置から、そのコンソールへテークオーバーすることです。

コンソールのテークオーバーおよびリカバリー機能のデフォルト設定は、「**使用不可**」です。この機能が使用不可に設定された場合、アクティブ・コンソールでないすべてのコンソール対応デバイスには、「Console Information Status」ウィンドウがオープンします。

この機能の利点には、便利であることや冗長性などがあります。コンソール対応のデバイスは、1 つの設置場所のいろいろな位置、または複数の設置場所に置くことができるので、ユーザーは場所を変えて、これらのデバイスのどれからでもシステムを制御することが可能です。前のコンソールのアクティビティの内容にかかわらず、新規コンソールは、システムの再始動や IBM i オペレーティング・システムのインストール中でも、まったく同じ場所に置かれます。テークオーバーのコンソール・オプションが使用可能になっている場合、システムのコンソールの損失からのリカバリー能力も拡張されます。

関連資料

2 ページの『コンソールの計画の考慮事項』

1 つ以上のシステムに対するオペレーション・コンソールを計画する場合には、次の点を考慮してください。

5 ページの『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

37 ページの『複数コンソールの管理』

同一のシステムや区画に対するコンソールとして使用できるワークステーションが複数ある場合、それらの装置をコンソールとして使用する方法が複数存在する場合があります (構成や状況によって異なります)。

テークオーバーの詳細

以下は、コンソール・テークオーバー機能の追加情報です。

- この機能は、コンソールをテークオーバーする場合や、リカバリー機能を使用してコンソールの損失から保護する場合には、使用可能にしておく必要があります。
- オプション「**コンソールのリカバリーおよびコンソールを別のコンソールでテークオーバーすることを許可する (Allow console recovery and console can be taken over by another console)**」は、DST または SST の「コンソールの選択 (Select Console)」ウィンドウで使用可能になっています。
- この機能には、平衡型コンソールのサポートは含まれていません。5250 エミュレーションを使用するオペレーション・コンソール・ワークステーションのみが、この機能を使用できます。
- 5250 エミュレーション・ベースのコンソール装置は、コンソール・タイプを変更することによって、コンソールの消失のリカバリーに使用できます。このためには、新規コンソール・タイプをサポートするよう、ハードウェアの再割り振りを行うことが必要な場合があります。
- 適格な装置でのサインオンに使用する DST ユーザー ID は、テークオーバー・コンソール (V5R4 での新機能) のユーザー特権も所有している必要があります。
- 同じ属性 (例えば、24x80 または 27x132) を持つ装置のみがテークオーバーを実行することができます。例えば、装置 LAN1 が 24x80 モードで稼働し、LAN2 が 27x132 モードで稼働し、さらに LAN1 がコンソールである場合、LAN2 では、「**コンソールのテークオーバー (Take over the console)**」フィールドに「**NO**」が表示されます。
- 「コンソール情報状況 (Console Information Status)」画面のデータは変更されません。現在、データを自動的に最新表示する方法がありません。Enter キーを押して、「コンソールのテークオーバー (Take over the console)」以外のすべてのフィールドの更新を手動で行うことができます。ユーザーはこの画面を終了し、再度サインオンしてそのフィールドの変更を確認する必要があります。
- テークオーバーが D モード IPL でサポートされています。2 つの装置は、D モード IPL 中に同時に、データとともに接続することができます。

関連資料

『リカバリーの詳細』

以下は、コンソール・リカバリー機能の追加情報です。

リカバリーの詳細

以下は、コンソール・リカバリー機能の追加情報です。

- 同じコンソール接続で装置を使用するコンソールのリカバリーは、テークオーバー・オプションに直接結合されます。テークオーバー機能は必要ないが、コンソールの損失からのリカバリーが必要である場合、テークオーバー・オプションは使用可能にしておく必要があります。
- コンソールのリカバリーは、テークオーバー機能を使用します。リカバリーは、同じ装置または同じ接続の別の装置から行うことができます。例えば、オペレーション・コンソール LAN を使用し、コンソールになるようにセットアップされた複数の PC を持って、既存のコンソールに障害が発生した場合は、障害の原因を訂正してから同じ PC からテークオーバーを行なうことも、他の PC からテークオーバーを行なうこともできます。前のコンソールの実行内容にかかわらず、新規コンソールは、オリジナルのコンソールと同じステップで、同じジョブにあります。ジョブは、コンソールが操作可能でない場合でも継続します。
- 別のコンソール接続を使用するコンソールのリカバリー可能性によって、ユーザーに追加オプションが提供されます。コンソール・タイプを変更する必要があるバックアップ・コンソール計画がある場合、以下の点を考慮してください。
 - リカバリーの適合を容易にするために、すべてのコンソール・サポート・アダプターを、同じ IOP が使用するように配置できます。これにより、リカバリーを実現するために必要なステップ数が削減されます。
 - システムが区画に分割されていない場合、コンソールの変更を使用される方法によっては、コンソール・タイプの変更を即時に行うことができます。例:
 - DST または SST を使用してコンソール・タイプを変更すると、そのコンソールは次回の IPL になって変更されます。このアクションに続き、コントロール・パネルまたは RCP を使用して強制 DST (機能 21) を行っても、必ず機能するとは限りません。
 - 区画に分割された環境のタグの変更には、コンソールを変更するための IPL が必要です。
 - しかし、区画されていないシステム上でコンソール・サービス機能 (65+21) を使用すると、システムはこの検索の実行を強制され、適切なハードウェアおよびタスクが即時に活動化されます。
 - リカバリーに使用する各コンソール・タイプのハードウェアのサポートは、リカバリーの際に使用可能になっている必要があります。使用可能なメニューを使用するか、またはコンソール・サービス機能 (65+21) を使用して、コンソール・タイプを変更する必要もあります。

異なるコンソール・タイプを使用してリカバリーを完了するには、テークオーバーを試行する前に、新規コンソール・タイプを設定する必要があります。つまり、論理区画のタグ付けを含め、サポート・ハードウェアが既に使用可能になっているか、リカバリーを試行する前に、サポート・ハードウェアを物理的または論理的に移動する必要があります。メソッドのいずれかを使用して、コンソール・タイプを望ましい設定に変更する必要があります。既存のワークステーションおよび SST (使用可能になっている場合)、固有マクロ、またはコンソール・サービス機能 (65+21) を使用できます。

- V5R4 では、D モード IPL のテークオーバー機能 (1 つのコンソール装置が別のコンソールをテークオーバーする機能) がサポートされます。

例えば 65+21 を使用して、D モード IPL 中にコンソール・タイプ値を変更する場合、新規コンソール・タイプがハードウェアおよび装置をサポートする限り、別の装置に接続することができます。

関連資料

30 ページの『テークオーバーの詳細』

以下は、コンソール・テークオーバー機能の追加情報です。

49 ページの『コンソールのサービス機能 (65+21) の使用』

コンソール・サービス機能 (65+21) は、緊急時のコンソール・リカバリー機能です。

コンソールのテークオーバーを使用可能にする

コンソールのテークオーバーを使用可能にする前に、コンソールのテークオーバー特権を取得する必要があります。

以下の手順を使用してコンソールのテークオーバー特権を認可した後で、次の手順へ進んでコンソールのテークオーバーを使用可能にします。

ユーザーにコンソールのテークオーバー特権を追加するには、次のステップを実行します。

注: SST を使用して以下の手順を実行するには、「DST 環境の処理 (Work with DST environment)」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを選択し、「システム装置を選択します (Select System Devices)」ステップをスキップしてください。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「DST 環境の処理」を選択します。
3. 「保守ツール・ユーザー ID」を選択します。
4. 該当するユーザー ID に対応する行に 7 と入力し、Enter キーを押します。
5. 「コンソールのテークオーバー (Take over console)」オプションが表示されるまでスクロールダウンし、その行に 2 を入力してユーザーにこの特権を付与し、Enter キーを押します。

別のユーザー ID に対してこの手順を繰り返すには、ステップ 4 と 5 を繰り返してください。

この特権は、そのユーザー ID が次回サインオンしたときに使用されます。

注: ユーザーがコンソールをテークオーバーできる装置でサインオンすると、「コンソールのテークオーバー (Take over the console)」フィールドの状況が更新されます。ユーザーに付与したコンソールのテークオーバー特権などの変更を反映させるには、F3 または F12 を使用して「コンソール情報状況 (Console Information Status)」ウィンドウを終了し、再度サインオンする必要があります。

コンソールのテークオーバーおよびリカバリーを使用可能にするには、次を実行します。

- a. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
- b. 「DST 環境の処理」を選択します。
- c. 「システム装置」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップしてください)。
- d. 「コンソールの選択 (Select Console)」を選択します。
- e. 「コンソールのリカバリーおよびコンソールを別のコンソールでテークオーバーすることを許可する (Allow console recovery and console can be taken over by another console)」のオプション列に「1」と入力し、Enter キーを押します。

コンソールのテークオーバーのオプションが、即時に有効になります。

シナリオ: テークオーバーおよびリカバリー

次のシナリオは、テークオーバーおよびリカバリーのオプションを理解するのに役立ちます。

シナリオ: テークオーバーが使用可能な状態でのみ LAN に接続された装置:

このシナリオでは、コンソールのテークオーバーが使用可能で、複数の LAN に接続された装置がある場合、IPL 中に何が起こるかを説明しています。

LAN デバイスを LAN1、LAN2、LAN3 と呼びます。IPL は不在 (通常) モードで実行されます。

IPL においてコンソール装置が決定される時点で、複数の装置が同時に接続されていると、多かれ少なかれ競合状態となります。コンソール・タイプ設定で指定されたタイプ (ここでは LAN) を持ち、最初に接続された装置がコンソールとなり、通常のコンソール・スクリーンが表示されます。

ここでは、LAN1 を最初に接続される装置としましょう。この装置は IPL 中に、他のコンソール同様、IPL の進捗状況を示し、最後に IBM i サインオン・ウィンドウを表示します。LAN2 および LAN3 は、「注: この装置をコンソールにすることができます」という新規のデータ行とともに、特別な DST サインオン・スクリーンを表示します。残りのウィンドウは、他の DST サインオン・ウィンドウと同じです。LAN2 では、テークオーバー・コンソールのユーザー特権を持つユーザーがサインオンします。このユーザーには、同じ「コンソール情報状況 (Console Information Status)」スクリーンが表示され、「コンソールのテークオーバー (Take over the console)」フィールドにテークオーバーが可能なことを示す「Yes」が表示されます。LAN3 には、テークオーバー・コンソール特権を持たないユーザーがサインオンします。「コンソールのテークオーバー (Take over the console)」フィールドには、ユーザーが適切なテークオーバー特権を持たないため「No」が表示されます。

この時点では、1 つのデバイスのみがコンソールをテークオーバーするためのすべての条件を満たしていません。ウィンドウの下部に、F10 (コンソール接続のテークオーバー) があります。「F10」キーを押すと、ユーザーに「Take over Console Connection From Another User」ウィンドウが表示されます。これは確認ウィンドウであり、ユーザーにテークオーバーを取り消す最後の機会が与えられます。この時点で「1」を選択して Enter キーを押すと、テークオーバーが実行されます。その直後に、LAN1 に特別な DST サインオン・ウィンドウが表示され、テークオーバーを開始したデバイスである LAN2 には、転送が行われた時点で LAN1 に表示されたものとまったく同じウィンドウが表示されます。この際、稼働しているジョブがあっても、このアクションによる影響をまったく受けません。実際、元のコンソールが LIC または IBM i オペレーティング・システムのインストール中であつたり、または制限された状態で完全なシステムの保存を実行していても、システムはそれを認識しません。コンソール接続を切断し、後で再接続しても、現行ジョブのウィンドウ・データを取得できます。大容量のウィンドウ・データがジョブによって送信されていたにもかかわらず、送達されなかった場合、データは後々まで保管されています。コンソールが適格な装置から許可ユーザー (テークオーバー・コンソール特権を持つ) によって再接続されると、ユーザーには、すべての保存データが送達されるまで、ウィンドウが素早く最新表示されることがあります。実際、切断と再接続の実行はリカバリー (テークオーバーではない) とみなされます。

LAN3 で表示されるデータは、テークオーバー後も変更されません。現在、データを自動的に最新表示する方法がありません。しかし、LAN3 のユーザーが Enter を押せば、「コンソールのテークオーバー (Take over the console)」以外のすべてのフィールドが手動で最新表示されます。そのフィールドへの変更を表示するには、ユーザーはこのスクリーンを終了し、再度サインオンする必要があります。

コンソール構成の管理

次のタスクにより、ローカル・コンソール構成を管理できます。

ローカル・コンソールのシステムへの接続

ネットワーク上のローカル・コンソールをシステムに接続できます。接続した後に、別のシステムに接続できます。

別のシステムへの接続:

別の接続を作成した後に、次のステップを実行して、オペレーション・コンソールを別のシステムに接続できます。

オペレーション・コンソールを使用すると、複数の構成を持ち、一度に複数のシステムに接続することができます。

追加の接続がすでに作成されたことが前提となっています。

別のシステムに接続するには、以下のステップを実行します。

1. 「**オペレーション・コンソール接続 (Operations Console Connection)**」ウィンドウで、接続する構成名を選択します。
2. 「**接続**」メニューから「**接続**」をクリックします。

注: サポートされる PC オペレーティング・システムはすべて、複数のネットワーク構成を同時に接続することができ、単一の PC を複数のシステムまたは複数の区画のコンソールとして使用できます。

コンソール構成の変更

オペレーション・コンソールの使用中、要求に対応するために、既存ローカル・コンソールを変更する必要がある場合があります。

この作業を実行するには、ローカル・コンソールを変更または作成できる、管理者グループのメンバーである必要があります。システム名を変更する場合は、構成を削除して、新しい名前で構成を再作成する必要があります。

関連タスク

35 ページの『コンソール構成の削除』

オペレーション・コンソールの使用中、特定の要求に対応するために、既存ローカル・コンソールを削除する必要がある場合があります。コンソールを削除するには、管理者グループのメンバーである必要があります。

ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールの変更:

ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールを変更するには、この情報に従ってください。

この作業を実行するには、ローカル・コンソールを変更または作成できる、管理者グループのメンバーである必要があります。システム名を変更する場合は、構成を削除して、新しい名前で構成を再作成する必要があります。

重要: ネットワーク・データが変更される場合は、接続構成を削除して再作成する必要があります。新しい構成の接続を試みる前に、オペレーション・コンソールを閉じて再始動してください。この操作により、キャッシュされている古い構成に関連するすべての値が削除されます。

ネットワーク (LAN) 接続されたローカル・コンソールを変更するには、以下のステップに従ってください。

1. 構成名を選択します。

2. 「**切断**」をクリックします。コンソールの状況に「**切断**」が表示されるまで待ちます。
3. 構成名を選択します。
4. 「**接続**」メニューで「**プロパティ**」をクリックします。
5. 「**構成**」タブを選択します。
6. 変更を行い、「**OK**」をクリックします。

コンソール構成の削除

オペレーション・コンソールの使用中、特定の要求に対応するために、既存ローカル・コンソールを削除する必要がある場合があります。コンソールを削除するには、管理者グループのメンバーである必要があります。

注: キーボードの「Delete」キーを使用することもできます。削除する構成を強調表示して、Delete キーを押してください。

既存のローカル・コンソールを削除するには、次のステップに従います。

1. ローカル・コンソールがシステムに接続している場合は、次のようにして切断します。接続していない場合は、ステップ 2 に進みます。
 - a. 「オペレーション・コンソール (Operations Console)」ウィンドウから構成名を選択します。
 - b. 「**接続**」メニューから「**切断**」をクリックします。接続状況に「**切断中**」が表示されます。
 - c. ローカル・コンソールの接続状況に「**切断**」が表示されるまで待ちます。
2. 「オペレーション・コンソール (Operations Console)」ウィンドウから構成名を選択します。
3. 「**接続**」メニューから「**削除**」をクリックします。
4. 「**はい**」をクリックして削除を確認します。

関連タスク

34 ページの『コンソール構成の変更』

オペレーション・コンソールの使用中、要求に対応するために、既存ローカル・コンソールを変更する必要がある場合があります。

「プロパティ」ページの使用

「プロパティ」ページには、接続状態の構成に関連するシステムについての情報があります。

区画番号に「****」が表示されている場合は、構成済み接続に関連した構成エラーがあります。このエラーでは、区画 ID の誤り、または保守ホスト名の IP アドレスの誤りなどが考えられます。

「**一般**」タブには、ご使用の接続の接続先のシステムについての情報が含まれています。「**ログ・ディレクトリ (Log Directory)**」フィールドは、オペレーション・コンソールのデータ・ログへのパスを表示し、ユーザーが編集できる唯一のフィールドです。接続に使用される保守ツール装置 ID 名は表示され、「**装置 ID (Device ID)**」タブは表示されません。

「**構成**」タブには、使用する機能や構成の接続方法を実際に変更するためのオプションが表示されます。関連する構成で使用できないオプションは、選択不可になっています。

「**BOOTP 応答 (Answer BOOTP)**」は、任意の PC のどの構成がシステムに IP データを提供するかを、システム管理者が決定できるようにするためのオプションです。ネットワーク上でローカル・コンソールを使用する予定の新規システムまたは論理区画は、BOOTP を使用する場合があります。複数の PC または構

成がこのデータを提供できる場合、ブロードキャスト・パケットに最初に応答した PC がこのデータを提供します。どの PC がこのデータを提供するかを制御できれば、管理者はより柔軟に処理を行うことができます。

注: ネットワーク構成での最初のローカル・コンソールは、コンソールについてのみ構成されます。リモート・コントロール・パネルは、自動的に使用可能になりません。ここで、必要に応じてすべての機能をオンまたはオフにします。また、構成済みの接続が初めて正常に確立され、許可が検証されるまでは、リモート・コントロール・パネルのオプションは選択できません。

「**デバイス ID**」タブは、使用不可になります。必要なリセットは、PC が自動的に処理します。システムの保守ツール装置 ID は、オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」がゼロに設定されている場合のみ、個別にリセットされる必要があります。詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。

「**アクセス・パスワード**」タブでは、アクセス・パスワードを変更できます。アクセス・パスワードは、接続を確立する装置の認証の一部として使用されます。このパスワードを手動で変更すると、アクセス・パスワードはシステムで管理されなくなり、接続するたびにお客様が入力する必要がある場合があります。詳しくは、『オペレーション・コンソールの単純化』を参照してください。

プロパティ・ページで「？」 ヘルプを使用すると、詳細を表示することができます。「？」をクリックすると、「？」がカーソルに付きます。詳細を知りたいフィールドへ「？」を移動して、もう一度クリックしてください。文脈に依存したヘルプのダイアログ・ウィンドウに、そのフィールドに関連する情報が表示されます。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』
オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連資料

11 ページの『ネットワーク環境の準備』
ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

オペレーション・コンソールのウィンドウのカスタマイズ

グラフィカル・インターフェースを通じて対話すると、オペレーション・コンソールをより柔軟に使用できます。オペレーション・コンソール・ウィンドウをカスタマイズして、最も重要な情報を表示し、対話することができます。

オペレーション・コンソールは、最初に開始されるごとに、接続される新規システムを検索します。新しいシステムが検出されず、以前に構成された接続もないという場合は、セットアップ・ウィザードが開始されます。

初めてオペレーション・コンソールを開始する際に、ドロップダウン・メニュー「**オプション**」を使用できます。

- 「**警告の表示 (Show Warnings)**」このオプションを使用して、さまざまな共通ダイアログ・ウィンドウを表示しないようにすることができます。例えば、このオプションで削除機能の確認ダイアログ・ウィンドウが選択されていない場合、確認ウィンドウは表示されません。

- 「**前提条件警告 (Prerequisite Warning)**」要件に関する構成ウィザードで表示されるダイアログは、このオプションを使用してオフにできます。
- 「**シングル・サインオンの使用 (Use Single Sign-on)**」このオプションを使用すると、複数の構成に同時に接続する際に、共通のサインオン・データを共用できます。これにより、それぞれの接続ごとに別のウィンドウではなく、単一のサインオン・ダイアログ・ウィンドウを使用できます。
- 「**ダブルクリック (Double-Click)**」このオプションには、関連する 2 つの項目があります。1 つ目は、ツリー構造を展開または縮小する + (正符号) コントロールです。シングルクリックで展開または縮小する代わりに、ダブルクリックを使用するようこの機能を変更できます。2 つ目の項目では、接続を開始する場合に、構成名をダブルクリックするのではなく、別の方法を使用するようユーザーに求めます。

旧バージョンのオペレーション・コンソールに慣れているユーザーは、構成を変更するために 2 番目のボタンを使用してしまったかもしれませんが、2 番目のボタンを使用すると、選択した構成の「プロパティ」ページに進むようになりました。このバージョンでは、オペレーション・コンソールの構成に対するすべての変更は、「プロパティ」ページを使用して行います。

構成済みの接続を示すアイコンは、赤または緑の標識を使用して、接続されている構成、および接続されていない構成を示します。構成済みの接続の隣りにそれぞれ付いている + (正符号) は、Windows 標準の展開および縮小機能です。構成済みの各接続を、その接続に関連する個々の機能にまで展開できます。

ドラッグ・アンド・ドロップ機能を使用して、接続を構成できます。希望する方法で表示されるようにリストをカスタマイズできます。また、構成をグループ化し、共通の機能を複数の接続で同時に実行することもできます。ドラッグ・アンド・ドロップに加えて、ここでは、複数の接続の選択に、Windows 標準のタグ付け方式が適用されます。例えば、たいていの接続が共有する機能をリストの先頭にグループ化することもできます。

複数コンソールの管理

同一のシステムや区画に対するコンソールとして使用できるワークステーションが複数ある場合、それらの装置をコンソールとして使用する方法が複数存在する場合があります (構成や状況によって異なります)。

関連資料

5 ページの『バックアップ・コンソールの計画』

ほとんどのシステムの計画では、ハードウェアの障害が起こった場合に対応できるように一定水準の冗長性を持たせています。しかし、そのような計画の中で、コンソールについては考慮していない人がほとんどです。コンソールが突然失われた際に即時にリカバリーするには、バックアップ・コンソールを計画する必要があります。

29 ページの『オペレーション・コンソール接続のテークオーバーまたはリカバリー』

他のコンソール装置から制御を引き継ぐにはこれらの機能を使用することができます。

ネットワーク上の複数のローカル PC コンソール

ワークステーションがすでにコンソールとなっている場合に、ネットワーク上の別のローカル・コンソールがコンソールになろうとすると、接続が正常に行われ、接続を試みているコンソールがサインオン・ウィンドウまたは状況ウィンドウに表示されます。

どちらのウィンドウが表示されるかは、オプション「**コンソールのリカバリーおよびコンソールを別のコンソールでテークオーバーすることを許可する (Allow console recovery and console can be taken over by another console)**」が使用可能であるかどうかで決まります。このオプションが使用可能である場合は、テークオーバー操作を実行する許可があるかどうかを検証するための、サインオン・ウィンドウが表示されま

す。オプションが使用不可である場合は、「コンソール情報状況 (Console Information Status)」ウィンドウが表示されます。その理由は、ウィンドウの下部に表示されます。この場合、テークオーバーは使用できません。

「コンソール情報状況 (Console Information Status)」ウィンドウには、最後の正常な接続を基にして、どの装置が現行コンソールであるかが表示されます。このタイプの接続の多くは接続状態にすることができますが、活動状態になるコンソールは 1 つのみです。また、新しく接続した PC をこの状態にしておく、コンソールのアクティビティがこの PC に自動的に転送されません。この場合、2 つの選択肢があります。

- 「オペレーション・コンソール (Operations Console)」ウィンドウを使用して、接続を切断します。接続を切断するには、次のステップに従います。
 1. 切断する接続名を選択します。
 2. 「接続」 → 「切断」とクリックします。
- エミュレーター・セッションを切断します。エミュレーターを切断するには、次のステップに従います。
 1. エミュレーター・ウィンドウで、「通信 (Communication)」をクリックします。
 2. 「切断」を選択します。

次回に接続が確立されるときに、オペレーション・コンソールまたはエミュレーターを介してコンソールとして動作する装置がない場合、この PC がコンソールになります。この方法がコンソールのアクティビティを管理する正しい方法かどうかを判断するのは、ユーザー次第です。

コンソール・タイプの変更

コンソール接続のセットアップ方法に応じて、異なるコンソール・タイプに変更できます。

マイグレーションの一環として、オペレーション・コンソールが使用している LAN アダプターの割り振り解除が必要な場合があります。LAN アダプターの割り振り解除および移動については、『LAN アダプター・カードの割り振り解除または移動』トピックを参照してください。

- | ハードウェア管理コンソール (HMC) を使用する IBM i モデルを使用している場合、HMC からオペレーション・コンソールに、あるいは、オペレーション・コンソールから HMC に変更することができます。
- | 詳しくは、IBM Systems Hardware Information Center の『コンソール、インターフェース、および、端末の管理』> 『コンソール、インターフェース、および、端末の変更』のトピックを参照してください。
- | ハードウェア管理コンソール (HMC) に関して詳しくは、IBM Systems Hardware Information Center を参照してください。

関連タスク

65 ページの『オペレーション・コンソールでの LAN アダプター・カード使用の割り振り解除または移動』

マイグレーション時には、オペレーション・コンソールによる LAN カード使用の割り振り解除が必要な場合があります。ネットワーク構成または保守ツール・サーバー上でオペレーション・コンソールのローカル・コンソールを使用する予定がない場合は、LAN カードを割り振り解除する必要があります。

関連情報

エレクトロニク支援

IBM Systems Hardware Information Center

現行コンソールが操作できないときのコンソール・タイプの切り替え

現行コンソールで問題が発生した場合は、次の方法のいずれかを使用してコンソール・タイプを変更できます。

- LAN 接続された PC をコンソールとして使用しており、コンソールとしてセットアップされた別の PC がある場合、LAN 接続された PC のコンソールで問題が修正されるまで、別の PC をコンソールとして使用できる場合があります。
- 別のワークステーションから SST を使用します。
- コンソール・サービス機能 (65+21) を使用します。
- 別のワークステーションから適切な固有マクロを使用します。

注: 別の接続と接続する前に、ハードウェア割り振りまたは構成をすべて完了しておく必要があります。

例えば、区画に分割された環境で IOP を共有している場合、1 つの区画と別の区画との間で、資源の割り振り解除と割り振りを行うことができます (ハードウェアがこの方法をサポートする場合)。バックアップ・コンソールを計画していた場合、この作業の一部またはすべてが完了している場合があります。すぐに利用できるバックアップ・コンソールがない場合、一部のタスクでは、システムで新規コンソールを使用できる状態にするために IPL を 1 回以上実行しなければならない場合があります。

- 1 すべてのハードウェアおよび構成が完了していると仮定して、既存のコンソール (LAN 接続されたもの)
- 1 を切断し、コンソール・サービス機能 (65+21)、固有マクロ、または別のワークステーションからの SST
- 1 を使用してコンソール・タイプを設定します。その後、コンソール・サービス機能 (65+21) または固有マ
- 1 クロ OPSCONSOLE RESTART を使用すると、アダプターが自動的に活動化されます。

注: オペレーション・コンソール問題のリカバリーまたはデバッグの際に、問題の種類や現行のコンソールで使用されている接続、ターゲットのコンソール・タイプおよびシステムの現在の状態によっては必要となるコンソール・サービス機能 (65+21) がいくつかあります。機能またはリカバリー操作について不明な点がある場合は、サービス・プロバイダーに連絡して支援を求めてください。

関連資料

49 ページの『コンソールのサービス機能 (65+21) の使用』

コンソール・サービス機能 (65+21) は、緊急時のコンソール・リカバリー機能です。

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更

平衡型コンソールから オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールに変更するには、PC とシステムの両方で一連のステップを実行する必要があります。

作業を始める前に、PC およびシステムが、オペレーション・コンソールのハードウェア要件をすべて満たしていることを確認してください。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

区画されていないシステムでの、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更:

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するには、既存のコンソールを使用してシステム上で次のステップを実行する必要があります。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。SST を使用可能にするには、SST オプション「保守ツール装置の ID」をアンロックする必要があります。
2. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
3. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
4. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
5. 新しいコンソール・タイプを選択します。
 - オペレーション・コンソール (LAN) を選択した場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 「オペレーション・コンソール・アダプターの検査 (Verify Operations Console Adapters)」ウィンドウが表示されます。これは、システムによって検出され、LAN 接続のために使われるリソースです。LAN アダプターが見つからないというメッセージを受け取った場合は、オペレーション・コンソールのハードウェア要件を満たす必要があります。
 - b. F11 を押して、アダプターを構成します。
 - c. 適切なネットワーク・データを入力します。
 - d. F7 を押して、データを保管します。
 - e. F14 を押して、オペレーション・コンソールで使用するためにアダプターを活動化します。
6. DST のメインメニューに戻るまで、F3 を押します。

これで、対象とするコンソール・タイプで使用できるように、システムが構成されました。システムが新規コンソールを使用できるようにするために、システムの初期プログラム・ロード (IPL) を実行する必要があります。

平衡型装置をバックアップ・コンソールとして使用する予定がない場合でも、この時点では、その装置またはその装置のアダプターの取り外しは行わないでください。問題をデバッグする際に必要となる場合があります。

システム値 QAUTOCFG を ON に設定する必要があります。このシステム値を検査または設定するには、以下のいずれかを使用します。

- WRKSYSVAL QAUTOCFG コマンドを使用します。
- 手動 IPL 時に、「IPL オプション (IPL Options)」ウィンドウの「**主要なシステム・オプションの設定 (Set major system options)**」で「**Y**」を選択します。次に、「**自動構成の使用可能化 (Enable automatic configuration)**」に対して「**Y**」を選択します。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

42 ページの『平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールへ変更後に新しいコンソール・タイプを使用するための PC の構成』

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、新しいコンソール・タイプを使用できるように PC を構成する必要があります。

関連情報

保守ツールへのアクセス

論理区画内での、平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールへの変更:

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールに変更するには、既存のコンソールを使用してシステム上で次のステップを実行してから、システムの電源を切るか初期プログラム・ロード (IPL) を実行してください。

注: オペレーション・コンソールのハードウェア要件を満たすためにアダプターの追加または移動が必要な場合は、以下のマイグレーション・ステップを開始する前に、アダプターの追加または移動を行ってください。この時点では、現行の入出力プロセッサ (IOP) からの平衡型アダプターの移動や取り外しは行わないでください。

1. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
2. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
3. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
4. 以下のコンソール選択項目のいずれかを使用して、新しいコンソール・タイプを選択します。
 - オプション 3 (オペレーション・コンソール (LAN)) を選択し、以下を実行します。
 - a. 「オペレーション・コンソール・アダプターの検査 (Verify Operations Console Adapters)」ウィンドウが表示されます。これは、システムによって検出され、LAN 接続のために使われるリソースです。「**有効な LAN アダプターが使用可能ではありません (No valid LAN adapter available)**」というメッセージが戻された場合は、オペレーション・コンソールのハードウェア要件が満たされていません。その場合は、F3 を使用して、DST のメインメニューに戻り、このトピックを上記のステップ 1 から再度開始してください。
 - b. F11 を押して、アダプターを構成します。
 - c. 適切なネットワーク・データを入力します。
 - d. F7 を押して、データを保管します。
 - e. F14 を押して、オペレーション・コンソールで使用するためにアダプターを活動化します。
5. DST のメインメニューに戻るまで、F3 を押します。

これで、対象とするコンソール・タイプで使用できるように、システムが構成されました。システムが新規コンソールを使用できるようにするために、システムの初期プログラム・ロード (IPL) を実行する必要があります。

平衡型装置をバックアップ・コンソールとして使用する予定がない場合でも、この時点では、その装置またはその装置のアダプターの取り外しは行わないでください。問題をデバッグする際に必要となる場合があります。

システム値 QAUTOCFG を ON に設定する必要があります。このシステム値を検査または設定するには、以下の方法のいずれかを使用します。

- WRKSYSVAL QAUTOCFG コマンドを使用します。
- 手動 IPL 時に、「IPL オプション (IPL Options)」ウィンドウの「主要なシステム・オプションの設定 (Set major system options)」で「Y」を選択します。次に、「自動構成の使用可能化 (Enable automatic configuration)」に対して「Y」を選択します。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

『平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールへ変更後に新しいコンソール・タイプを使用するための PC の構成』

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、新しいコンソール・タイプを使用できるように PC を構成する必要があります。

関連情報

保守ツールへのアクセス

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールへ変更後に新しいコンソール・タイプを使用するための PC の構成:

平衡型コンソールからネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、新しいコンソール・タイプを使用できるように PC を構成する必要があります。

初期プログラム・ロード (IPL) を実行して、エラーがないことを確認するようお勧めします。その後で、計画したハードウェアの取り外しや移動を行います。

アダプター・カードやケーブルを取り外す際には、システムの電源を切ってから行うことをお勧めします。

注: 新しいコンソールが IBM i 上で作動しない場合は、別のワークステーションを使用して、古いコンソール装置に関連付けられた制御装置記述および装置記述を手動で削除することが必要となる場合があります。

関連概念

21 ページの『オペレーション・コンソールのための PC の準備』

計画要件を完了し、使用する構成および PC オペレーティング・システムを確認したら、オペレーション・コンソールをセットアップするための事前定義チェックリストの 1 つを完了することができます。カスタマイズしたチェックリストを作成してそれを完了することもできます。

ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更

ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更するには、システムで、またオプションで PC において、一連のステップを完了する必要があります。

作業を始める前に、PC およびシステムが、オペレーション・コンソールのハードウェア要件をすべて満たしていることを確認してください。

関連資料

7 ページの『オペレーション・コンソールのハードウェア要件』

オペレーション・コンソール構成では、PC およびハードウェア要件を満たす必要があります。

区画されていないシステムでの、ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更:

オペレーション・コンソールからネットワーク (LAN) 上の平衡型コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、既存のコンソールを使用して、システムで以下のステップを実行してください。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
3. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
4. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
5. 現在ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを使用している場合は、オペレーション・コンソール (LAN) を選択し、以下のステップに従ってネットワーク・アダプターの割り振りを解除してください。

注: この資源が、保守ツール・サーバー (System i 接続) 用に使用される場合、またはバックアップ・コンソールとしてネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールを使用する計画の場合は、クリア操作する必要はありません。これらのいずれかに該当する場合、ステップ 5e に進んでください。

- a. 「**オペレーション・コンソール (LAN 接続) (Operations Console (LAN))**」を選択します。現在使用されている LAN アダプターが表示されます。
 - b. 「F11」キーを押します。
 - c. F6 を押して、構成データを消去します。
 - d. F7 を押して、この新しい値を保管します。**オプション**で、F13 を押してネットワーク・カードを非活動化できます。
 - e. F12 を 2 回押して、このウィンドウを終了します。
 - f. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
6. 「**平衡型 (Twinaxial)**」を選択します。
 7. F3 を押して、DST のメインメニューに戻ります。

これで、対象とするコンソール・タイプで使用できるように、システムが構成されました。システムが新規コンソールを使用できるようにするために、システムの初期プログラム・ロード (IPL) を実行する必要があります。

システム値 QAUTOCFG を ON に設定する必要があります。システムでこのシステム値を検査または設定するには、以下のいずれかを使用します。

- WRKSYSVAL QAUTOCFG コマンドを使用します。
- 手動 IPL 時に、「IPL オプション (IPL Options)」ウィンドウの「**主要なシステム・オプションの設定 (Set major system options)**」で「**Y**」を選択します。次に、「**自動構成の使用可能化 (Enable automatic configuration)**」に対して「**Y**」を選択します。

関連タスク

65 ページの『オペレーション・コンソールでの LAN アダプター・カード使用の割り振り解除または移動』

マイグレーション時には、オペレーション・コンソールによる LAN カード使用の割り振り解除が必要な場合があります。ネットワーク構成または保守ツール・サーバー上でオペレーション・コンソールのローカル・コンソールを使用する予定がない場合は、LAN カードを割り振り解除する必要があります。

45 ページの『ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更する際の、PC でのオプション・ステップの実行』

PC をオペレーション・コンソール用に使用しない場合は、以下のステップに従います。

関連情報

保守ツールへのアクセス

論理区画での、ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更:

ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型ケーブルに変更するためには、既存のコンソールを使用して、システムで次のステップを実行する必要があります。

注: 平衡型コンソールのハードウェア要件を満たすためにアダプターの追加または移動が必要な場合は、以下のステップを開始する前に、アダプターの追加または削除を行ってください。この時点では、現行の入出力プロセッサ (IOP) からの平衡型アダプターの移動や取り外しは行わないでください。

1. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
2. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
3. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
4. 現在ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを使用している場合は、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを選択して、以下のステップに従ってネットワーク・アダプターの割り振りを解除してください。

注: この資源が、保守ツール・サーバー (System i 接続) 用に使用される場合、またはバックアップ・コンソールとしてネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールを使用する計画の場合は、クリア操作する必要はありません。これらのいずれかに該当する場合、ステップ 13e に進んでください。

- a. 「**オペレーション・コンソール (LAN 接続) (Operations Console (LAN))**」を選択します。現在使用されている LAN アダプターが表示されます。
 - b. 「F11」キーを押します。
 - c. F6 を押して、構成データを消去します。
 - d. F7 を押して、この新しい値を保管します。
 - e. F12 を 2 回押して、このウィンドウを終了します。
 - f. 「**コンソール (Console)**」を選択します。
5. 「**平衡型 (Twinaxial)**」を選択します。
 6. F3 を押して、DST のメインメニューに戻ります。

これで、対象とするコンソール・タイプで使用できるように、システムが構成されました。システムが新規コンソールを使用できるようにするために、システムの初期プログラム・ロード (IPL) を実行する必要があります。

オペレーション・コンソールをバックアップ・コンソールとして使用する予定がない場合でも、この時点では、そのコンソールまたはそのコンソールのアダプターの取り外しや移動は行わないでください。問題をデバッグする際に必要となる場合があります。

システム値 **QAUTOCFG** を **ON** に設定する必要があります。システムでこのシステム値を検査または設定するには、以下の方法のいずれかを使用します。

- **WRKSYSVAL QAUTOCFG** コマンドを使用します。
- 手動 IPL 時に、「IPL オプション (IPL Options)」ウィンドウの「**主要なシステム・オプションの設定 (Set major system options)**」で「**Y**」を選択します。次に、「**自動構成の使用可能化 (Enable automatic configuration)**」に対して「**Y**」を選択します。

『オペレーション・コンソールから平衡型コンソールに変更する際の、PC でのオプション・ステップの実行』に進みます。

関連タスク

『ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更する際の、PC でのオプション・ステップの実行』

PC をオペレーション・コンソール用に使用しない場合は、以下のステップに従います。

関連情報

保守ツールへのアクセス

ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールに変更する際の、PC でのオプション・ステップの実行:

PC をオペレーション・コンソール用に使用しない場合は、以下のステップに従います。

重要: 以下のステップを実行する前に、平衡型コンソールに問題がないことを必ず確認してください。

1. 現在のコンソール接続を切断します。切断するには、以下のようになります。
 - a. 構成名 (「IBM i 接続」の下) を選択します。これは、オペレーション・コンソールが特定のシステムを参照する際に使用する名前です。
 - b. 「接続」メニューから「切断」をクリックします。接続状況に「**切断中**」が表示されます。
 - c. 状況が「**切断**」になるまで待ちます。
2. 平衡型コンソールをケーブル配線でシステムに接続し、平衡型コンソールとシステムの電源を入れます。
3. 初期プログラム・ロード (IPL) を実行して、エラーがないことを確認します。その後で、計画したハードウェアの取り外しや移動を行います。ケーブル配線された接続をバックアップ・コンソールとして使用しない場合は、新しいコンソールの構成を確認した後で、現行の構成を削除します。構成を削除するには、以下のようになります。
 - a. 構成名 (IBM i 「Connection」の下) を選択する。
 - b. 「接続」メニューから「削除」をクリックします。
 - c. 「はい」をクリックして削除を確認します。
 - d. IBM i Access for Windows をアンインストールします。
4. PC の電源を切って、この時点で不要となったハードウェアおよびケーブルをすべて取り外してください。ケーブルやアダプターをシステムから取り外す際には、システムの電源を切ってから行うことをお勧めします。

注: 新しいコンソールが作動しない場合は、別のワークステーションを使用して、古いコンソール装置に關連付けられた制御装置記述および装置記述を手動で削除することが必要となる場合があります。

関連タスク

43 ページの『区画されていないシステムでの、ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更』

オペレーション・コンソールからネットワーク (LAN) 上の平衡型コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、既存のコンソールを使用して、システムで以下のステップを実行してください。

44 ページの『論理区画での、ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更』

ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型ケーブルに変更するためには、既存のコンソールを使用して、システムで次のステップを実行する必要があります。

ネットワーク上のローカル・コンソールの管理

ネットワーク上のローカル・コンソールを構成した後に、保守ツール装置 ID のパスワードおよびアクセス・パスワードの管理、保守ツール装置 ID の作成、および保守ホスト名の構成などのタスクを実行することにより、コンソールを管理できます。

キーボード定義の変更

キーボード定義を変更すると、システムは、キーを押した際に、デフォルト設定とは異なるアクションを実行できます。

キーボード定義を変更するには、次のステップに従ってください。

1. 「エミュレーター」ウィンドウでドロップダウン・メニューを使用して、次のようにします。
 - a. 「編集」をクリックします。
 - b. 「プリファレンス (Preferences)」をクリックします。
 - c. 「キーボード」をクリックします。
2. 「ユーザー定義」をクリックします。
3. 「参照」をクリックしてから、IBM i Access for Windows がインストールされている場所に移動します。次に、「クライアント・アクセス」→「エミュレーター」→「専用」の順に展開します。

注: IBM パーソナル・コミュニケーションズを使用している場合、デフォルト・パスは、「Documents and Settings」→ユーザー名→「Application Data」→「IBM」→「パーソナル・コミュニケーションズ」です。

4. 必要な項目を選択します。
5. 「OK」を 2 回クリックします。

3179 と 3477 との間のエミュレーターのモード変更

エミュレーターのモードを、表示している内容に応じて、現在の設定からより広い設定またはより狭い設定に変更しなければならない場合があります。

デフォルトではエミュレーターは 24 X 80 (3179) に設定されているため、スプール・ファイルまたは vlog を表示すると、キーボードを使ってウィンドウを左右にシフトしなければなりません。こうした場合は、27 X 132 (3477) モードを使用すると便利です。

注: 1 つのモードから別のモードに遷移すると、コンソールはいったん切断され、再接続されます。

エミュレーターのモードを変更するには、次のステップに従います。

1. エミュレーター・ウィンドウで、「**Communications**」をクリックします。
2. 「**Configure**」を選択し、次に「**Session Parameters**」をクリックします。
3. 希望の画面サイズを選択し、「**OK**」をクリックします。
4. 「**OK**」をクリックして、接続を終了します。
5. 「**OK**」をクリックして、エミュレーター・セッションを閉じます。

「**コンソールのリカバリーおよびコンソールを別のコンソールでテークオーバーすることを許可する (Allow console recovery and console can be taken over by another console)**」オプションが使用不可の場合、コンソールは、サインオン・ウィンドウに戻り、修正モードとなります。これで、この手順を終了することができます。

オプション「**コンソールのリカバリーおよびコンソールを別のコンソールでテークオーバーすることを許可する (Allow console recovery and console can be taken over by another console)**」が使用可能な場合は、コンソールはサインオン・ウィンドウに戻りますが、「**コンソール情報状況 (Console Information Status)**」ウィンドウが開かず、制御を引き継ぐオプションが「**No**」に設定されている可能性があります。これは、エミュレーターの属性における変更が原因です。新しいコンソール・タイプが、接続時に現行コンソールのタイプと一致していません。この時点で、次のいずれかのアクションを実行する必要があります。

- F18 を押して、現在のコンソール装置に切り替えます。
- 別のワークステーションからシステム保守ツール (SST) を使用して、マクロ **OPSCONSOLE RESTART** を実行します。
- コンソール・サービス機能 (65+21) を使用して、コンソールを再始動する機能 65、21、21 を実行します。

コンソールは再び閉じますが、2 から 3 分で再接続するはずです。

- | **重要:** コンソールのリカバリーは、試行されません。これにより、コンソール装置の電源オフと電源オンが
- | 強制的に行われるため、システムにとっては新規のコンソール装置のように見えます。コンソール・
- | セッションを再開する場合は、これらのアクションは実行しないでください。

関連タスク

51 ページの『**OPSCONSOLE マクロの使用**』

OPSCONSOLE マクロは、システム側のデバッグおよび分析ツールで、コンソール関連作業についてのデータを収集したり、コンソール関連作業を管理するために使用します。

関連資料

49 ページの『**コンソールのサービス機能 (65+21) の使用**』

コンソール・サービス機能 (65+21) は、緊急時のコンソール・リカバリー機能です。

手動 IPL を使用したシステムの始動

手動の初期プログラム・ロード (IPL) を実行すると、ご使用のシステムを始動できます。

これらの説明では、システムの電源がオフになっていることを前提としています。システムの電源がオンの場合、各方法のうちのいずれかを使用して、手動 IPL を始動させることができます。

手動 IPL を実行するには、次のステップに従います。

1. コントロール・パネルの「**機能 / データ (Function/Data)**」画面を確認します。キースティックのあるシステムでは、「**機能 / データ (Function/Data)**」画面に「**手動 (Manual)**」モードおよび「**01 B**」が表示されます。

キースティックのないシステムでは、「機能 / データ (Function/Data)」画面に「01 BM」が表示されません。

2. システムが手動モードであり、B 側で IPL を実行する場合、ステップ 8 に進みます。システムが手動モードではないか、または B 側で IPL を実行するように設定されていない場合は、ステップ 3 に進みます。
3. 「機能 / データ (Function/Data)」画面が明るくなっている場合は、ステップ 4 に進みます。「機能 / データ」画面が明るくない場合は、システムに電力が供給されていることを確認してください。
4. 「02」が「機能/データ (Function/Data)」画面に表示されるまで、「上 (Up)」または「下 (Down)」を押します。

注: システムがキースティックを使用する場合、この時点でキースティックを挿入し、「モード」ボタンを使用して「手動 (Manual)」を選択します。

5. コントロール・パネル上で、「実行 (Enter)」ボタンを押します。
6. 「B M」が「機能/データ (Function/Data)」画面に表示されるまで、「上 (Up)」または「下 (Down)」を押します。システムがキースティックを使用する場合、「B」を選択します。「機能 / データ (Function/Data)」画面に「02 B」が表示されるはずですが。
7. コントロール・パネル上で、「実行 (Enter)」ボタンを押します。
8. コントロール・パネル上で、「電源 (Power)」ボタンを押します。システムの電源がオンになり、IPL の実行が進行し、これらの説明を継続できるようになるには、約 10 分から 45 分かかります。「機能 / データ (Function/Data)」画面で、データが変わることが確認できるはずですが。IPL の最後のステップは完了に 30 分程度かかる場合があります、「アテンション」ライトがオンになります。
9. 参照コード x6004031 または x6004508 (x は任意の文字) が、「機能/データ (Function/Data)」画面に最高 30 分表示され続けます。
10. システムが手動 IPL の初期段階を完了したときに、「01 B」が表示され、コンソールが使用できるようになります。

注: アテンション・ライトがオンになっていなくても、一部のシステム参照コード (SRC) が表示される場合があります。例えば、x6xx450x (x は文字または数字) などです。通常、これらの SRC コードは、システムが予期しない状態を検出し、この状態を示すデータがコンソールにある可能性があることを示しています。この状態およびコンソールの結果のデータは、「IPL またはシステムのインストール (IPL or Install the System)」ウィンドウよりも優先されます。

アテンション・ライトが明るくなっている場合は、ステップ 11 に進みます。

アテンション・ライトが明るくない場合は、コンソールが備わっていないので、次の点を考慮します。

- システムの IPL の実行が十分に進行しなかったために、これらの手順を継続できる状態にならなかった可能性があります。これ以上進む前に、少なくとも 30 分待ちます。
- 30 分経ってもシステムで何もアクティビティが起こらず、アテンション・ライトが明るくならなかった場合には、『トラブルシューティングおよび保守 (Troubleshooting and service)』トピックでシステムの問題の対処と報告に関する情報を参照してください。
- 問題が解決したら、このセクションの最初から再度開始します。

11. システム参照コード (SRC) x6xx500x (x は任意の文字または数字) が「機能 / データ (Function/Data)」画面に表示されている場合は、『システム参照コード (SRC) データのトラブルシューティング』トピックで詳細を参照してください。システム参照コード (SRC) x6xx500x (x は任意の文

字または数字) が「機能 / データ (Function/Data)」画面に表示されていない場合、『トラブルシューティングおよび保守 (Troubleshooting and service)』トピックで、システムの問題の対処と報告に関する情報を参照してください。

注: コンソールに関連する問題の場合、一般的に報告される SRC コードは A6005008 です。参照コード A600500x (x は任意の番号) が表示される場合は、コンソール・サービス機能 (65+21) に進んで、デバッグまたは変更を行うことができます。

関連資料

73 ページの『システム参照コード・データのトラブルシューティング』

これらのシステム参照コード (SRC) のいずれかが戻された場合は、オペレーション・コンソールの構成に問題がある可能性があります。

コンソールのサービス機能 (65+21) の使用

コンソール・サービス機能 (65+21) は、緊急時のコンソール・リカバリー機能です。

注: このサービス機能を使用するには、コントロール・パネル機能に精通している必要があります。このサービス機能の使用法が不適切であると、システムが不安定になる恐れがあります。システムが不安定になる懸念がある場合は、お近くのサポートにお問い合わせください。

コンソール・サービス機能 (65+21) を使用すると、以下の機能を利用できます。

- コンソール・タイプ値を変更する (01-03)

コンソール・サービス機能 (65+21) を使用して、コンソール・タイプを現行値から別の値へ変更できます。例えば、オペレーション・コンソール LAN 接続付きでシステムを注文したが、その操作に問題があると想定します。

- オペレーション・コンソールで使用する LAN アダプターの資源および構成をクリアする (C3)

このオプションにより、オペレーション・コンソールに使用されている現行 LAN アダプターを切り離すことができます。このオプションを使用して、構成内の間違いに対処できる場合があります。例えば、タイプ・エラーにより別のデバイスの IP アドレスを入力してしまったとします。接続時に、クライアントは、システムの LAN アダプターがコンソールで使われるように構成しましたが、他のデバイスがアクティブだったために、コンソールは接続に失敗しました。このオプションを使用すると、コンソールに関するシステムのネットワーク・データが消去され、クライアントの構成を削除して始めからやり直すことができ、それによって BOOTP 処理が再び行われるようになります。

LAN アダプター構成をクリアする目的によっては、LAN アダプターを停止して再始動させることも必要となる場合があります。この例では、非活動化および活動化 (A3) によるクリア機能を行うことで、IPL を実行する時間を節約しています。

- オペレーション・コンソールで使用する LAN アダプターを非活動化してから活動化する (A3)

このオプションを使用すると、何らかのネットワークの問題が原因でシステムが不良状態になり、コンソールが活動化できない場合に、オペレーション・コンソールが使用する LAN アダプターをリセットできます。この結果、LAN アダプターは強制的に非活動化されてから、再度バックアップを開始します。これにより、接続障害を起こした元の問題が解決されていれば、問題は解消します。

LAN アダプター構成をクリアした後など、一部の状況下では、このオプションを IPL の代わりに使用することができる場合があります。

- オペレーション・コンソールのフライト・レコーダーを vlogs にダンプする (DD)

注: このオプションは、システムが D モードで IPL を実行した場合は作動しません。

このオプションを使用すると、サポート担当員に代わって、コンソールの接続失敗に関する有用なデバッグ情報を収集できます。この方法は、IPL が必須となる主記憶装置のダンプを実行するよりも、手間がかかりません。コンソール・サービス機能 (65+21) を使用すると、オペレーション・コンソールで使用したさまざまなコード部分から、すべてのフライト・レコーダー・ログの収集が試行されます。メジャー・コード 4A00 およびマイナー・コード 0500 についての vlog のセットが作成されます。これらの vlog は、分析のためにユーザーのサービス・プロバイダーへ送信されます。

注: 可能な場合は、システム上で IPL を実行して、IPL が失敗した場合でもすべての vlog が作成されるように保証します。フライト・レコーダーのダンプが実行される前に、LIC により vlog タスクが開始されるようにするためです。

この機能がどのように動作するかの概要を、以下に示します。

注: ご使用のシステムが手動モードでない場合、または拡張機能が活動化されていない場合、あるいはその両方の場合は、次の手順を実行します。

1. システムでキースティックを使用する場合は、それをキー・スロットに挿し込みます。
2. システムのコントロール・パネルを使用して、システムを手動モードにします。
3. 「上 (Up)」および「下 (Down)」ボタンを使用して、機能「25」を選択します。Enter キーを押します。
4. 「上 (Up)」ボタンを使用して、機能「26」を選択します。Enter キーを押します。

以下のコードを使用すると、進行状況を追跡できます。

A6nn 500x

ここで、nn の意味は次のとおりです。

00 = 定義済みコンソールなし

01 = 平衡型コンソール

02 = 直接接続するオペレーション・コンソール (7.1 で廃止)

03 = LAN オペレーション・コンソール

C3 = LAN 構成のクリア

A3 = LAN オペレーション・コンソールのアダプターを非活動化してから活動化

DD = コンソール関連のすべてのフライト・レコーダーを vlog セットにダンプ

注:

1. 03 を選択した場合、機能 A3 も実行して LAN アダプターを活動化する必要がある場合がまれにあります。また、LAN 接続のコンソールが接続された場合、エミュレーターは切断 (Disconnected) 状態になる場合があります。その場合、「通信 (Communication)」をクリックし、「接続 (Connect)」を選択することでもう一度開始することができます。

x の意味

A6nn 500A

現在のコンソール・タイプ設定を表示中です。

A6nn 500B

2 回目の 65+21 を入力したので、編集モードです。

A6nn 500C

2 回目の 21 を実行し、コンソールに別の値を設定するなどのアクションが起きました。

A6nn 500D

編集モードに入ってから長時間アクションを起こさなかったため、変更を行う場合は、編集モードに入り直す必要があります。この時点で 21 を実行すると、コンソールは強制的に DST となり、アクションは起きません。

コンソールの変更の例を次に示します。

コンソール・タイプは 01 (平衡型) で、ユーザーは LAN (03) を使用したいと考えているとします。

65 - 21 = A601 500A 表示モードであり、コンソール・タイプは 01 です。

65 - 21 = A602 500B 編集モードに入り、カウンターが増加しました。

65 - 21 = A603 500B 再びカウンターが増加しました。

21 = A603 500C アクションを呼び出しました (コンソール・タイプを 03 に設定)。

関連資料

11 ページの『ネットワーク環境の準備』

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

OPSCONSOLE マクロの使用

OPSCONSOLE マクロは、システム側のデバッグおよび分析ツールで、コンソール関連作業についてのデータを収集したり、コンソール関連作業を管理するために使用します。

IBM 提供のマクロは、システムに常駐する高機能のデバッグおよび分析ツールです。このツールの使用を誤るとシステムで予期しない問題が発生する場合がありますため、このツールは、サポート要員の指示があった場合にのみ使用されることを前提に提供されています。保守ツールの分野に慣れていない場合は、これらのツールを使用する前に、サービス・プロバイダーに連絡して援助を求めてください。以下の手順は、コンソール・デバイスがなく、ただし、システム保守ツール (SST) を使用できる別のワークステーションがある場合を前提にしています。

注: IBM 提供のマクロの不適切な使用によって、システムの完全な再ロードを必要とする変更が引き起こされる場合があります。これらの IBM 提供のマクロは、サポート担当者から要求があった場合にのみ使用することを、強くお勧めします。

オペレーション・コンソールの IBM 提供マクロ・サポートを使用するには、以下のステップに従います。

1. システム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「保守ツールの開始 (Start a service tool)」を選択します。
3. 「表示/変更/ダンプ (Display/Alter/Dump)」を選択します。
4. 「ストレージの表示/変更 (Display/Alter storage)」を選択します。
5. 「ライセンス内部コード (LIC) データ (Licensed Internal Code (LIC) data)」を選択します。
6. 「拡張分析 (Advanced analysis)」を選択します。(このオプションを選択するには、ページ送りをする必要があります。)
7. 「OPSCONSOLE」オプションが表示されるまで、ページを送ります。次に、このオプションの隣に 1 を入力し、Enter を押します。「拡張分析オプションの指定 (Specify Advanced Analysis Options)」ウィンドウに入ります。コマンドは、**OPSCONSOLE** と表示されます。

8. 「オプション」フィールドで、該当するオプションおよび必要なすべてのパラメーターを入力します。実行中の機能に基づいて、以下のオプションを使用します。

- ネットワーク (LAN) 接続ローカル・コンソールの LAN アダプターの非活動化 = **deactlan**
- ネットワーク (LAN) 接続ローカル・コンソールの LAN アダプターの活動化 = **actlan**
- コンソール装置 (任意のコンソール) を再始動する = **restart**

注: 現行コンソールをサービスから除去し、システムがコンソールの始動または再始動を決定できるようにする必要がある場合は、**restart** オプションを使用します。元のコンソールでの問題を修正するため、またはあるコンソール・タイプから別のタイプに変更する場合に、**restart** オプションを使用できます。

SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」表示から、「保守ツール装置 ID (Service tools device ID)」オプションを選択します。デフォルトでこのオプションは、既存の保守ツール装置 ID への無許可の変更、新規の ID の作成、または ID の削除を防ぐために、ロックされています。この SST オプションをアンロックするには、専用保守ツール (DST) を使用しなければなりません。このタスクでは、ユーザーが、アクションを実行するために保守ツール・セキュリティ特権を持つことが必要です。保守ツール装置 ID のメニュー・オプションをアンロックするには、以下のタスクを実行します。

注: デフォルトで、保守ツール装置 ID オプションはロックされています。「ユーザーは選択されたオプションを実行することができません (The user can not perform the option selected)」というメッセージを受信した場合は、このオプションがアンロックされていないことを示しています。

1. 専用保守ツール (DST) にアクセスします。
 2. 「Work with DST environment (DST 環境で作業)」 → 「Service tools security data (保守ツール・セキュリティ・データ)」を選択します。
 3. 「SST からのデバイス ID のロックの処理 (Work with lock for device IDs from SST)」オプションの隣に 7 を入力して、Enter キーを押します。
- 状況は、Enabled と表示され、保守ツール装置 ID のロックが解除されたことが示されます。

関連タスク

58 ページの『システム上の保守ツール装置 ID のパスワードのリセット』

システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」が 0 に設定され、保守ツール装置 ID がシステムで保守されなくなった場合に限り、この手順を行う必要があります。

58 ページの『別の装置とのコンソール・セッションを使用した保守ツール装置 ID のパスワードのリセット』

別の装置を使用してコンソール・セッションの取得またはシステム保守ツール (SST) へのアクセスが可能な場合は、保守ツール装置 ID のパスワードをリセットします。これにより、保守ツール装置の ID パスワードは保守ツール装置の ID 名 (大文字) になります。

59 ページの『未使用の保守ツール・デバイス ID を使用しての保守ツール・デバイス ID パスワードのリセット』

システムにサインオンするための装置 (PC またはターミナル) が他には存在しないのに、未使用の保守ツール装置の ID が存在する場合は、PC で次を実行します。

59 ページの『コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルを使用した QCONSOLE 保守装置 ID パスワードのリセット』

別の保守ツール装置 (PC またはターミナル) または保守ツール装置の ID を使用してサインオンできず、QCONSOLE 保守ツール装置の ID を使用している場合は、コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルから保守ツール装置の ID パスワードをリセットする必要があります。

66 ページの『オペレーション・コンソール (LAN) のネットワーク値の変更』

新しい IP アドレスなど、オペレーション・コンソール (LAN) で使用されるネットワーク・アダプターに変更を加える必要がある場合は、次の手順を実行します。

関連資料

55 ページの『保守ツール装置 ID のパスワードの変更に関する考慮事項』

保守ツール装置 ID のパスワードをリセットする前に、次の考慮事項を検討する必要があります。

79 ページの『パスワードの逸失または失効、または使用不可のユーザー ID のため、サインオンできない』

この情報は、テークオーバー機能が作動しないときの問題を訂正する場合に使用できます。

オペレーション・コンソールの単純化

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID での作業が自動化されます。デフォルトでシステムは、QCONSOLE に加え、最大値 49 の保守ツール装置 ID を 10 個まで保守するよう設定されています。システムまたは区画に接続するために PC を追加する際に、手動で装置 ID を作成する必要がなくなりました。また、オペレーション・コンソールは、お客様に代わってアクセス・パスワードのアクティビティを制御します。認証プロセスは以前のままでありますが、この機能をアクティブにすると、接続中にアクセス・パスワードの入力を求められることはありません。しかし、正常に接続するために、お客様が DST ユーザー ID とパスワードを指定する必要があります。この機能は、他のコンソール・タイプには影響しません。

保守ツール装置 ID の自動作成

デフォルトでは、IBM i オペレーティング・システムにより、「保守ツール装置 ID の自動作成

(Autocreate service tools device IDs)」オプションの値は 10 に設定されています。このデフォルト値で

は、11 個の接続が自動的に管理されます。デフォルト ID として QCONSOLE があり、その他に 10 個の

保守ツール装置 ID があります。これらは、QCONSOLE00、QCONSOLE 01 のように、設定した最後の値まで表示されます。接続を追加しようとする際に値を増やすことを忘れてもいいよう、少なくとも 1 つの予備を用意しておくことをお勧めします。これらの保守ツール装置 ID は、「保守ツール装置 ID の処理 (Work with Service Tools Device IDs)」ウィンドウに表示され、作成した数を把握できるようになっています。ただし、装置 ID QCONSOLE は通常どおりにリストされ、使用できます。

- | 例えば、保守ツール装置 ID を QCONSOLE02 という名前で作成すると、この ID は特定の PC により使
- | 用されると想定され、自動的には表示されません。システムは、ユーザー作成の保守ツール装置 ID を、
- | 自動使用される保守ツール装置 ID とは異なる扱いをします。自動作成機能が新規保守ツール装置 ID を
- | 生成する場合、ユーザー作成の同じような名前の装置 ID はすべてスキップして、使用されていない番号
- | を割り当てます。したがって、自動作成された装置 ID 番号の最大値よりも大きい番号 (nn) の名前の
- | QCONSOLEnn が存在する可能性があります。

『装置 ID の自動作成オプションの値の変更』トピックに記載されている指示を実行すると、「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」オプションのデフォルト値を変更できます。

この機能は、作成した新規の構成済み接続であれば、どれに対しても使用できます。つまり、PC 上でオペレーション・コンソールの以前のリリースからアップグレードした場合は、現行構成が保持され、以前と同様に引き続き機能します。しかし、PC とシステムが非同期になると、それらを再同期するようエラー・メッセージが出される代わりに、この機能が自動的にこの問題をリカバリーします。

ネットワーク構成された接続でローカル・コンソールを作成する場合は、保守インターフェースの名前 (保守ホスト名) を入力する必要があります。使用する名前は、接続環境で決定されます。例えば、これが新規システムで、接続する最初のコンソールである場合、名前はユーザーによって自由に指定される場合と、DHCP サーバーが付与する場合があります。

- | 注: 自動作成された装置 ID に、リモート・コントロール・パネル (RCP) 特権が自動で付与されるわけ
- | はありません。この特権は、DST 保守ツールのセキュリティー・データ・メニューのオプションを使
- | 用して変更できます。デフォルトの保守ツール装置 ID の QCONSOLE には、デフォルトで RCP 特
- | 権が付与されています。

アクセス・パスワードの自動管理

デフォルトでは、オペレーション・コンソールの構成を作成するときに、アクセス・パスワードを設定できません。アクセス・パスワードは自動的に生成され、適時に接続プロセスに提供されます。このパスワードは自動的にシステムによって管理されるため、お客様がパスワードを知る必要はありません。

しかし、アクセス・パスワードは、「プロパティ」ページで変更できます。このパスワードを変更すると、パスワードの自動提供プロセスが使用不可になります。アクセス・パスワードが必要となるすべての接続で、お客様がアクセス・パスワードを入力する必要があります。

サインオン・プロセスでは、ユーザー認証のために、有効な DST ユーザー ID およびパスワードを入力する必要があります。

システムの自動検出

オペレーション・コンソールが開始すると、適格なシステムの検索が開始されます。適格なシステムとは、IBM i 6.1 以降を実行している任意のシステムです。コンソール・タイプとしてオペレーション・コンソールを装備している必要はありません。PC が任意の適格なシステムのネットワークから応答を受けると、オペレーション・コンソールはそのシステム用の構成を作成します。前から存在する構成済み接続も保

持されます。適格なシステムは、「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」オプションに設定された値を持っている必要があります。このデフォルト値は 10 です。この値がゼロであると、システムが正しく報告しないことがあり、その結果、システムの自動生成リストに表示されない場合があります。この自動検出機能は、オペレーション・コンソールの開始時に必ず実行されます。また、Alt (前面) キーとシフト・キーを押さえながら、「w」を押してオンデマンドを実行した場合に実行されます。これにより、オペレーション・コンソールは適格なシステムの検索を新たに開始します。

注: i 7.1 から、「Alt」+「Shift」+「w」のキー操作と同じ自動検出機能を実行する新しいツールバー・アイコンが提供されました。

重要: システムが構成済み接続リストに表示されている場合でも、システムを接続できるとは保証されません。稀に、システムが報告するための要件を満たしていながら、接続要件を満たしていない状態が存在します。

関連タスク

62 ページの『装置 ID の自動作成オプションの値の変更』

このトピックでは、保守ツール装置 ID を自動的に管理するために、ネットワーク上のローカル・コンソールによって使用される値を変更するプロセスを順を追って説明します。

61 ページの『システム上での保守ツール・デバイス ID の作成』

ネットワーク構成上のローカル・コンソール用に、システム上で保守ツール装置の ID をセットアップする必要があります。

63 ページの『自動作成デバイス ID の RCP 特権の変更』

このトピックでは、自動作成デバイス ID の RCP 特権を変更するプロセスを順を追って説明します。

保守ツール装置 ID のパスワードの変更に関する考慮事項

保守ツール装置 ID のパスワードをリセットする前に、次の考慮事項を検討する必要があります。

デフォルトで、保守ツール装置 ID は、システムおよび PC で自動的に保守されます。オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」を 0 に設定することにした場合に、これらの装置 ID を手動で管理する必要があります。装置 ID を手動で管理することにした場合は、次の情報を考慮してください。

注: オプションが使用可能になる前に、SST オプションをアンロックしなければなりません。

- PC の保守ツール装置 ID のパスワードは、システムの保守ツール装置 ID のパスワードと同じでなければなりません。片方を変更すると、もう一方も変更する必要があります。
- デフォルトでは、PC は自動的にアクセス・パスワードを作成し管理します。構成の作成中にこのパスワードを設定することはできません。ただし、アクセス・パスワードを手動で管理する必要がある場合は、「プロパティ」ページでパスワードを変更できます。この結果、接続時にこのパスワードの提供が必要となる場合があります。
- オペレーション・コンソールは、正常接続時それぞれにおいて、保守ツール装置の ID パスワードを変更して再度暗号化します。
- 少なくとも 1 度正常に接続した後で、ネットワーク構成上のローカル・コンソールを削除した場合は、ネットワーク構成上で新しいローカル・コンソールのプロファイルを再使用する前に、システムの保守ツール装置 ID のパスワードをリセットする必要があります。構成で QCONSOLE を装置 ID として使用している場合は、それを使用する用意在再度整うまで装置 ID をリセットしてはいけません。デフォルトでは、システム・オプションの「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」を 0 に設定するよう決定しない限り、これを管理する必要はありません。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』
オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』
「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

関連資料

57 ページの『PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期』
デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

『PC およびシステム上で、保守ツール装置 ID のパスワードを変更』
保守ツール装置 ID のパスワードが PC とシステム間で非同期になった場合を除き、このパスワードを変更する利点はありません。

PC およびシステム上で、保守ツール装置 ID のパスワードを変更

保守ツール装置 ID のパスワードが PC とシステム間で非同期になった場合を除き、このパスワードを変更する利点はありません。

デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで管理されています。その結果、装置 ID パスワードを手動で再同期する必要はありません。

PC および保守ツール装置 ID のパスワードを再同期して、その両方を再度同じにすることができます。このパスワードは実際、正常接続時それぞれにおいて変更されるため、同期を取る場合を除き、手動によるパスワードの変更は推奨されません。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』
オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連資料

55 ページの『保守ツール装置 ID のパスワードの変更に関する考慮事項』
保守ツール装置 ID のパスワードをリセットする前に、次の考慮事項を検討する必要があります。

57 ページの『PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期』
デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

アクセス・パスワードの変更

ネットワーク構成上で新しいローカル・コンソールを作成後、いつでも保守ツール装置の ID 情報にアクセスするためのパスワードを変更できます。区画で作業している場合は、対応する区画に対しこのパスワードを変更できます。

デフォルトでシステムは、アクセス・パスワードを自動的に作成および保守します。このアクセス・パスワードを、ユーザーが「プロパティ」で手動で変更すると、ユーザーはこのパスワードの制御権を受け取り、接続するたびにパスワードを指定しなければならない場合があります。

注: このパスワードは大文字小文字の区別があり、大文字小文字混合で最大 128 文字を指定できます。このパスワードを覚えておくことは重要です。このパスワードは、接続プロセスにおいて、「LAN 保守ツール・サインオン」ウィンドウでサインオンするときに使用する必要があります。

接続プロパティを使用してアクセス・パスワードを変更するには、以下の手順を実行します。

1. アクセス・パスワードを変更する接続名を選択します。
2. 「接続」 → 「プロパティ」とクリックします。
3. 「アクセス・パスワード」タブを選択します。
4. 「カレント・パスワード」に、アクセス・パスワードとして現在使用しているものを入力します。
5. 新しいパスワードを「新規パスワード」および「確認パスワード」フィールドに入力し、「OK」をクリックします。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期

デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

システムとオペレーション・コンソール PC との間で保守ツール装置 ID のパスワードのミスマッチが起こった場合、PC とシステムの両方でリカバリー・ステップを実行してパスワードを再同期する必要があります。

注: 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスし、保守ツール装置を使用してリセットを実行する必要があります。すでにコンソール装置がある場合は、それを使用することができます。それ以外の場合は、以下のように、別のコンソールを一時的に接続する必要があります。

- 使用可能な場合、ネットワーク (LAN) 上で異なるローカル・コンソールを使用。
- 未使用の緊急保守ツール装置の ID を使用して、ネットワーク (LAN) 上で同一のローカル・コンソールを再構成する。
- 平衡型接続のコンソールを使用。
- コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルを使用して QCONSOLE をリセット。

関連タスク

61 ページの『システム上での保守ツール・デバイス ID の作成』

ネットワーク構成上のローカル・コンソール用に、システム上で保守ツール装置の ID をセットアップする必要があります。

関連資料

55 ページの『保守ツール装置 ID のパスワードの変更にに関する考慮事項』

保守ツール装置 ID のパスワードをリセットする前に、次の考慮事項を検討する必要があります。

システム上の保守ツール装置 ID のパスワードのリセット:

システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」が 0 に設定され、保守ツール装置 ID がシステムで保守されなくなった場合に限り、この手順を行う必要があります。

システム上の保守ツール装置 ID のパスワードをリセットするには、次のステップを実行する必要があります。

注: SST を使用して以下の手順を実行するには、「**DST 環境の処理**」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「**保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)**」オプションを選択し、ステップ「**システム装置の選択 (Select System devices)**」をスキップしてください。オプションが使用可能になる前に、SST オプションをアンロックしなければなりません。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

61 ページの『PC 上の保守ツール装置 ID パスワードのリセット』

クライアント PC 上では、接続保守ツール装置 ID のパスワードを手動でリセットする必要はありません。

関連情報

保守ツールへのアクセス

別の装置とのコンソール・セッションを使用した保守ツール装置 ID のパスワードのリセット:

別の装置を使用してコンソール・セッションの取得またはシステム保守ツール (SST) へのアクセスが可能な場合は、保守ツール装置 ID のパスワードをリセットします。これにより、保守ツール装置の ID パスワードは保守ツール装置の ID 名 (大文字) になります。

保守ツール装置の ID をリセットするには、次のステップを実行します。

1. 専用保守ツール (DST) または SST にアクセスします。
2. DST のメインメニューから、以下のステップを実行します。
 - a. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
 - b. 「**保守ツール装置 ID**」を選択します。
3. リセットする保守ツール・デバイス ID に対して「2」を入力し、Enter キーを押します。
4. 再度 Enter キーを押して、リセットを確認します。

注: DST でパスワードをリセットすると、保守ツール装置の ID パスワードは保守ツール装置の ID 名 (大文字) になります。装置 ID を削除して作成する場合は、PC 側でも接続を削除して作成する必要があります。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

未使用の保守ツール・デバイス ID を使用しての保守ツール・デバイス ID パスワードのリセット:

システムにサインオンするための装置 (PC またはターミナル) が他には存在しないのに、未使用の保守ツール装置の ID が存在する場合は、PC で次を実行します。

1. 以下のようにして、現行の構成を削除します。
 - a. 「System i 接続」で、構成名を選択します。
 - b. 「接続」メニューから「削除」をクリックします。
 - c. プロンプトが出された場合は、「Yes」をクリックして、削除を確認します。
2. 未使用の保守ツール装置 ID を使用して、新しい構成を作成します。
3. 前述の方法の 1 つを使用して、接続後に失敗した保守ツール装置の ID をリセットします。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルを使用した QCONSOLE 保守装置 ID パスワードのリセット:

別の保守ツール装置 (PC またはターミナル) または保守ツール装置の ID を使用してサインオンできず、QCONSOLE 保守ツール装置の ID を使用している場合は、コントロール・パネルまたはリモート・コントロール・パネルから保守ツール装置の ID パスワードをリセットする必要があります。

注: コントロール・パネルを使用したりリセットの成功率を増加させるために、構成済み接続を切断してからリセット・プロシーチャーを開始することをお勧めします。

保守ツール装置の ID パスワードをリセットするには、次のステップを実行します。

1. システムを手動モードにします。「機能/データ (Function/Data)」画面で、キースティックの無いシステムでは、モードが 01 B と示され、キースティックのあるシステムでは、モードはマニュアルおよび 01 B と示されます。
2. 次の情報を使用して、リセットの進行状況と正常に完了したかを判別します。

注: システムで、2 行の「機能 / データ (Function/Data)」画面のコントロール・パネルを使用する場合、結果 (D1008065) を表示するには、機能 11 を実行する必要がある場合があります。画面に D1008065 と表示されない場合は、機能 11 を実行する前に、最初の機能 65 の完了に少なくとも 15 秒みてください。

2 行表示のコントロール・パネルには、次のようにデータが表示されます。

XXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXX

ワードはそれぞれ 8 文字ですが、機能 12 から 19 までは 4 ワード一度に表示されます。たとえば、機能 12 を要求すると次のように表示されます。

word__12word__13
word__14word__15

機能 13 を要求すると次のように表示されます。

word__16word__17
word__18word__19

ワード内で提供されるデータには、多くの異なった方法でアクセスすることができます。

重要: プロセスのどの部分を行っているかを認識するために、次の情報が提供されます。

- SRC D1008065 のワード 17 には、機能 65 を実行した回数が含まれます。カウントが 7 になると、保守ツール装置の ID パスワードのリセットが行われます。その後、ワード 18 は 00000000 に設定されます。
- 機能 65 を 7 回入力するまで、ワード 18 には 00000001 が表示されます。リセットが完了すると、経過した時間が 5 分以内の場合は、このワードは 00000000 に設定されます。

注: 機能 65 を 8 回以上入力すると、カウントは最初に戻ります。

3. 次の方法のうち 1 つを使用して、次のような区画タイプに応じて、保守ツール装置の ID、QCONSOLE をリセットします。

- 区画されていないシステムの場合は、次のステップを実行します。
 - a. コントロール・パネルから「上 (Up)」または「下 (Down)」ボタンを使用して「機能 / データ (Function/Data)」画面に「25」が表示されるようにします。その後、「実行 (Enter)」ボタンを押します。「機能 / データ (Function/Data)」画面には、「25 00」が表示されるはずですが。
 - b. 「上 (Up)」ボタンを一回使用して、データを「26」に増分します。その後、「実行 (Enter)」ボタンを押します。システムはたいていの場合、「機能 / データ (Function/Data)」画面に「01 B」を表示します。

注: システムが「65 FF」を表示する場合は、ステップ a および b を再度繰り返します。

- c. 「下 (Down)」ボタンを使用して、データを「65」に減分し、「実行 (Enter)」ボタンを押します。システムは、「65 00」を表示します。機能の処理後、システムは「D1008065」を表示します。このステップを繰り返し、65 を 7 回入力します。このタスクを完了するために使用できる時間は 5 分です。7 回目の 65 が入力されたときに時間が 5 分を過ぎていた場合は、リセットは処理されず、カウントはゼロに戻ります。WORD17 を確認して、システムが各要求を処理したかどうかチェックします。65 を速く入力すると、システムが入力を取りこぼす可能性があります。

『PC 上で保守ツール装置の ID パスワードをリセット』に進みます。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

PC 上の保守ツール装置 ID パスワードのリセット:

クライアント PC 上では、接続保守ツール装置 ID のパスワードを手動でリセットする必要はありません。

パスワードがシステム上でリセットされた場合、クライアントによって作成された次の接続は、現行値を使用して失敗すると、自動的にリセットされたパスワードを試行します。接続が正常に終了した場合は、新しく生成されたパスワードが次の接続のために保管されます。

- 1 自動プロセスが失敗したと思われる場合は、サービス・プロバイダーにお問い合わせください。

関連タスク

58 ページの『システム上の保守ツール装置 ID のパスワードのリセット』

システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」が 0 に設定され、保守ツール装置 ID がシステムで保守されなくなった場合に限り、この手順を行う必要があります。

システム上での保守ツール・デバイス ID の作成

ネットワーク構成上のローカル・コンソール用に、システム上で保守ツール装置の ID をセットアップする必要があります。

デフォルトでは、保守ツール装置 ID は自動的にシステムで保守されます。システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」が 0 に設定されている場合のみ、この手順を実行する必要があります。

注: システム保守ツール (SST) を使用して以下の手順を実行するには、「DST 環境の処理」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを選択して、ステップ 3 をスキップします。SST オプションを使用するには、その前に SST オプションをアンロックする必要があります。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「DST 環境の処理」を選択します。
3. 「保守ツール装置 ID」を選択します。
4. オプション 1 を使用して新しい保守ツール装置の ID を作成し、最初のブランクの名前フィールドに新しい保守ツール装置の ID 名を入力します。Enter キーを押します。
5. 記述を入力することもできます。Enter キーを押します。保守ツール装置の ID の作成が終了しました。

注: 関連する区画でリモート・コントロール・パネルおよびその全機能を使用するには、装置 ID および保守ツールのユーザー ID に、適切な権限が付与されている必要があります。保守ツール装置 ID 属性を確認または変更するには、F5 (「保守ツール装置 ID の作成 (Create Service Tools Device ID)」画面の「属性の変更」) を押すか、または「保守ツール装置 ID の処理 (Work with Service Tools Device IDs)」画面の装置 ID の前に 7 を入力します。

6. 保守ツール装置の ID をさらに作成するには、ステップ 4 からステップを繰り返します。

7. 保守ツール・デバイス ID の作成が完了した後で、「F3」キーを押します。

注:

1. 保守ツール・デバイス ID をリセットする必要がある場合は、そのパスワード (大文字) が保守ツール・デバイス ID の名前になります。
2. コンソールに接続されている PC が複数存在する場合は、保守ツール装置の ID を複数作成する必要があります。
3. PC とシステム間でパスワードの再同期を取る必要がある場合など、保守ツール装置の ID パスワードの変更が必要ことがあります。システムとオペレーション・コンソール PC との間で保守ツール装置 ID のパスワードのミスマッチが起こった場合、PC とサーバーの両方でリカバリー・ステップを実行してパスワードを再同期する必要があります。
4. QCONSOLE を、システム上でリセット状態のままにしないでください。機密漏れになると考えられます。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』

オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連資料

57 ページの『PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期』

デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

関連情報

保守ツール・ユーザー ID とパスワード

保守ツールへのアクセス

装置 ID の自動作成オプションの値の変更

このトピックでは、保守ツール装置 ID を自動的に管理するために、ネットワーク上のローカル・コンソールによって使用される値を変更するプロセスを順を追って説明します。

「保守ツール装置 ID の自動作成 (autocreate service tools device ID)」オプションの値を変更するには、次のステップに従います。

1. 専用保守ツール (DST) にアクセスします。
2. 「DST 環境の処理」を選択します。
3. 「保守ツール・セキュリティー・データ (Service tools security data)」を選択します。
4. オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値を変更します。

値をゼロに設定すると、この機能は使用不可になり、保守ツール装置 ID を手動で作成し管理する必要があります。これには、関連パスワードが一致しなくなった場合の、PC とシステムの再同期も含まれます。最大許容値は、49 です。

5. 「選択」領域で、オプション 11 を選択します。次に、Enter キーを押して、この新しい値を保存します。

1 自動作成デバイス ID の RCP 特権の変更

- | このトピックでは、自動作成デバイス ID の RCP 特権を変更するプロセスを順を追って説明します。
- | 自動作成デバイス ID のデフォルト RCP 特権を変更するには、以下のステップに従います。
- | 1. 専用保守ツール (DST) にアクセスします。
- | 2. 「DST 環境の処理」を選択します。
- | 3. 「保守ツール・セキュリティー・データ (Service tools security data)」を選択します。
- | 4. 「選択」領域で、オプション 12 を選択します。次に、Enter キーを押して、値を変更します。
- | 状況は、デフォルトの取り消しではなく、認可になります。

保守ホスト名 (インターフェース名) の構成

保守ホスト名 (インターフェース名) は、保守ツールで使用される、ネットワーク上の System i 保守接続を識別する名前です。これには、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソール構成も含まれます。

ネットワーク接続を使用してコンソールまたはリモート・コントロール・パネルが接続されているときは、常に保守ホスト名 (インターフェース名) が必要です。この機能は、システムが論理区画に分割されている場合のために、追加されます。

構成データをインプリメントする方法に関係なく、保守ホスト名で使用される実際の名前と関連アドレスは、システムが配置されるネットワーク環境によって異なります。インプリメンテーション方法は、構成済みの接続が最初の接続であるかどうかと関係ありません。保守ホストに名前を入力する際は、次のガイドラインに従ってください。

- 装置が 2、3 台しか接続されていない小規模のネットワーク・インフラストラクチャーでは、通常、自由に名前と関連アドレスを指定できます。小規模ネットワークをセットアップするときに、名前とアドレス範囲を指定できます。
- IT スタッフによって管理されるような大規模ネットワーク・インフラストラクチャーでは、固有の名前が必要となる場合があります。これにより、同一ネットワーク上の他の装置と混同しなくなります。また、接続名、およびネットワーク上で通信するために接続が使用するアドレスを、ネットワーク・インフラストラクチャーの設備に事前に認識させることもできます。代わりに独自の名前を指定することもできますが、アドレスはネットワーク管理者から提供される場合があります。

保守ホスト名 (インターフェース名) を作成する方法は、2 つあります。

- ネットワーク (LAN) 構成でのオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールを注文した場合、そのコンソールが含まれるシステムの製造過程で、保守ホスト名 (インターフェース名) を作成することはできません。LAN アダプターがインストールされ、正しいコンソール・タイプが指定されます。その後、ユーザーがシステムを入手し、オペレーション・コンソール構成ウィザードを完了すると、保守ホスト名 (インターフェース名) を含むカスタマー・ネットワーク・パラメーターが、システムに提供されます。初期接続時には、このデータによってネットワークのシステム構成を完成させます。このプロセスは、*BOOTP* とも呼ばれています。
- 2 つ目は、既存のコンソールを使用して保守ホスト名 (インターフェース名) を作成する方法です。この方法は、古いコンソールを切断する前の、マイグレーションまたはアップグレード中に使用することができます。次の手順を使用すると、System i 保守接続を検証または作成することができます。構成している区画の専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) から保守ホスト名 (インターフェー

ス名)を見つけ、「保守ツール・アダプターの構成 (Configure Service Tools Adapter)」画面を使用します。DST または SST に定義されている既存の保守ホスト名 (インターフェース名) と同じ名前を PC で入力します。

注: 保守ツール LAN アダプター関連のいずれかのオプションを使用して、サービス・ホスト名またはデータを確認することもできます。

保守ホスト名 (インターフェース名) を作成するには、次の手順を実行します。

注: SST を使用して以下の手順を実行するには、「**DST 環境の処理**」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「**保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)**」オプションを選択してください。また、オペレーション・コンソール (LAN) 以外のコンソール・タイプを使用している場合は、オプション「**保守ツールの LAN アダプターの構成 (Configure service tools LAN adapter)**」を使用して、保守ホスト名またはそのデータを作成または変更できます。

注: 「有効な LAN アダプターが使用可能ではありません」というメッセージが表示される可能性があります。このメッセージは、使用可能なアダプターがない、もしくは、LAN コンソール用にタグ付けされたアダプターがないことを意味します。F13 を押して、オペレーティング・システムが使用していない LAN アダプターのリストを取得してください。適切なアダプターの横に 1 を入力して、ステップ 7 に進みます。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
3. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップしてください)。
4. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
5. 「**オペレーション・コンソール (LAN 接続) (Operations Console (LAN))**」を選択し、Enter キーを押します。これで、「**オペレーション・コンソール・アダプターの検査 (Verify Operations Console Adapters)**」が表示されるはずです。
6. 「F11」キーを押して、構成します。
7. 「**保守ホスト名 (インターフェース名) (service host name (interface name))**」フィールドに名前が挿入されます。新しい保守接続を作成する場合は、次のステップに従います。
 - a. 該当するフィールドにネットワーク・データを入力します。
 - b. 「F7」キーを押して、構成を保管します。
 - c. 「F14」キーを押して、LAN アダプターを活動化します。
 - d. 「F3」キーを押して終了します。

関連資料

11 ページの『ネットワーク環境の準備』

ネットワーク環境を準備するには、ネットワーク (LAN) 構成でオペレーション・コンソール・ローカル・コンソールをセットアップするために必要な、最小ネットワーク構成を確認し、それに従う必要があります。

関連情報

保守ツール・ユーザー ID とパスワード

保守ツールへのアクセス

オペレーション・コンソールでの LAN アダプター・カード使用の割り振り解除または移動

マイグレーション時には、オペレーション・コンソールによる LAN カード使用の割り振り解除が必要な場合があります。ネットワーク構成または保守ツール・サーバー上でオペレーション・コンソールのローカル・コンソールを使用する予定がない場合は、LAN カードを割り振り解除する必要があります。

LAN カードの割り当てを解除したら、移動したり、別の用途に使用できるようになります。また、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソール・ローカル・コンソール以外のコンソール・タイプを使用する必要もあります。使用しないと、次のステップにおいてコンソールが切断されます。次のステップに従って、ネットワーク (LAN) 上のオペレーション・コンソールのローカル・コンソールに現在関連付けられている LAN アダプターを割り振り解除します。

注: SST を使用して以下の手順を実行するには、「**DST 環境の処理**」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「**保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)**」オプションを選択してください。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
3. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップしてください)。
4. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
5. 「**オペレーション・コンソール (LAN) (Operations Console (LAN))**」を選択します。現在使用されている LAN アダプターが表示されます。
6. 「F11」キーを押します。
7. F6 を押して、消去します。
8. 「F7」キーを押して、新しい値を保管します。
9. コンソールでこの資源が使用されていない場合は、F13 を押してアダプターを割り振り解除します。次の IPL 実行時に、別のコンソール・タイプまたは資源を使用するように要求されます。

注: このウィンドウを終了した後は、構成に戻らないでください。構成に戻ると、LAN アダプター資源がオペレーション・コンソールに再割り当てされます。

10. F12 を 2 回押して、このウィンドウを終了します。「**システム装置の処理 (Work with System Devices)**」ウィンドウに戻ります。SST を使用している場合は、これによって、「**保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)**」に戻ります。
11. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
12. 使用するコンソール・タイプを選択します。

重要: コンソール・タイプをオペレーション・コンソール (LAN) 以外のものに変更してください。変更しない場合、次回の IPL 時にアダプターが再度割り振られます。

関連タスク

43 ページの『区画されていないシステムでの、ネットワーク (LAN) 上の オペレーション・コンソール・ローカル・コンソールから平衡型コンソールへの変更』
オペレーション・コンソールからネットワーク (LAN) 上の平衡型コンソールのローカル・コンソールに変更するためには、既存のコンソールを使用して、システムで以下のステップを実行してください。

関連資料

10 ページの『オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードの計画』
オペレーション・コンソールのインストールまたはアップグレードを計画するには、以下の情報を把握する必要があります。

38 ページの『コンソール・タイプの変更』
コンソール接続のセットアップ方法に応じて、異なるコンソール・タイプに変更できます。

関連情報

保守ツールへのアクセス

オペレーション・コンソール (LAN) のネットワーク値の変更

新しい IP アドレスなど、オペレーション・コンソール (LAN) で使用されるネットワーク・アダプターに変更を加える必要がある場合は、次の手順を実行します。

注: SST を使用して以下の手順を実行するには、「**DST 環境の処理**」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「**保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)**」オプションを選択してください。

1. 専用保守ツール (DST) またはシステム保守ツール (SST) にアクセスします。
2. 「**DST 環境の処理**」を選択します。
3. 「**システム装置**」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
4. 「**コンソールの選択 (Select Console)**」を選択します。
5. 「**オペレーション・コンソール (LAN) (Operations Console (LAN))**」を選択します。現在使用されている LAN アダプターが表示されます。
6. 「F11」キーを押します。
7. 変更を行うには、次のいずれかの方法を使用します。
 - IP アドレスなどの簡単な変更を行う場合は、新しい値を入力して、ステップ 8 に進みます。
 - アダプター・カードの変更を行う場合は、F6 を押して、消去を行います。ステップ 8 に進みます。
8. 「F7」キーを押して、新しい値を保管します。
9. DST のメインメニューが表示されるまで F3 を押して、メニューを表示します。

重要: 内容変更がネットワーク IP アドレスまたは保守ホスト名 (インターフェース名) に影響しない場合は、ここで、これらの手順を終了できます。

現在構成されている接続に対して、ネットワーク IP アドレスまたは保守ホスト名 (インターフェース名) が別のものとなる変更を行った場合は、この保守ホスト名 (インターフェース名) に接続するすべての PC でこの変更を反映する必要があります。クライアント上にある既存の接続の構成が持つネッ

トワーク IP アドレスまたは保守ホスト名 (インターフェース名) を変更することはできないため、現行の接続を削除し、新しいネットワーク IP アドレスを使用して新規の接続を再作成する必要があります。次のステップに進みます。

10. システム上の保守ツール装置 ID パスワードをリセットします。これを行うには、次のステップを実行します。

注: オプションが使用可能になる前に、SST オプションをアンロックしなければなりません。

- a. 「DST 環境の処理」を選択します。
- b. 「保守ツール装置 ID」を選択します。
- c. リセットする保守ツール装置 ID の前に「2」と入力し、Enter を押します。
- d. 再度 Enter キーを押して、リセットを確認します。

注: DST でパスワードをリセットすると、装置 ID のパスワードは装置の ID 名 (大文字) になります。

重要: 複数の PC がネットワーク接続を使用してこの保守ホスト名 (インターフェース名) に接続する場合は、構成を削除して、それらの PC の保守ツール装置 ID もリセットする必要があります。別の保守ツール装置 ID をリセットするには、このステップを繰り返してください。

- e. DST のメインメニューが表示されるまで F3 を押して、メニューを表示します。

11. 新しい IP アドレスまたは保守ホスト名 (インターフェース名) を許可するために必要な作業を実行するには、2 つの方法があります。1 つ目は、IPL を使用する方法です。残りの作業を PC で行う際に制御が容易になることから、この方法をお勧めします。IPL または手操作による介入があるまで、システムは引き続き古い値を使用します。2 つ目は、この時点で手操作による介入を実行する方法です。以下のいずれかのステップのセットを実行して、ネットワークの変更を行ってください。

• IPL を使用する

この方法では、クライアントの再構成が完了してから、オペレーション・コンソールをネットワークで使用して次の接続を確立する必要があります。LAN 経由で接続されているコンソールを現在使用しており、通常このコンソールで IPL を開始している場合、IPL は在席 IPL をお勧めします。在席 IPL とすることにより、IPL の初期段階でクライアントを再構成できるようになります。例えば、現在接続している PC の代わりに、コンソールとして別の PC を使用することができます。その PC でこのステップを使用して構成を行い、次に、IPL を開始した後で、現行のコンソール PC の接続を切断し、新しく作成された構成を用いて別の PC で接続を開始できます。この方法では、次回システムに接続する前に、都合の良い時に既存のクライアントを再構成することができます。

- a. システムで在席 IPL を始動します。
- b. 引き続き、PC の変更を実行します。

• 手操作による介入を実行する

DST または SST のメインメニューから以下のステップを実行します。

注:

- a. SST を使用して以下の手順を実行するには、「DST 環境の処理」を選択するよう指示されているすべての箇所で、「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを選択し、「システム装置」選択のステップをスキップしてください。
- a. 「DST 環境の処理」を選択します。

- b. 「システム装置」を選択します (SST を使用している場合は、このステップをスキップします)。
- c. 「コンソールの選択 (Select Console)」を選択します。
- d. 「オペレーション・コンソール (LAN) (Operations Console (LAN))」を選択します。現在使用されている LAN アダプターが表示されます。
- e. 「F11」キーを押します。
- f. F17 を押して、LAN アダプター・カードの非活動化および再活動化を行います。

注: これにより、LAN 接続のすべてのコンソール PC の状況は、「コンソールに接続中 (Connecting console)」になります。また、LAN 接続のコンソール PC が複数台接続されている場合、次にどのコンソール装置が選択されるかは予測不能となります。

- g. 引き続き、PC の変更を実行します。

これで、PC の接続準備が完了しました。システム上で既に IPL を実行したことがある場合は、これで、新しいネットワーク・データを使用して再接続することができます。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

47 ページの『手動 IPL を使用したシステムの始動』

手動の初期プログラム・ロード (IPL) を実行すると、ご使用のシステムを始動できます。

『PC の変更の完了』

オペレーション・コンソール (LAN) のネットワーク値に変更を加えた後に、PC への変更を完了する必要があります。

関連情報

保守ツールへのアクセス

PC の変更の完了:

オペレーション・コンソール (LAN) のネットワーク値に変更を加えた後に、PC への変更を完了する必要があります。

1. 古い構成を削除するには、次のステップに従います。
 - a. 構成名 (「System i 接続」の下) を選択します。これは、オペレーション・コンソールが特定のシステムを参照する際に使用する名前です。
 - b. 「接続」メニューから「切断」をクリックします。接続状況に「切断中」が表示されます。
 - c. 状況が「切断」になるまで待ちます。
 - d. 構成名 (「System i 接続」の下) を選択します。
 - e. 「接続」メニューから「削除」をクリックします。
 - f. プロンプトが出されたら、「はい」をクリックして削除を確認します。
2. 変更する構成に関連付けられたネットワーク・データを PC から消去するために、オペレーション・コンソールをクローズしてから再オープンします。

注: PC のホスト・ファイルにある古い項目を除去または変更する方法もあります。検索などを実行してホストを探し、見つかったら、そのファイルをダブルクリックして、デフォルトのエディターを開始します。

3. 次のステップを使用して、新しい構成を作成します。
 - a. 「接続」メニューから「新規構成」を選択します。
 - b. 構成を続行し、適切な時点で新規の IP データまたは保守ホスト名を入力します。
 - c. 新しい構成の残りの部分を完了させます。

オペレーション・コンソール接続のトラブルシューティング

オペレーション・コンソールのセッション中に問題が発生する可能性があります。以下のトピックでは、構成の初期セットアップと管理中に発生する、共通の問題に対する解決策を一部記載します。

オペレーション・コンソール・クライアント (PC) は、一連のログを保持しており、これらは、IBM 開発部門がお客様の問題の解決を支援する際に使用します。これらのログを、エンド・ユーザーが使用することはありません。何をどのような形式で収集するかという詳細は、しばしば、報告される問題のタイプに合わせて変更されます。サービス・プロバイダーに問題を報告するときは、システムによって収集されたデータだけでなく、PC からの特定のログも送るよう要請されることがあります。

設定ダイアログ・ウィンドウ

オペレーション・コンソールには、ホット・キーで開始する組み込み式の設定ダイアログ・ウィンドウがあり、このウィンドウは問題への対処に役立つ専用のオプションを備えています。この設定ウィンドウは、**Alt** キーと **shift** キーを押しながら **s** キーを押す (**ALT+Shift+s**) と、活動状態になります。特に、ユーザーが複数の接続構成を使用している場合は、ログ・ファイルを分割するオプションが、サービス・プロバイダーにとり非常に有用です。構成ごとに独自のログが作成されるようにログを分割することで、問題の検出が容易になります。問題のある接続が 1 つだけであれば、その他の接続での活動はログに表示されません。

サービス・プロバイダーからアドバイスを受けずに、ユーザー何らかの変更を行ったり、何か別の機能をオンにしたりしないよう、強くお勧めします。このウィンドウで不適切にオプションを使用すると、構成されたいずれかの接続またはすべての接続で予測不能の動作が起こる場合があります。

接続が正しく応答しない場合に画面データを収集できる、ホット・キー活動型機能もあります。画面データを収集するには、構成を選択し、**Ctrl+C** を押します。これにより、一番新しい 10 画面のバッファ (3 つの画面データ) の内容と、それらが接続ログに受信されたタイム・スタンプがダンプされます。このログは、サポートまたは開発部門で、エミュレーターへの最後の更新が何であったかを調べるために使用することができます。画面に変更を加えずにこのプロセスをもう 1 度活動化しても、接続ログにデータは作成されません。

システムと PC のオートディスカバリーを追加すると、もう 1 つホット・キー活動型の機能ができます。オペレーション・コンソールがスタートすると、ディスカバリー・プロセスもスタートします。他のシステムに対するアクティブな接続があり、ディスカバリーの対象となる新しいシステムのセットアップを終了したばかりである場合は、「**Alt**」キーと「**Shift**」キーを押したまま、「**w**」キー (**Alt+Shift+w**) を押すことにより、新しいディスカバリー・プロセスを開始することができます。ディスカバリー・プロセスが終了すると、該当の新しいシステムが表示され、その接続を開始することができます。

状況メッセージのトラブルシューティング

コンソールの接続中に接続に関する問題が発生した場合、オペレーション・コンソールは状況メッセージを表示して、接続のトラブルシューティングを支援します。

状況メッセージは、接続の問題があるかどうかを示します。状況メッセージは、「オペレーション・コンソール (Operations Console)」ウィンドウの接続の詳細部分にある「状況 (Status)」の下に表示されます。

接続のトラブルシューティングを開始する前に、IBM i Access for Windows 用の最新の Service Pack をインストールしてください。

関連資料

24 ページの『IBM i Access for Windows Service Pack の適用』

ご使用の PC には、IBM i Access for Windows の最新 Service Pack プログラム一時修正 (PTF) および最新レベルの IBM i Access for Windows が必要です。

構成が正常に実行されている場合の状況メッセージ

以下の状況メッセージは、接続に関する問題があるかどうかを識別するのに役立ちます。

次の状況メッセージは、接続に関する問題がないことを示します。

コンソールに接続中またはリモート・コントロール・パネルに接続中 (Connecting console or Connecting remote control panel)

この状況メッセージは、コンソールによるシステムへの初期接続実行中に表示される通常の状況メッセージです。この状況メッセージが 2、3 分以上表示される場合は、接続の問題を示す状況メッセージのリストの「コンソールに接続中 (Connecting console)」を参照してください。

許可の保留 (Pending authorization)

システムへの初期接続実行中に、「保守ツール・サインオン」ウィンドウが表示された場合に、この状況は表示されます。この状況は、ローカル・コンソールで最初のユーザーが正常にサインオンするまでこのまま継続します。ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールには、アクセス・パスワードの制御権を持っているかどうかに応じて、「保守ツール・サインオン」または「LAN 保守ツール・サインオン」ウィンドウが表示される場合があります。同じシステムに対する以後の接続では、ユーザーに再度プロンプトが出されることはありません。

接続 (Connected)

システムへの初期接続が完了した (ユーザーがオペレーション・コンソールに正常にサインオンした) 後に、この状況はローカル・コンソールに表示されます。

切断中 ローカル・コンソール・ユーザーがシステムから切断され、PC が接続を切断しているときに、この状況はローカル・コンソールに表示されます。

切断 (Disconnected)

ローカル・コンソール・ユーザーがシステムから切断され、PC がシステムと通信しなくなった後に、この状況はローカル・コンソールに表示されます。

受信した状況メッセージがリストにない場合は、『接続に関する問題がある場合の状況メッセージ』トピックを参照してください。

関連資料

『接続に関する問題がある場合の状況メッセージ』

以下の状況メッセージは、接続に関する問題があるかどうかを識別するのに役立ちます。

接続に関する問題がある場合の状況メッセージ

以下の状況メッセージは、接続に関する問題があるかどうかを識別するのに役立ちます。

次の状況メッセージは、接続に関する問題があることを示します。

接続中 (Connecting)

この状況は、コンソールによるシステムへの初期接続実行中に表示される通常の状態メッセージです。この状態メッセージが 2、3 分以上表示される場合は、接続に障害があります。これは、初期接続の後で、おそらく IPL が行われたか、またはネットワーク接続が切断されたために接続が停止した場合にも表示されます。

受信した状態メッセージがこのリストにない場合は、『構成が正常に実行されている場合の状態メッセージ』トピックを参照してください。

関連資料

77 ページの『リモート・コントロール・パネルが開始に失敗する』

リモート・コントロール・パネルを開始できない場合は、次のことを確認してください。

『接続の問題のトラブルシューティング』

初期接続をセットアップするとき、オペレーション・コンソール構成を接続するのに問題が起こることがあります。

70 ページの『構成が正常に実行されている場合の状態メッセージ』

以下の状態メッセージは、接続に関する問題があるかどうかを識別するのに役立ちます。

接続の問題のトラブルシューティング

初期接続をセットアップするとき、オペレーション・コンソール構成を接続するのに問題が起こることがあります。

ローカル・コンソールの接続に関する問題

ローカル・コンソールをセットアップするとき、接続の問題が起こることがあります。接続できないと、結果として、**接続**されない状況の問題として定義され、エミュレーターが開始されません。

接続に関する問題には、コンソール・サービス機能 (65+21) の使用が必要なものがあります。これを使用すると、接続前に、システムへの変更を行ったり特定の機能を実行したりすることができます。

関連資料

73 ページの『エミュレーターの問題のトラブルシューティング』

初期接続をセットアップするときに、エミュレーターに関する問題が発生する場合があります。

ネットワーク接続のエラー:

これらは、ローカル・コンソールがネットワークを介してシステムとの接続に失敗した場合に発生する問題の解決策です。

次の考えられる解決策を試してください。

- ネットワークが作動していることを確認する。
- 構成ウィザード実行時に、システムが保守装置情報にアクセスするための正しいパスワードを指定したことを確認する。また、保守ツールの正しいユーザー ID およびパスワードを指定したことを確認する。
- ネットワークでイーサネットを使用している場合は、クロスケーブルを使用して一時的に PC をアダプターへ直接接続することができます。これにより、正しい操作を妨害する可能性があるネットワーク上の潜在的な問題から、PC およびシステムが分離されます。

クロスケーブルは標準的なネットワーク・ケーブルですが、送信と受信のシグナル・ワイヤーが逆になっています。これにより事実上、それぞれの末端はハブ、スイッチ、またはルーターがその末端の間に存在するかのように機能します。クロスケーブルを使用するには、非標準的なネットワーク構成がシステムと PC で必要となる場合もあります。

エラー・メッセージ: システムへの接続がセキュアな接続ではない (The connection to the system is not a secure connection):

エラー・メッセージ: システムへの接続がセキュアな接続ではない (The connection to the system is not a secure connection) を受信する場合があります。

これらのメッセージは、特に、D モード (インストール) の IPL 中に表示されます。この IPL のタイプでは、認証は実行されず、リモート・コントロール・パネル (LAN) はサポートされません。

関連資料

『認証エラー』

ローカル・コンソールをシステムに接続しているときに、ローカル・コンソールの接続に関する問題が発生する場合があります。ここでは、オペレーション・コンソールがシステムとローカル・コンソール (PC) との間の接続を確立できないときに発生するエラーの解決策を示します。このエラーの内容として、ソフトウェア構成の問題または認識不可能な保守ツール・ユーザー ID があります。

ローカル・コンソールの状況が接続中のままである:

これらは、ハードウェア構成またはソフトウェア構成が正しくないために、ローカル・コンソールがシステムに接続できないという問題に対する解決策です。

- システム名およびローカル・コンソール名が正しいことを確認します。
- ネットワークでイーサネットを使用している場合は、クロスケーブルを使用して一時的に PC をアダプターへ直接接続することができます。これにより、正しい操作を妨害する可能性があるネットワーク上の潜在的な問題から、PC およびシステムが分離されます。

クロスケーブルは標準的なネットワーク・ケーブルですが、送信と受信のシグナル・ワイヤーが逆になっています。これにより事実上、それぞれの末端はハブ、スイッチ、またはルーターがその末端の間に存在するかのように機能します。

予期しない切断:

PC に電源管理機能が付いている場合、この機能を使用できないようにする必要があります。

大半の PC、特にノートブックでは、指定時間後に電源管理を開始したときに、通信ポートがリセットされます。これにより、確立されていた接続が切断される可能性があります。このため、省電力モードになるローカル・コンソールはシステムから切断する場合があります。

認証の問題のトラブルシューティング

認証問題は、初期接続をセットアップするときに起こる可能性があります。

認証エラー

ローカル・コンソールをシステムに接続しているときに、ローカル・コンソールの接続に関する問題が発生する場合があります。ここでは、オペレーション・コンソールがシステムとローカル・コンソール (PC) との間の接続を確立できないときに発生するエラーの解決策を示します。このエラーの内容として、ソフトウェア構成の問題または認識不可能な保守ツール・ユーザー ID があります。

システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 で、システムが保守ツール装置 ID を自動的に保守するのを停止したい場合にのみ、次のヒントが役立ちます。

ヒント: 構成ウィザードの使用中に、有効な保守ツールのユーザー ID およびパスワードを入力していることを確認します。

また、セキュア接続に関するエラー・メッセージを受信することもあります。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』
オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連資料

72 ページの『エラー・メッセージ: システムへの接続がセキュアな接続ではない (The connection to the system is not a secure connection)』

エラー・メッセージ: システムへの接続がセキュアな接続ではない (The connection to the system is not a secure connection) を受信する場合があります。

エミュレーターの問題のトラブルシューティング

初期接続をセットアップするときに、エミュレーターに関する問題が発生する場合があります。

エミュレーター・ウィンドウが開始せず、接続状況が「接続 (Connected)」でない場合は、『ローカル・コンソールの接続に関する問題』トピックを参照してください。

関連資料

71 ページの『ローカル・コンソールの接続に関する問題』

ローカル・コンソールをセットアップするとき、接続の問題が起こることがあります。接続できないと、結果として、**接続**されない状況の問題として定義され、エミュレーターが開始されません。

システム参照コード・データのトラブルシューティング

これらのシステム参照コード (SRC) のいずれかが戻された場合は、オペレーション・コンソールの構成に問題がある可能性があります。

以下のセクションを参照して、特定のシステム参照コードおよびトラブルシューティングのオプションについての情報を確認してください。

コンソール関連のシステム参照コードでは、コンソール・サービス機能 (65+21) の使用が必要となる場合があります。これを使用して設定を変更したり機能を実行したりします。

システム参照コード A6nn500x

以下に、コンソール・タイプおよびコンソール・タスクへのアクセスに使用するシステム参照コード (SRC) を示します。

これらの SRC は、コンソールまたは他のワークステーションが使用可能でない場合に、コンソール・タイプを変更したり、またはコンソール・タスクを実行するための、コントロール・パネルを用いる操作方法に関連しています。

要確認: nn には、任意の英数字が入ります。

- A6nn 500A - 現行のコンソール・タイプ設定を表示中です。

- A6nn 500B - 2 回目の 65+21 を行ったため、編集モードです。
- A6nn 500C - 2 回目の 21 を実行し、コンソールに別の値を設定するなどのアクションが起きました。
- A6nn 500D - 編集モードに入ってから、長時間アクションを起こさなかったため、変更を行う場合には、編集モードに入り直す必要があります。この時点で 21 を実行すると、コンソールは強制的に DST となり、アクションは起きません。

関連資料

49 ページの『コンソールのサービス機能 (65+21) の使用』
 コンソール・サービス機能 (65+21) は、緊急時のコンソール・リカバリー機能です。

システム参照コード A6005001、A6005004、および A6005007

次のシステム参照コード (SRC) は、平衡型コンソールの場合に表示される可能性があります。

A6005001

手動 IPL 中にコンソール・リソース (コントローラー) が見つかりませんでした。

A6005004

手動 IPL 中にコンソール装置が見つかりませんでした。平衡型コントローラーは見つかりましたが、使用されていない可能性があります。これは、コントローラーが存在することを示しているのみです。コントローラーに問題が生じている可能性があることを示してはいません。

A6005007

手動 IPL 中にコンソール装置が見つかりませんでした。この SRC はハードウェアの存在を示しており、これは別のコンソール・タイプ (平衡型以外) が見つかったことを示している場合があります。この参照コードは、そのハードウェアに障害があることや、それが対象のコンソールであることを示してはいません。

これらの SRC は、アテンション・ライトと同様に、コンソールが検出されてアクティブになるとリセットされます。これらの SRC の 1 つが長時間継続して存在している場合は、モデルおよび使用されているハードウェアを含め、さまざまな要因に応じて、コンソール装置を検出するために IPL の実行が必要になる場合があります。コントロール・パネル、リモート・コントロール・パネル、または仮想コントロール・パネルから機能 21 を使用することによって、システムがコンソールの再検出を試みるように強制することができます。65+21 機能を使用することでも、データの収集またはリカバリーの試行が可能です。

システム参照コード A6005008

システム参照コード (SRC) A6005008 が戻された場合、この表を使用してください。IPL によってコンソールが見つからず、コンソール・タイプが 1 以外に設定されている場合、システムはコード A6005008 を表示します。

- 平衡型コンソールの使用を試行している場合、この SRC で関係するデータはワード 16 のみです。次の表を使用して、平衡型の障害を判別してください。このワードの最初の 4 文字には、元の障害タイプの最後の 4 文字が含まれます。例えば、ワード 16 に 50010001 が含まれていた場合、平衡型関連の SRC は A6005001 であり、コンソール・タイプは平衡型コンソールを使用するよう設定されます。その SRC を参照してください。
- オペレーション・コンソールを使用しようとしている場合は、このリストを参照して、次の表から適切なセクションを選択してください。
 - ネットワーク上のローカル・コンソールでは、ワード 13、14、および 15 を使用します。

注: オペレーション・コンソールに関連する LAN アダプターを置き換えたばかりである場合、システムが新しい LAN アダプターを見つけて使用するまでに、少なくとも 35 分待つ必要があります。このケースでは、システムは、条件が満足された後に新しいアダプターを使用して始動します。コンソールが始動し、SRC は非表示になります。

LAN			
ワード 13 の値	失敗	ワード 14 の意味	ワード 15 の意味
1	サポートされる HW が検出されなかったか、期待されるものとは異なる HW が検出されました (例えば、LAN IOA を置き換えたため、シリアル番号が違う場合など)。		場合によっては、期待されるアダプターのシリアル番号が表示されることがあります。
2	LAN IOA が報告に失敗した		
3	ハードウェア・エラー	よく見られるエラー・コードは 53001A80、53002AC0 です。ネットワーク、ケーブルまたは LAN アダプターが作動可能でない場合があります。エラー・コード: 00000000。このエラー・コードは、アダプターが報告されたがまだ初期化されていないことを示しています。これは、この時点ではエラーと見なされません。アダプターをすぐに活動化する必要があります。その他のエラー・コードについては、サービス・プロバイダーに連絡してください。	アダプターのカード位置またはシリアル番号
4	BOOTP 状況: 試行がゼロの場合、呼び出し時に BOOTP は作動可能。試行に値がある場合、PC が反応しなかった。	試行	アダプターのカード位置またはシリアル番号
5	システムの LAN 接続はアクティブですが、PC が接続に失敗しました。PC とシステムが同じネットワーク上にあり同じプロトコルを使用しているか、および、PC からシステムに ping できるか (ping serverhostname) を確認します。	IP アドレス	アダプターのカード位置またはシリアル番号

LAN			
ワード 13 の値	失敗	ワード 14 の意味	ワード 15 の意味
ワード 16		形式 xxxx yy zz のワード 16 の意味は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • xxxx の意味: <ul style="list-style-type: none"> - 平衡型関連の SRC は、最初の 4 文字で表されま す。 • yy の意味: <ul style="list-style-type: none"> - 0A = タグの付いたコンソールはありません • zz の意味: <ul style="list-style-type: none"> - 00 = ユーザーが定義したものではありません (古い デフォルト値) - 01 = 平衡型 - 02 = オペレーション・コンソール (直接接続) (廃 止) - 03 = オペレーション・コンソール (LAN) - 04 = ハードウェア管理コンソール (HMC) またはシ ン・コンソール 	

ケーブル			
ワード 17 の値	失敗	ワード 18 の意味	ワード 19 の意味
1	非同期カードが検出されな い		
2	ケーブルが検出されない	カードの位置	カード・タイプ
3	間違ったケーブルが検出さ れた	カードの位置	ケーブル ID
4	使用中のポート	カードの位置	カード・タイプ
FA	直接ケーブル用に構成され ていない		

注: 新規ロード・ソースの直接アクセス・ストレージ・デバイス (DASD) による D モード IPL では、00 のコンソール・タイプ値が示されることが予想されます。これが発生する場合の例として、障害のある DASD からのデータのコピーによりすべてのデータがコピーされなかった場合や、新規の論理区画をインストール中である場合などがあります。また、コンソール・タイプ値が時間内に取得されなかったという、DASD の報告が遅延する場合があります。これらのケースでは、コンソール・サービス機能を使用して、コンソール・タイプ値を設定するか、またはコンソールの接続を再度試行します。

システム参照コード A6005082

ここでは、システム参照コード (SRC) A6005082 が出される理由として考えられるものをいくつか示します。

- システムがこの SRC を表示する場合は、通常、コンソールは検出されたがコンソール接続が失われたことを示しています。
- コンソールが再割り当てされ、システムがコンソールを検出すると、SRC は表示されなくなります。
- コンソール・タイプはこの SRC に影響しません。
- 在席モードの IPL のみで発行されます。

システム参照コード A9002000

ここでは、システム参照コード (SRC) A9002000 が出される理由として考えられるものをいくつか示します。

- システムがこの SRC を表示する場合は、通常、IBM i オペレーティング・システムによってコンソールが検出されなかったことを示しています。
- システム値 QAUTOCFG を ON に設定する必要があります。オフになっていると、IBM i は新規コンソール装置を作成できません。
- コンソールをあるタイプから別のタイプへマイグレーションした後で、新しいコンソールが IBM i 上で作動しない場合は、別のワークステーションを使用して、古いコンソール装置に関連付けられた制御装置記述および装置記述を手動で削除することが必要な場合があります。

注: コンソール・サービス機能 (65+21) を使用して、リカバリーの支援やデバッグ・データの収集を行うこともできます。

IPL ステップ C6004031 が予想以上に時間がかかる

IBM i オペレーティング・システムを使用して、コンソール用のハードウェア・リソースを検出できません。

他に検出されるコンソール対応リソースや、バスの走査にかかる時間に応じて、このアクティビティによって、開始プロセスの中のこの IPL ステップで費やされる時間が増加しました。

リモート・コントロール・パネルに関する問題のトラブルシューティング

初期接続をセットアップするときに、コントロール・パネルへのアクセスに関する問題が発生する場合があります。

リモート・コントロール・パネルが開始に失敗する

リモート・コントロール・パネルを開始できない場合は、次のことを確認してください。

- ケーブルが正しく接続されていることを確認してください。
- リモート・コントロール・パネルの開始に失敗する理由として、使用されているユーザー ID または保守ツール装置 ID のいずれかが、リモート・コントロール・パネルの使用を許可されていないことが考えられます。

モード機能を使用できない

モード機能が使用できない場合は、認証接続に、リモート・コントロール・パネルのモード機能を使用するための正しい特権があることを確認してください。

リモート・コントロール・パネルまたは仮想コントロール・パネルでモード機能を使用できない場合は、接続 (保守ツール・サインオン) を認証したユーザーが、接続した区画に対する「区画リモート・パネル・キー」特権を持っていることを確認します。

区画への接続に対して適切な特権があることを確認するには、以下のステップに従います。

1. 専用保守ツール (DST) にアクセスします。
2. 「DST 環境の処理」を選択します。
3. 「保守ツールのユーザー・プロファイル (Service tools user profiles)」を選択します。
4. 「特権の変更 (Change privileges)」(オプション 7) を選択します。

モード機能を使用するには、そのユーザーには区画ごとに特権「**区画リモート・パネル・キー**」が認可されている必要があります。システムでキースティックがサポートされている場合、モード機能が活動状態になる前に、キースティックを挿入する必要があります。

関連情報

保守ツールへのアクセス

認証問題

ここでは、認証に関する 2 つのよくある問題と、それらを修正するための提案を示します。

デフォルトでシステムは、アクセス・パスワードを自動的に作成および保守します。このアクセス・パスワードを、ユーザーが「**プロパティ**」で手動で変更すると、ユーザーはこのパスワードの制御権を受け取り、接続するたびにパスワードを指定しなければなりません。これにより、次の認証問題が発生する可能性が高くなります。

- 認証できない。

エラー・メッセージ: 現在入力されているアクセス・パスワードは有効ではありません。有効なアクセス・パスワードを入力してください。(The current access password entered is not valid. Please enter the valid access password.)

このメッセージは一般に、ユーザーが「LAN 保守ツール・サインオン」ウィンドウに入力したアクセス・パスワードが、「**プロパティ**」でアクセス・パスワードを手動で入力した際に入力したパスワードと異なることを意味しています。「Caps Lock」がアクティブになっていないことを確認し、使用した大/小文字の区別を考慮しながら、割り当てたパスワードをアクセス・パスワードに再入力します。

- リモート・コントロール・パネルに接続できない。
- | エラー・メッセージ: PC 保守ツール装置 ID のパスワードと IBM i の保守ツール装置 ID のパスワードが一致していません。保守ツール装置 ID (名前) がすでに使用されているか、この PC および IBM i のパスワードを RESET する必要があります。
- | これは、保守ツール装置の ID パスワードが正しくないことを示しています。
- | PC に保存されている保守装置の ID パスワードが、システムに保存されているものと一致していません。このパスワードの同期が崩れてしまい、PC とシステムの両方で、最初のデフォルト値に戻さなくてはならなくなる場合がごく稀にあります。

関連概念

53 ページの『オペレーション・コンソールの単純化』
オペレーション・コンソールを使用すると、保守ツール装置 ID の作成、アクセス・パスワードの管理、およびシステムの検出を自動的に行うことができます。

関連資料

57 ページの『PC と保守ツール装置 ID のパスワードの再同期』
デフォルトでは、保守ツール装置 ID およびパスワードは、システムで作成および保守されています。パスワードの再同期を手動で行う必要はありません。しかし、システム・オプション「保守ツール装置 ID の自動作成 (Autocreate service tools device IDs)」の値が 0 に設定されている場合は、ID およびパスワードを手動で管理する必要があります。

構成ウィザードの問題のトラブルシューティング

ここでは、オペレーション・コンソール構成ウィザードの実行中に起こる問題に対する解決策について説明します。

古いネットワーク・データがネットワーク接続の再構成を妨げる

ネットワーク (LAN) 上のローカル・コンソールを構成しているときに、ユーザーが繰り返し古い (間違っている可能性がある) IP アドレスを渡されるが名前を変更しない限りそのシステムにアクセスできない場合、PC 上のホスト・ファイルを編集する必要がある場合があります。そのファイルを編集して問題の項目を除去する必要があります。

注:

1. PC のホスト・ファイルにある古い項目を除去または変更する方法もあります。検索などを実行してホストを探し、見つかったら、そのファイルをダブルクリックして、デフォルトのエディターを開始します。
2. 新規の構成への接続を試行する前に、オペレーション・コンソールを閉じて再始動する必要があります。このアクションにより、あらゆる古い構成に関連付けられたすべてのキャッシュ値が除去されます。

その他のオペレーション・コンソールの問題のトラブルシューティング

ここでは、他のトラブルシューティング・セクションに記載されていないオペレーション・コンソールの問題を扱います。

オペレーション・コンソールが QCTL に残る

この状態は、通常マイグレーション後に起こりますが、リソースを処理しているときにはいつでも起こる可能性があります。QCONSOLE が別のワークステーションに再割り当てされるはずの場合でも、QCTL に依然として残っています。

DEBUG をオンにしてシステムで IPL を実行していなかったことを確認してください。開始した対話式サブシステム (存在する場合) が他に存在しないと、他のコンソールも存在しない可能性があるのが都合です。SYSVAL QIPLTYPE が 0 であることを確認してください。

注: 新しいコンソールが IBM i 上で作動しない場合は、別のワークステーションを使用して、古いコンソール装置に関連付けられた制御装置記述および装置記述を手動で削除することが必要となる場合があります。

システム要求が作動しない

ここでは、システム要求が作動しない場合の解決策を示します。

オペレーション・コンソールを使用する場合、「**SYSREQ**」は「**Shift+ESC**」と同等になり、PC5250 エミュレーションのデフォルトとして定義されます。

ほとんどのキーボードには「**Print Screen**」キーがあり、「**SYSREQ**」としてもラベル付けされ、そのキーを「**Ctrl**」キーと同時に使用すると活動化されます。ただし、Windows では、そのキーは「**Print Screen**」機能のために確保されています。

キーを変更するには、PC5250 ではなくオペレーティング・システムを使用して、キーボードを再マップする必要があります。

パスワードの逸失または失効、または使用不可のユーザー ID のため、サインオンできない

この情報は、テークオーバー機能が作動しないときの問題を訂正する場合に使用できます。

特別な「DST サインオン (DST sign-on)」画面で、ユーザー ID が使用不可、またはパスワードの失効のいずれか理由でサインオンできない場合は、以下を実行してリカバリーの最初のステップを試行してください。

1. 一般にコンソールとなる資格がある他の装置 (PC) が接続されていないことを確認する。
2. コンソール・サービス機能 (65+21) を、65、21、21 を使用して実行する。

これにより、コンソールが一時的に失われます。その後、システム状態に対応するサインオン画面により、その装置がコンソールになります。その装置が現行のコンソール・タイプ設定に一致していることが前提です。例えば、コマンド入力のために、システムに対して IPL を実行した場合は、「IBM i サインオン」画面が表示されます。次に、ユーザーは、権限のあるユーザー ID を使用してサインオンし、問題の発生した DST ユーザー ID のリカバリーを継続できます。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

ユーザーは選択したオプションを実行できません

ここでは、「ユーザーは選択したオプションを実行できません (The user cannot perform the option selected)」というメッセージを受け取る場合の解決策を示します。

このメッセージは、次のような状況で受け取る可能性があります。

- ネットワーク (LAN) 構成でのローカル・コンソールで作業している。
- SST 内の「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work With Service Tools User IDs and Devices)」ウィンドウにある「保守ツール装置 ID」オプションにアクセスを試みた。

このエラー・メッセージは、オプションがアンロックされていないことを示します。オプションをアンロックしてから処理を続行してください。

関連タスク

52 ページの『SST での保守ツール・デバイス ID のアンロック』

「保守ツール・ユーザー ID および装置での処理 (Work with service tools user IDs and Devices)」オプションを使用して、システム保守ツール (SST) からオペレーション・コンソールの構成データを変更できます。

オペレーション・コンソール関連情報

Web サイトやその他のインフォメーション・センターのトピック・コレクションには、オペレーション・コンソールのトピック・コレクションに関連した情報が含まれています。PDF ファイルは、すべて表示または印刷できます。

Web サイト

- IBM i Access の Web サイト (英語)  (<http://www.ibm.com/systems/i/software/access/>)

この Web サイトには、IBM i Access およびオペレーション・コンソールに関するオンライン製品情報が含まれています。

その他の情報

- IBM i Access for Windows: インストールおよびセットアップ

このトピック・コレクションでは、システムおよび PC 両方での IBM i Access for Windows のインストールおよび構成方法について説明しています。システムと PC の両方でインストールおよび構成が必要です。

- 論理区画化

論理区画を使用すると、単一システム内にリソースを分散し、単一システムがあたかも独立した 2 つ以上のシステムであるかのように稼働させることができます。

- データの移行

このトピック・コレクションでは、1 つのシステムまたは区画から、別のシステムまたは区画にデータを移行する方法について説明しています。データを移行する際には、ソース・システムとターゲット・システムのシリアル番号は異ならなければなりません。

付録. ソフトウェア・トピックの特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒242-8502

神奈川県大和市下鶴間1623番14号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

- 1 以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation

Software Interoperability Coordinator, Department YBWA

3605 Highway 52 N

Rochester, MN 55901

U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、IBM 機械コードのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

- | 本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、このサンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても、責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

- | © (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

このオペレーション・コンソールの資料には、プログラムを作成するユーザーが IBM i のサービスを使用するためのプログラミング・インターフェースが記述されています。

商標

IBM、IBM ロゴおよび [ibm.com](http://www.ibm.com) は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名は、IBM または各社の商標です。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript®、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Pentium は、Intel® Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Linux® は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における登録商標です。

Microsoft®、Windows、および Windows NT® は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

使用条件

これらの資料は、以下の条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

個人使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布（頒布、送信を含む）または表示（上映を含む）することはできません。

商業的使用: これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。



Printed in Japan